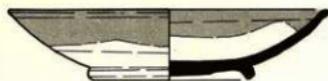


国道365線バイパス工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 I

——高月町柏原遺跡——



西

1980.3

滋賀県教育委員会

財団 法人 滋賀県文化財保護協会

国道365線バイパス工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 I

——高月町柏原遺跡——

1980.3

滋賀県教育委員会

財團法人 滋賀県文化財保護協会

序

柏原・井口遺跡は、およそ80,000m²に及ぶ広大な面積を占める遺跡であり、古墳時代から平安時代にかけて當まれた集落跡です。このたび、そのほぼ中心部に国道365号線バイパスが計画されることになりました。同バイパスは、岐阜県と福井県とを結ぶ幹線道路となるのですが、すでに、湖北町までの部分が開通しており、大型車輛等非常に交通量が多くなっています。しかるに、高月町内に入って、集落の間をぬうような現国道に入るため、交通事故の起る危険性が非常に高い状態となっています。従って、高月町内におけるバイパスの建設が急務となり、滋賀県の要請を受けて、埋蔵文化財の発掘調査を実施することになりました。しかし、遺跡は、バイパス路線内のほぼ全域に及ぶため、調査は、3カ年計画で実施することとしました。本書は、その第1年次に実施した柏原遺跡について、その概要を報告するものです。正報告書は、バイパス全区間の調査終了後に刊行する予定ですが、とりあえずここに概要を報告し、湖北地方の歴史を考えるために一助としていただければ幸いに思います。

最後に、調査に関して、日夜協力していただいた作業員、調査員等関係者の方々に感謝の意を表します。

昭和55年3月

滋賀県教育委員会

教育長 中山 正

目 次

はじめに.....	1
第1章 位置と環境.....	2
イ. 地理的環境.....	2
ロ. 歴史的環境.....	2
第2章 調査経過.....	10
第3章 調査結果.....	11
イ. 遺構.....	11
ロ. 遺物.....	23
ハ. 遺構の分布.....	28
第4章 まとめ.....	31
おわりに.....	31

挿 図 目 次

PLAN 1. 柏原遺跡位置図	1
" 2. 主要遺跡分布図	6
" 3. 柏原遺跡出土遺物編年表	24
" 4. 壁穴住式居跡、掘立柱建物主軸方向図	29
" 5. 柏原遺跡遺構変遷表	30
" 6. 柏原遺跡周辺地形図	73
" 7. 柏原遺跡トレンチ配置図	74
" 8. 第1住居跡（T 1）実測図、出土遺物実測図	75
" 9. 第2住居跡上層・下層（T 2上・下）実測図	76
" 10. 第2住居跡下層出土遺物実測図	77
" 11. 第2住居跡上層出土遺物実測図	78
" 12. 第3、第9住居跡（T 3、T 9）実測図、出土遺物実測図	79
" 13. 第4住居跡（T 4）実測図	80
" 14. 第5住居跡（T 5）実測図、出土遺物実測図、カマド実測図	81
" 15. 第6住居跡（T 6）実測図	82
" 16. 第6住居跡カマド実測図、出土遺物実測図	83
" 17. 第7住居跡（T 7）実測図、遺物出土状況図、出土遺物実測図	84
" 18. 第8住居跡（T 8）実測図、出土遺物実測図	85
" 19. 第1掘立柱建物（H 1）実測図	86
" 20. 第2掘立柱建物（H 2）実測図	87
" 21. 第1井戸跡（BP 1）実測図、断面実測図	88
" 22. 第1井戸跡、BP 2、BP 4、BP 5、BP 6、BP 8、BP 10、BP 13 出土遺物実測図	89
" 23. 第2井戸跡（BP 9）実測図、断面実測図、出土遺物実測図	90
" 24. P51、P53、P D 1実測図、出土遺物実測図	91
" 25. P54実測図、出土遺物実測図	92
" 26. P350、P351、P353実測図、出土遺物実測図	93
" 27. P38、P56、P57、P75、P90、P106、P107、P117、P131、P134、P140、 P142、P147、P152、P156、P181出土遺物実測図	94

PLAN 28. P210、P229、P239、P226、P281、PN300、P305、P317、PN320、PN336、 PN348、P348、P356、P364、P374、P380、P381、P D 5 出土遺物実測図…	96
" 29. 溝1 (M 1) 実測図、断面実測図、出土遺物実測図……………	96
" 30. 包含層出土遺物実測図(1)……………	97
" 31. 包含層出土遺物実測図(2)……………	98
" 32. 包含層出土遺物実測図(3)……………	99
" 33. 第1トレンチ (1 Tr)、第2トレンチ (2 Tr)、第3トレンチ (3 Tr)、 第5トレンチ (5 Tr)、断面実測図、第4—No.1トレンチ (4 Tr—No.1)、 第4—No.2トレンチ (4 Tr—No.2)、第6トレンチ (6 Tr) 柱状断面実測図…	100
" 34. 第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチ、第5トレンチ、第6トレンチ 出土遺物実測図……………	101
" 35. 柏原遺跡全体実測図……………	102

図 版 目 次

PLAN 1. 遺跡付近航空写真

- " 2. 遺構全景（北から）
- " 3. 1) 遺跡遠景（北西から）
 - 2) 遺跡遠景（北西から）
 - 3) 発掘調査風景
- " 4. 1) 遺構検出状況（南から）
 - 2) 遺構全景（北から）
- " 5. 1) 遺構南半部（北から）
 - 2) 遺構中央部（北東から）
- " 6. 1) 遺構中央・北半部（南から）
 - 2) 遺構南半部（南から）
- " 7. 1) 第1住居跡（T 1）((北から))
 - 2) 第2住居跡（T 2）(北から)
 - 3) 第2住居跡上層遺物出土状況
- " 8. 1) 第2住居跡下層遺物出土状況
 - 2) 第3・第9住居跡（T3・T9）(北から)
 - 3) 第9住居跡柱穴内遺物出土状況
- " 9. 1) 第4住居跡（T 4）(東から)
 - 2) 第5住居跡（T 5）(東から)
- " 9. 3) 第5住居跡カマド付近
- " 10. 1) 第6住居跡（T 6）(東から)
 - 2) 第6住居跡（北から）
 - 3) 第6住居跡カマド付近
- " 11. 1) 第7住居跡（T 7）(南から)
 - 2) 第7住居跡遺物出土状況
 - 3) 第8住居跡（T 8）(南から)
- " 12. 1) 第1掘立柱建物（H 1）(北から)
 - 2) 第1掘立柱建物（西から）
 - 3) 第2掘立柱建物（H 2）(北から)

- PLAN13. 1) 第1井戸跡 (B P 1) (南から)
2) 第1井戸跡近景
3) 第1井戸跡遺物出土状況
- 〃 14. 1) 第2井戸跡 (B P 9) (西から)
2) P51
3) P51遺物出土状況
- 〃 15. 1) P53
2) P94
3) P94遺物出土状況 (墨書き器)
- 〃 16. 1) P D 1
2) P350
3) P351
- 〃 17. 1) P353
2) P131
3) P156
- 〃 18. 1) 第1・第2トレンチ (南東から)
2) 第4--No. I トレンチ (北西から)
3) 第6トレンチ (北西から)
- 〃 19. 出土遺物
- 〃 26.

例　　言

1. 本書は、滋賀県が施行する国道365号線バイパス工事に伴う高月町柏原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、昭和53年度に発掘調査を実施し、昭和54年度に整理したものの成果である。
3. 本調査は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
4. 調査及び整理業務参加者は次のとおりである。

滋賀県教育委員会 技師 田中勝弘

財団法人 滋賀県文化財保護協会

事務局長 井上剛

事務員 泉良子、松木暢弘

調査員 林純

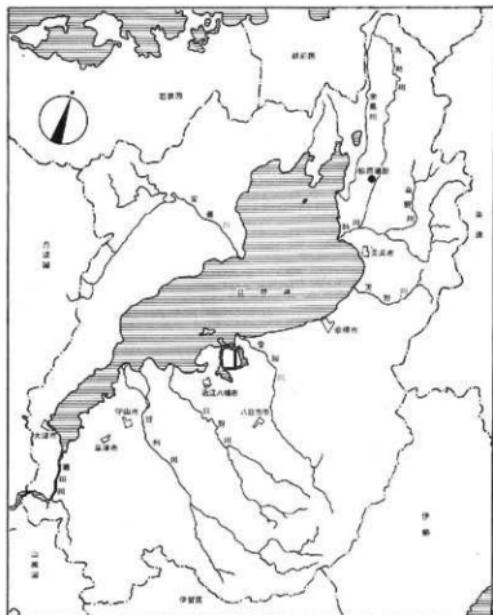
調査補助員 宮崎雅美、山岡一郎、吉元達成、小牧正明、齊藤和弘、丸岡一成、赤坂博之、北川楨之、橋田祐子、尾崎章子、田中聰一、石本好典、岡井誠、加藤栄司、野口千栄美、藤田早苗、北脇泰久、藤井益大、岸本好弘、井塙哲夫、多賀健次、馬場重信、徳永直樹、児玉治見、平通茂、田村稔、菊池久美、大内裕子、青木千枝。

5. 本書は、本文、図版とも林純が執筆作成した。

はじめに

本遺跡は、国道365号線バイパスの計画策定段階で実施した分布調査により発見した遺跡である。国道365号線バイパスは、すでに、湖北町までが完成しており、敦賀方面と結ぶこの交通路の交通量は多く、高月町内では、現国道が狭く、村落内を通過して国道8号線へぬけるため、バイパスの早期開通が地元の大きな要望であった。従って、滋賀県の要請により、急撫事前調査を実施することとなったのである。しかし、遺跡は、高月町の路線内ほぼ全域に及ぶ広大なものであり、調査は、少なくとも3ヵ年を要すると考えられた。昭和53年度がその1年目に当り、本書は、その発掘調査の結果の一部である。

なお、調査にあたっては、高月町教育委員会、地元柏原区の方々、滋賀県木ノ本土木事務所の方々にお世話をなった。ここに記して感謝の意を表します。



PLAN 1 柏原遺跡位置図

第1章 位置と環境

イ. 地理的環境

南北に細長い形から、楽器の名を冠したといわれる琵琶湖は、いくつかの断層の陥没によって形成された構造湖である。その琵琶湖北岸にある湖北平野のさらに北端部に位置するのが、今回、発掘調査を実施した柏原遺跡である。

柏原遺跡は、現在の行政上では伊香郡高月町柏原字北路・北町・内戸にまたがっている。また、古代律令体制下の郡郷制では、伊香郡柏原郷（加之波波良郷）にあたっていたと推定される。^①

湖北平野は、姉川・高時川・田川・草野川・天野川・余呉川各河川の藩籬たる沖積作用で形成された扇状地性の平野と、それに連なる氾濫原・後背湿地及び三角洲からなる。特に湖北平野北部は、西を幾ヶ岳から南へ伸びる地累状の通称西野山丘陵に、東と北を伊吹山系の支脈たる己高山と大箕山に囲まれ、南のみが開けた地勢となっている。この幅4km、奥行き10kmの狹長な平野部は、東側を流れる高時川と西側を貫流する余呉川の賜物と言って過言ではない。高時川は、遠く伊吹山系三国ヶ岳に源を発し、杉野川の水を合わせて、旧部山東麓で平野部に出て、直に南流し湖北平野中央で姉川と合流し琵琶湖へ注ぐ。その過程で随所に自然堤防や後背湿地を形成している。柏原遺跡も、この高時川右岸の自然堤防上に占地し、現況でも周囲の水田面より約1mの比高差を測る。

湖北平野は、古くから交通の要衝であった。北国街道を北上すれば越地方に、脇往還道を東進すれば間ヶ原を経て美濃・尾張地方に通じ、さらに南下すれば中仙道（東山道）・東海道を経て畿内中枢部にも至る。このような地理的条件は、戦略的要衝として、政治・経済的に、わけても軍事的に勝れた位置を占めていたことを想像させる。

なお、柏原遺跡の現標高は、海拔111.5mであって、琵琶湖湖面との比高差は約26.5mを測る。

ロ. 歴史的環境

南北に狭長な湖北平野北部は、その地理的重要性から文化の回廊としての働きだけでなく、肥沃な大地に恵れ古くから人類の足跡が刻まれて来た。現在、確実に旧石器時代と思われる遺物の出土例は知らないが、縄文時代以降は人類の生活の場として活況を呈して来た。そこで、湖北平

野北部の歴史的環境の展開を見てみよう。

縄文時代 縄紋時代の遺跡は、高時川上流と余呉川河口付近に集中を見るが、発掘調査が実施されたものではなく、実態は必ずしも明確ではない。高時川上流域では、高時川が平野部に出る木ノ本町川合や石橋付近の左岸段丘上に縄紋土器や石斧・石棒・石鎚・石錐等を出土した古橋遺跡や上ノ山遺跡がある。右岸段丘上には、同じく石斧や縄紋土器・環石を出した川合遺跡や栗谷遺跡の分布が知られる。余呉川河口付近では、湖北町尾上浜遺跡や余呉川口遺跡が見うけられ、さらに河口沖合の葛籠尾崎沖湖底遺跡がある。^③ これからは早期から晩期にかけての土器が引き上げられ、その特異性が注目されている。また、柏原遺跡北約1kmの井口集落内で石棒が採集されており、この付近にも遺跡の存在が知れる。

弥生時代 水稲農耕を生活基盤としていた弥生人にとって、湖北平野は恰好の場所であったろう。しかしこれまで前期に遡る遺跡は知られなかったが、近年の圃場整備に関連し相次いで発見された。余呉川中流域の高月町磯野の妙光庵遺跡では土塙内から畿内I様式に属する土器を出土した。^④ また、高時川下流の湖北町大安寺遺跡でも畿内I様式に属する甕が発見され、余呉川河口沖合の湖北町尾上浜遺跡からも引き上げられている。^⑤

中期の遺跡は、今のところ井口遺跡から畿内III~IV様式に属するかと思われる流水紋系の土器^⑥ が少量出土しているのみである。

弥生時代も後期に入ると、遺跡は急増する観がある。大岩山と大箕山が両側から迫る谷あいに余呉町櫻内遺跡・坂口遺跡の集落跡があり、さらに長山遺跡・東山遺跡の墳墓群が近接して見られ、特異性が注目される。平野部に出で、高月町大海道遺跡や余呉川中流の円通寺遺跡でも包含層を確認している。余呉川下流域では、尾上浜遺跡からも湖中より引き上げられ、高時川の下流では丁野山上の湖北町丁野遺跡で弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土塙墓群と方形周溝墓（台状墓）が検出された。^⑦ その下流の虎姫町五村遺跡でも方形周溝墓を発見し、大寺遺跡・田遺跡・中野遺跡からも遺物の出土が知られる。雲雀山東麓の湖北町伊部遺跡からは、畿内V様式の特徴を示す土器の一括資料が出土した。

古墳時代 古墳の出現という社会的に勝れた事象をメルクマールとする古墳時代は、国家発生期の時代でもあった。現在、前期に属する古墳として、西野山丘陵南端の一支脈上に占地する湖北町若宮山古墳（古保利第3号墳）^⑧ が挙げられる。これは、全長50mを測る所謂「柄鏡形」の前方後円墳で、4世紀後半に位置付けられている。また、虎御前山南端の虎姫町丸山古墳からは、後漢鏡が発見された。

次に中期の古墳を観てみよう。まず、西野山丘陵尾根上に、墳丘を相接して110基から成る高月町古保利古墳群がある。この内には10基の前方後円（方）墳も数えられる。独立丘の湧出山尾根上にも前方後円墳2基と円墳8基から成る湧出山古墳群が見られる。昭和54年、北陸自動車道

に関連してその内の円墳1基が発掘調査され、墳径18mで二段に埴輪列を廻し、竪穴式石室内に仿製鏡1面と玉類・武器類を副葬した5世紀後半の古墳であることが明らかになった。北国街道を日下に望む大箕山西麓の余呉町長山古墳群や長野古墳群が昭和52年～53年に相次いで調査された。長山古墳群は円墳20基と方墳1基から成り、第4号墳は墳径16mの墳丘に葺石を有し、2基の木棺直葬の主体部相方から、短甲を始め鉄劍・鉄斧・鉄矛等を出土した5世紀後半の所産であった。長野古墳群は方墳2基と後期古墳から成り、方墳は一辯23.5mの比較的大型に属するものが並列し、木棺直葬の主体部より鉄劍等の武器類を副葬した5世紀前半の古墳である。さらに、目を南に転じ高時川中流左岸に見える岡山の尾根上には、湖北町岡山古墳群が存在している。これは、前方後円墳2基と円墳数基から構成された古墳群である。前述の諸古墳群が丘陵上に立地するのに対し、湖北平野北部の平野部に物部古墳群と総称される古墳群がある。これには、前方後円墳の高月町姫塚古墳・長塚古墳・兵主神社古墳があつて周濠を有するものも見られる。円墳としては、父塚古墳・大将軍古墳・五位塚古墳・瓢塚古墳・生塚古墳等が知られている。また、この物部古墳群から離れ、田部山南麓に瓢箪塚古墳がある。

前・中期の集落跡としては、前述の坂口遺跡・桜内遺跡の他に、大岩山南麓の黒田遺跡からは工場建設の際に、古式土師器が出土したと伝えられ、余呉川中流域の高月町円通寺遺跡では、素掘りの溝より庄内式併行期とされる一括資料が得られた。河口付近の湖北町今西遺跡からは布留式併行期の竪穴住居跡が検出されている。高時川流域では、大海道遺跡でも布留式併行期の竪穴住居跡が発見された。高時川の支流、田川上流の虎御前山西麓では、最近の圃場整備事業に関連し、湖北町留目遺跡が発掘調査され、布留式併行期の土塙墓群が発見された。高時川と姫川の合流付近の、びわ町難波遺跡からも同時期の遺物が出上している。

古墳時代後期は、その社会的変革に起因して、群集墳を爆発的に現出させた時代であった。したがって、群集墳を逐一詳説することは不可能に近い。ここでは主なものだけを羅列する。湖北平野北部の西側で、まず大岩山東麓に余呉町坂口西山古墳群、南麓に黒田古墳群、賤ヶ岳南麓に木ノ本町大音古墳群。左近山東麓には、西山古墳群や小山古墳群がある。磯野山の南麓に高月町寺山・宮山古墳群と山畑古墳群が見られる。東側に廻って、大箕山西麓に余呉町上ノ山古墳群、山田山の西麓部では木ノ本町馬場木古墳群が見られ、南麓では湖北町大城古墳群や山田山古墳群が存在している。また小谷山西麓には赤谷古墳群が知られ、岡山丘陵付近で中谷古墳群、虎御前山には四郷崎古墳群、飯喰山古墳群、天目山古墳群等の存在が挙げ得る。この時代の集落跡・工房跡としては、先に述べた余呉町の桜内遺跡や高月町の大海道遺跡、井口遺跡で多数の竪穴住居跡や掘立柱建物が発見されている。湖北町今西遺跡でも集落跡の一端が明らかにされた。また、発掘調査を行っていないため実態は明らかではないが、高月町熊野遺跡やびわ町難波遺跡も集落跡と思われる。高月町の高月遺跡から子持勾玉が出土し、玉類や砥石を出した木ノ本町石作（玉

作) 神社遺跡は工房跡と推定しうるものもある。

飛鳥時代～平安時代以降 この時代の集落跡は、多くが古墳時代後期から継続的に営まれ、桜内遺跡や大海道遺跡、井口遺跡等の大規模な集落が見られ、数十～数百単位で竪穴住居跡・掘立柱建物が検出されている。

古代寺院跡は、字名から推定されているものが大半で、実態は必ずしも明らかではない。その中でも、瓦や礎石が発見されているものとして、湖北町小江寺遺跡や浅井寺遺跡があり、びわ町の満願寺遺跡は白鳳期とされている。高月町では、平安時代の創建とされる松尾寺^春遺跡や、大海道遺跡や井口遺跡でも集落跡内にあって氏寺の性格を持つと思われる奈良時代の寺院跡が発見されている。式内社について見ると、近江全体で144ヶ所155座を数えるが、伊香郡がその $\frac{1}{3}$ の45ヶ所45坐を占め、湖北平野の開発の早さを物語る。主なものを挙げると、木ノ本町の伊香具神社、意富布良神社、佐波加刀神社、与志瀬神社、石作・玉作神社があり、高月町では、兵主神社、天八百列神社、甘磯前神社、天比比岐神社、乃伎多神社が見られる。また、柏原遺跡の北西約200mの字藤の宮には、豊城八彦命を祭神とした佐味神社跡も遺っている。

古代律令体制の経済的根幹を成した条里制は、湖北平野のほぼ全域に施行されているが、山本山と小谷山を結ぶラインの以南と以北で若干のズレが指摘される。柏原遺跡や井口遺跡周辺の水田にも最近まで顕著に遺っていたが、遺跡の占地する微高地上には見られず、条里制施行時にこれら微高地が集落や墓地として利用され、あるいは水田不適地であったものと思われる。

莊園制は、8世紀から16世紀まで続いた汎日本の土地所有形態で、湖北平野にも多くが知られる。伊香郡では、木ノ本町付近で平安後期に弘福寺領の伊香荘があり、鎌倉期になると伊香中荘が成立した。高月町付近では、平安後期に郡荘と山門管領青蓮門院領の臺永荘が見られる。東浅井郡には、平家領の今西荘、春日社領の浅井荘、速水荘、川川荘が散見される。



PLAN 2 主要遺跡分布図

Tab. I 主要遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	時代	立地	出土遺物	文献名・調査年度
1	坂口遺跡	集落跡	弥生後期～古墳前期	丘陵	弥生土器・古式土師器	
2	上ノ山古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵	須心器・馬具・繩紋土器	「北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ 1976」
3	長山古墳群	古墳群	古墳中期	丘陵	弥生土器・須心器・短甲・銛劍等	1977年～1978年調査
4	桜内遺跡	集落跡 墳墓群	弥生後期～奈良時代	扇状地	弥生土器・占式土師器・須心器	1977年から調査続行中
5	點田長野古墳群	古墳群	古墳中期～後期	丘陵	占式土師器・銛劍	1978年調査
6	坂口山西古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵		
7	黒田古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵		
8	畠田遺跡	集落跡	古墳前期	平野部	古式土師器	
9	寺山遺跡	集落跡	弥生時代	丘陵	石斧	
10	栗谷遺跡	集落跡	繩紋時代	丘陵	石斧	
11	中尾遺跡	古墳群	古墳後期	丘陵		
12	古橋遺跡	集落跡	繩紋時代	丘陵	繩紋土器・石斧・石棒・石鏡・石斧等	「有鐵・石斧」 滋賀県報告第1冊「有史以前の近江」
13	大音古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵	須心器・鏡・金環	
14	西山古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵		
15	法光寺遺跡	寺院跡		平野部	須心器	
16	楓草塚古墳	古墳（前方後円墳）	古墳中期	平野部		
17	石道古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵	須心器・管玉	
18	馬場末古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵		
19	高野遺跡	寺院跡		平野部		
20	大海道遺跡	集落跡 寺院跡	弥生後期～平安時代	平野部	弥生土器・古式土師器・須心器・土師器・瓦	「はたけ集落跡遺跡発掘調査報告書Ⅱ 1975」「Ⅲ-Ⅳ 1976」
21	石作（五作）遺跡	工房跡	古墳時代	平野部	勾玉・砥石	
22	涌出山古墳群	古墳群	古墳中期～後期	丘陵	鏡・銛劍・埴輪・須心器	1978年調査
23	小山古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵		
24	西山山頂古墳群	古墳群	古墳後期	山頂		
25	赤尾古墳群	古墳群	古墳後期	山頂	金環・銛刀・須心器	
26	巾唇谷遺跡	散布地		丘陵	石鐵	
27	兵主神社古墳	古墳（前方後円墳）	古墳中期	平野部		
28	生塚古墳	古墳	古墳中期	平野部		
29	大将軍古墳	古墳	古墳中期	平野部		
30	妙光庵遺跡	集落跡	弥生前期	平野部	弥生土器	1979年調査
31	寺山・宮山古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵	金環・銛環・銛刀・須心器	
32	山畠古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵	家形石棺・玉類・金環・銛刀・須心器	

番号	遺跡名	種類	時代	立地	出土遺物	文献名・調査年度
33	松尾寺遺跡	寺院跡	平安時代	平野部	瓦・礫石・磁器・木器	1978年調査
34	充满寺遺跡	寺院跡		平野部		
35	西野古墳	古墳	古墳後期	丘陵		
36	古保利古墳群	古墳群	古墳中期	山頂		「昭和48年度滋賀県文化財調査年報」
37	船塚古墳	古墳(前方後円墳)	古墳中期	平野部		
38	渡岸寺遺跡	寺院跡		平野部		
39	山田山古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵		
40	大塚古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵		
41	赤谷古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵		
42	高月遺跡	集落跡	古墳時代	平野部	子持勾玉	
43	父塚古墳	古墳	古墳中期	平野部		
44	熊野遺跡	集落跡	古墳後期	平野部	須恵器	
45	大将軍塚古墳	古墳?		平野部		
46	円通寺遺跡	集落跡	弥生後期～古墳前期	平野部	弥生土器・古式土師器	「は場参個關係遺跡発掘調査報告書Ⅱ 1976」
47	岡山古墳群	古墳群	古墳中期	丘陵		
48	雲雀山古墳群	古墳群	古墳中期	丘陵	埴輪・鏡・武具・須恵器	「大阪市大原史学教科紀要第1冊」1953年
49	伊郎遺跡	集落跡	弥生後期	平野部	弥生土器	1979年調査
50	留目遺跡(鶴大屋敷地区)	集落跡	室町時代	平野部	土師器・陶器・磁器	1979年調査
51	留目遺跡(松橋地区)	集落跡	古墳中期	平野部	古式土師器	1979年調査
52	別所遺跡	古墳群	古墳後期	丘陵		
53	四郷崎古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵	鉄劍・鐵鎌・瓦類・須恵器・土師器・弥生土器	「北陸自動車道深澤遺跡発掘調査報告書Ⅱ 1976」
54	巾谷古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵		
55	丁野遺跡	集落跡	弥生後期～古墳前期	丘陵	弥生土器・古式土師器	「北陸自動車道深澤遺跡発掘調査報告書Ⅱ 1976」
56	岡山古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵		
57	天目山古墳群	古墳群	古墳後期	丘陵		
58	姫嶺山古墳群	古墳群	古墳中期	丘陵		
59	頓伝寺遺跡	寺院跡		平野部		
60	里の内遺跡	集落跡		平野部	石斧	
61	若宮山古墳	古墳(前方後円墳)	古墳前期	丘陵		「昭和48年度滋賀県文化財調査年報」
62	尾上浜遺跡		繩文時代～平安時代	湖底	縹紋土器・弥生土器・須恵器・土師器・石器	琵琶湖湖底遺跡の研究
63	小江寺遺跡	寺院跡	白鳳時代?	平野部	瓦	
64	今西湖底遺跡			湖底		
65	今西遺跡	集落跡	古墳前期～後期	平野部	古式土師器・須恵器・黑色土器	「湖北町今西遺跡発掘調査報告書 1974」
66	蓮台寺遺跡	寺院跡		平野部		
67	浅井寺遺跡	寺院跡	白鳳時代?	平野部	瓦・礫石	
68	高木遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代	平野部	弥生土器・古式土師器・須恵器	

番号	遺跡名	種類	時代	立地	出土遺物	文献名・調査年度
6.9	水木遺跡	散布地		平野部	石器	
7.0	西の宮遺跡	船跡		平野部		
7.1	天福寺遺跡	寺院跡		平野部		
7.2	無道寺遺跡	寺院跡		平野部		
7.3	小糸遺跡	散布地	古墳前期～奈良時代	平野部	占式土師器・土師器	「江場整備関係遺跡発掘調査報告書III-Ⅱ 1976」
7.4	大安寺遺跡	散布地	弥生前期	平野部	弥生土器	「同上」
7.5	五村遺跡	集落跡・ 墳墓群	弥生後期～平安時代	平野部	弥生土器・古式土師器・土 師器・須恵器・灰釉陶器・ 木器・巴形鏡等	1979年調査
7.6	丸山遺跡	古墳	古墳前期	丘陵	銅鏡・鐵劍・古式土師器	1978年調査
7.7	中野遺跡	散布地	弥生後期～古墳前期	平野部	弥生土器・古式土師器	
7.8	大寺遺跡	散布地	弥生後期～古墳前期	平野部	弥生土器・古式土師器	
A	柏原遺跡	集落跡	古墳後期～平安時代	平野部	石器・須恵器・土師器・黑 色土器・赫釉陶器・灰釉陶 器・山茶碗・磁器・陶器・ 鐵鍬・鐵劍・瓦	本報告書
B	柏原北遺跡	集落跡	弥生時代・奈良時代 ～鎌倉時代	平野部	石斧・須恵器・土師器・灰 釉陶器・山茶碗・磁器・陶器	1979年調査
C	井口遺跡	集落跡・ 寺院跡	弥生中期・古墳後期 ～室町時代	平野部	弥生土器・須恵器・土師器 ・灰釉陶器・赫釉陶器・山 茶碗・磁器・陶器・黑色土 器・石器・鐵製纺錐車・鐵 劍・木器・古鏡・瓦	「江場整備関係遺跡発掘 調査報告書IV-II 1977」「 V 1978」

第2章 調査の経過

調査は、 $5\text{m} \times 10\text{m}$ の規模を基本としたトレンチを設定し、遺構の有無、遺跡の範囲を確定することから実施した。路線内の状況は、南側に畠地及び竹林、北側に一段低くなる水田であるが、トレンチ調査の結果、周辺より一段高くなっている南側の畠地（路線内85m）に遺構の分布することを確認し、北側水田及び畠地より南側の竹林では遺構を検出することはなかった。従って、調査は、畠地部分を柏原遺跡とし、全面調査に切りかえた。

柏原遺跡の調査は、6月から10月まで要した。以降、現国道365号線以北約100m程を残し、さらに北方の調査を同様の方法で継続し、遺構の存在を確認したが、本古では、現国道365号線以南の柏原遺跡に限って報告することとした。

第3章 調査結果

今回の発掘調査で検出した遺構は、竪穴式住居跡10棟、掘立柱建物跡2棟、井戸跡2基、溝状遺構3条、その他多数の大小土塹である。これらには年代的な幅があるため、まず、個々の遺構とその出土遺物を説明して遺構の年代をおさえ、次いで、包含層遺物をも加えて遺物の編年を試み、最後に、これら操作を通して得られた同時期遺構の配置を説明するという順序で記述していくこととする。

イ. 遺構

i) 竪穴式住居

T 1 (PL 4) 軸線をN 6°20' Eに持ち、南北6m、東西6.25mを計る。方形プランで、床面35.8m²と当遺跡では大型の類である。柱穴や周溝等は認められなかった。また、住居跡の北壁に接してその中央附近で焼土の広がりが見られ、カマドの存在が考えられたが、規模や構造については明らかにし得なかった。

(出土遺物) 須恵器壺蓋、壺身、土師器甕、灰釉陶器皿、塊がある。1・2は、偏平な大井部に低いつまみが付く蓋で、口縁端部は下方に短く屈曲している。3の壺身は、横断面方形の高台が付く。6の土師器甕は、頭部を「く」の字形に屈曲させた粗雑なつくりである。灰釉陶器の4は段皿で、5の塊は、横断面が丸味を帯びた方形の高台が付く。

(時期) 出土遺物のうち須恵器は陶邑MT21や平城宮跡S D 1900乃至S D 485に類似品があり、8世紀前半のものと思われる。出土遺物の中には灰釉陶器が若干混じるが、T 1は、後述するように、同形式の灰釉陶器を出土する第1井戸跡に切り込まれており、T 1の遺存度（深さ平均6cm）から考えても、井戸跡構築時の混入品と思われる。従って、T 1は、須恵器の編年觀によるのが妥当であろう。

T 2下層 (PL 5・6) T 2はT 1の南3.5mに位置する。住居跡西半分は調査範囲外に係り、従って、南北6.55m、東西3.6m以上を計る。軸線はN 4°40' Wにあって、方形プランを呈するものと思われる。住居跡内では、柱穴2基と検出範囲のはば中央で大型の土塹1基を検出した。

(柱穴) 径40~75cmの梢円形の掘り方で、径15cm程の柱底を確認した。掘り方は、床面より20

cm程の深さまで掘り込まれている。

(大型土塙) 長径1m前後、深さ30cmの規模で、横断面が舟底状を呈している。貯蔵穴の可能性もあるが、遺物の出土は顕著でない。

(出土遺物) 須恵器の坏蓋、坏身、壺、甕、土師器の甕がある。1の坏蓋には乳頭状のつまみが付く。2・3では、天井部は偏平で、口縁部との境界は屈曲せず、端部は丸い。4~6は、立ち上りの小さい口縁部を持つ矮小化した坏身である。7・8の坏身は、口縁部が大きく内傾し、短かい。また、全体的に偏平である。9は甕の口縁部で、頸部はゆるやかに屈曲し、凹線を施す。10は壺の口縁部で、外反気味に開いた後、口縁端部を肥厚させ、垂直に立たせている。土師器の甕は大小の2種類ある。11は小型品で、「く」の字形に屈曲させた単純な口縁部を持つ。12は、いわゆる受口状の口縁部を持ち、その端部を外方に突出させている。13~15は頸部の屈曲が大きく、14・15では、端部を上方に短かくつまみ上げている。

(時期) 以上の出土遺物は陶邑T K217や小堀田宮跡定地S D050、難波宮跡東地区下層駄穴等出土のものに類似した特徴を持つ。従って、7世紀初頭頃に位置付けられよう。

T 2上層 (P L 5・7) T 2下層をほぼ重複した形で切り込んで構築されている。南北6.55m、東西4m以上で、西側3分の1程は調査範囲外に入る。住居跡の東南コーナーでカマドを検出したが、遺存度が悪く、規模等は明らかにできなかった。南北軸線はN 8°50' Wを示す。

(出土遺物) 住居跡内出土遺物は、須恵器の坏蓋、坏身、壺、鉢、土師器の甕、甕、灰釉陶器の長頸壺である。1~4の坏蓋は、やや偏平な天井部に、中高のつまみが付き、天井部から緩やかにのびて口縁部に移行し、端部は下方に短かく屈曲する。坏身の5~8は、体部が直線的に開き、口縁端部をわずかに外反させている。9は、直線的に開く体部に高台が付く。10・11は、外反気味に大きく開いた体部に、外方に踏んばった高台が付く。12は逆「ハ」の字形に開く厚手の鉢である。13は、わずかに開くが垂直に近い壺の口縁部である。14は、口縁部がやや内反気味に開き、その端部を肥厚させて面をなす壺で、体部外面にカキ目を施す。15は灰釉陶器の甕で、長頸で、外反する口縁部に上下に肥厚して外側に面を取る口縁端部が付く。肩部は丸味を帯びる。土師器の16・17は小型の甕で、体部は内側して浅く、口縁端部は短かく屈曲して上方につまみあげている。体部内面には、暗紋を密に施している。18は、外方にふんばる高台の付く大型甕である。19は、頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部が肥厚する小型の甕である。20は、いわゆる受口状に屈曲した口縁部を持つ甕である。

(時期) 出土土器類は、陶器M T21や平城宮跡S D1900、S D 485あるいは藤原宮跡II aに類品があり、住居跡の年代は8世紀前半頃におくことが可能であろう。

T 3 (P L 8) T 3はT 9を切って構築されている。南北4.3m、東西3.4mを計り、床面積14.6m²と小型の住居跡である。住居跡の東南コーナーでカマドの痕跡と思われる焼土塊、また、

柱穴と思われるものを3ヵ所で検出した。なお、軸線はN 12° 46' Eを示す。

(柱穴) 3ヵ所のうち、東北コーナーのものは壁面に接している。掘り方は径35~65cmの楕円形で、柱痕は径20cmを計り、床面より20cm程の深さがあった。

(出土遺物) 1・2は須恵器の壺蓋で、偏平な天井部に偏平なつまみが付く。口縁部に屈曲が見られ、端部は下方に短かく屈曲する。3は須恵器の杯身で、口縁部はやや外反して尖り、体部は直線的に開く。底部との境界は明瞭な稜を取る。その他に、土師器の壺と甕がある。

(時期) 上記遺物のうち、特に須恵器類は平城宮跡 S K 820、S K 219に類似し、陶邑 T K 7 よりはやや古式の特徴を呈している。従って、8世紀後半の早い時期のものと考えられ、住居跡の年代もこのころにおけるよう。

T 4 (PL 9) 住居跡の西南コーナー部分のみ調査し得た。しかし、周溝、柱穴、カマドの存在を確認することができた。カマドは焼土を検出したのみで規模等は明らかでない。

(周溝) 幅30~40cm、深さ12cmの横断面逆台形を呈する。

(柱穴) 長径50cmの掘り方で、柱痕は径20cm程である。床面から13cm程掘り込まれている。

(出土遺物) 須恵器の杯身と土師器の甕があるが、細片で図示し得ない。

(時期) 出土遺物が細片であるため断定できないが、およそ9世紀前半頃の特徴を示している。

T 5 (PL 10) 南北2.9m、東西2.2m以上で、西側は調査範囲外に係る。深さ15cmまで遺存し、北壁及び南壁に沿っては、幅10~15cm程が床面より一段高くなっている。柱穴や周溝ではなく、カマドが住居跡の東南コーナーよりやや北側で検出された。なお、住居跡南北軸線はN 3° 20' Wにある。

(カマド) 平面は馬蹄形を呈し、焚口幅37cm、最大幅63cm、長さ52cmを計る。床面は凹み、その中に炭化物、灰に混って、土師器甕、須恵器の壺蓋等の破片が出土した。また、カマドと住居跡東南コーナーとの間は壁面より外側に張り出しており、煙道があった可能性がある。

(出土遺物) 須恵器の壺蓋と土師器の甕及び甕である。1の壺蓋は、偏平な天井部に中高のつまみが付き、口縁部の屈曲はなく、内側に小さな突起が付く。2の甕は、口縁部を内側に折り返し、体部内面には密に放射状の暗紋が見られる。

(時期) 上記の出土遺物が陶邑 T K 217 でもやや新しく、T K 48等に類似し、飛鳥第III期や湖西線関係遺跡V D区大溝の一括資料に近似しているところから、当住居跡は7世紀後半の所産と考えられる。

T 6 (PL 11・12) 南北4.73m、東西3.3mで、やや南北に長い長方形プランを呈す。当住居跡では、住居跡の東南コーナーの北寄りでカマドを検出するとともに、住居跡内で4本の主柱穴、住居跡外側で12本の支柱穴を検出した。なお、住居跡の南北主軸はN 3° 30' Wにある。

(カマド) 平面「コ」の字形で、幅70cm、長さ45cmの規模を持つ。焚口幅は55cmを計る。この

カマドと南壁との約1m程の間は、幅約40cm内側に張り出しており、煙道と考えられる。

(柱穴) 住居跡内の主柱穴は4基で、径35~45cmのはば円形の掘り方で、深20cm前後の柱痕を検出している。支柱穴は12本で、住居跡の外側にあって、各コーナーに1本、各辺に2本ずつ配されている。柱痕を確認することはできなかったが、径35cm程の掘り方である。

(出土遺物) 須恵器の壺身、壺、土師器の甕、鉢が出上している。1の壺身は、体部は内唇気味に開き、底部はやや丸味を持つ。2の壺は低部のみで、低い高台が付く。3の甕は小型で、体部は球体に近く、受口状の口縁部を持つ。4は、頸部が「く」の字形に屈曲する単純口縁の甕である。5は、口縁部が大きく外反し、体部は球体に近い。

(時期) 上記出土遺物は、9世紀前半とされる陶邑TK7や平城宮跡SD650^参、長岡京跡SD51等に類似しており、住居跡の年代をここにおくことができよう。

T7 (PL13) T2の南4mに位置する。住居跡の東北部のみ調査し得たにとどまるが、周溝と柱穴の存在を確認できた。軸線はN9°15'Wにある。

(柱穴) 径35cmの円形の掘り方で、深さ20cmまで掘り込まれている。

(周溝) 壁面に沿い、幅15~20cm、深さ7cmで逆台形の横断面を呈す。

(出土遺物) 須恵器の壺身と土師器の甕、皿がある。1の壺身は、わずかに肥厚して外反する口縁部と丸味のある底部を持つ。2では体部は直線的に開く。4の土師器皿は口縁内面に凹線がめぐる。甕には大小2種あり、4は頸部を「く」の字形に屈曲させた小型のもの、5は「く」の字形の頸部に端部を肥厚させて下方に垂れ、外側に面を取る口縁部を持つもので長胴の甕である。

(時期) 陶邑MT21や平城宮跡SD1900、SD485に類する土器類を出土しているところから、8世紀前半の遺構と考えられる。

T8 (PL14) T1の西側に一部接して構築されている。南北5.9m、東西は2.1m以上で、西側は調査範囲外に入る。周溝はなく、カマドも調査範囲内では検出できなかった。軸線はN9°20'Wにある。

(柱穴) 住居跡の東北コーナーで、径50cmの円形の掘り方で、深さ20cmのピットがあった。柱穴の一つである可能性がある。

(出土遺物) 1は須恵器の壺蓋で、天井部は扁平で、口縁部との境界は不明瞭である。2は内唇気味の体部と肥厚して直立する口縁部を持つ須恵器壺身。3では横断面方形の低い高台を持つ。4は土師器の碗で、口縁端部を内方に折り曲げている。暗紋はない。

(時期) 1の壺蓋は古墳時代に入るものであるが、その他のものは陶邑TK7、長岡京跡SD51、平城宮跡SD650等に類似し、従って、住居跡は9世紀後半に比定するのが妥当であろう。

T9 (PL8) T3に切り込まれている。東西4.2m、南北3.1mで東西に長い長方形プランを呈す。軸線はN71°Wにあり、柱穴、周溝を検出したがカマドはない。

Tab. 2

柏原遺跡・豎穴住居跡・掘立柱建物一覽表

(柱穴) 径50~60cmの掘り方で、径20~25cmの柱痕を残すものを4本が住居内に配されている。
(周溝) 東側柱穴間を結び、東北及び東南コーナーで切れる。幅20cm、深さ10cmで垂台形の横断面をなす。

(出土遺物) 須恵器の他に鉄製鎌が出土した。1・2は口縁部が大きく内傾して短かく、偏平な体部を持つ环身。鉄製鎌は、長さ12.5cm、幅2.2cmで内彎したもの。柄との取り付け角度は鈍角である。

(時期) 須恵器环身は陶邑T K217、小野田宮推定地 S D050、飛鳥第I期に類し、鎌もこの頃のものとして大過なく、7世紀初頭の住居跡とできる。

ii) 挖立柱建物

H1 (PL15) 南北4間(7m)、東西5間(8.72m)でN72°Eに軸線がある。柱穴は径(辺)60~90cmの楕円形乃至方形で、柱間は南北が1.75mと等間隔であるが、東西は1.86m×1.5m×1.5m×2.0m×1.86mとなる。

(時期) 直接資料はないが、後述するピットの切合の関係から8世紀後半以降とできる。

H2 (PL16) 梁行2間(5.2m)、桁行3間(6.3m)の南北棟で、柱穴は径50~60cmの円形乃至楕円形で、径20cmの柱痕をのこす。梁行は2.6mの等間隔、桁行は南端のみ1.7m、他は2.3mを計る。軸線はN4°Wにある。

(時期) ピット等の切り合い関係から8世紀後半以降である。

iii) 井戸跡

第1井戸跡 (B P 1) (PL17・18) T1を切り込んでいる。径1.8m、深さ1.7mの掘り方で、井戸枠は遺存しなかったが、径約90cmの規模を持つものと考えられた。最下層には小砂利があった。また、井戸跡上部に長さ30~80cmの自然河原石が散り落ちた状態で出土し、井戸肩部の敷石と考えられる。井戸内には、灰釉陶器壺が数個体出土している。

(出土遺物) 5~9の灰釉陶器壺は実形で、口縁端部がわずかに外反し、内彎する高台が付く。猿投古窯跡群の黒符14号~90号窓式に相当するものと思われる。この他、須恵器の环蓋、环身、土師器の甕、釣等が出土している。

(時期) 重複するT1からの混入品もあるが、出土状態から、灰釉陶器の示す時期を以って井戸埋没時期とできる。

第2井戸跡 (B P 9) (PL19) 長径1.5mの楕円形プランを持つ素掘りの井戸跡と思われるものである。深さは0.55mを計る。南側で、径0.9mの土塙が切り込んでいるが、これも井戸跡の可能性がある。

(出土遺物) 須恵器の壺蓋、甕、灰釉陶器の碗、土師器の皿、鉄釘等が出土しているが、井戸跡の時期を示すと思われる灰釉陶器は、3が横断面逆三角形を呈す高い高台を持ち、内弯する体部と肥厚する口縁端部を持つもの、4は内擣して開く体部に外反する口縁端部が付く。

(時期) 灰釉陶器は猿投古窯跡群黒窓14号窯式乃至90号窯式に属し、10世紀代のものである。

iv 溝 跡 (PL. 25)

M1 第3・9住居跡を跨むように東西方向に走り次いで直角に屈曲して北へ伸びる。幅40~60cmで深さ25~40cmあり、横断面は逆台形を呈す人工的な溝である。埋土は、黒褐色土・黄褐色土・暗黄褐色土・暗褐色土の4層に分層し得た。

(出土遺物) 須恵器・土師器・灰釉陶器・磁器が出土している。須恵器1~4の壺身は、体部が直線的に伸び口縁端部を丸くおさめ、低く断面方形の高台が付く。灰釉陶器5は、内弯した深日の体部の皿で高台は低く外方にふんばる。6.7は、内弯する浅い感じの碗で高台は低く丸味を持つ。磁器8は、直線的に開いた深い体部に、所謂「玉縁」の口縁部が付く。白磁碗である。土師器9は、偏平な灯明皿で口縁部と体部の境を凹ませる。10. 体部は浅く口縁部は僅かに「く」字形に屈曲する姿で、全体的に作りは雑である。

これらの遺物のうち、灰釉陶器は猿投古窯跡群の黒窓14号窯乃至35号窯式に属し磁器は、山口県秋根遺跡のII 12類に該当する。

(時期) この溝跡は10世紀代のものと思われる。

M2 第2溝跡は、調査地中央部、第3・9住居跡の北側で検出し、第1溝跡により切られていた。北東から南西方向に弧を描いて走る溝で、幅50~60cm深さ20~30cmを測り、断面は浅いU字形を呈す人工的な溝である。埋土は黒褐色土と黄褐色土に分層し得た。

(出土遺物) 埋土中から須恵器・土師器が少量出土したが、全て細片で図示し得るものはない。

(時期) 出土遺物が細片のため限定しにくいが、その特徴や第1溝跡との切り合い関係から9世紀代の所産であろう。

M3 第3溝跡は、第2溝跡の北約6mにあって、調査地北部の南側で検出した。北東から南西へ弧状に走り、南側で終る。溝跡の幅は40~60cmを測り、深さ20~30cmで断面形は浅いU字形を呈す人工的な溝である。埋土は黒褐色土と黄褐色土に分層し得た。

(出土遺物) 少量の須恵器と土師器が出土しているが、細片のため図示し得ない。

(時期) 出土遺物が細片のため時期を限定するのは困難であるが、あえて土器類の特徴から推定すると9世紀代であろう。

v 土 塚

B P 2 (P L 18) 第2土塚は、調査地南部にあって第2掘立柱建物の柱穴に切られる。プランは不定形楕円を呈し、長径2m短径1.2mで深さ20cmの断面方形である。

(出土遺物) 須恵器1は、天井部と口縁部の境界が屈曲する壺蓋である。2は、直線的に開き口縁端部は丸くおさめる壺身である。

(時期) 出土遺物より8世紀後半であろう。

B P 4 (P L 18) 第1住居跡の南端に位置し、一部それに切られている。プランは不定形な楕円形で、長径4.8m短径3.2m深さ46cmの2段に掘られた土塚である。

(出土遺物) 埋土中より須恵器・土師器・灰釉陶器・瓦及び土鍤が出土している。須恵器1は、膨らみの少ない天井部で、天井部と口縁部の境は稜をとらない壺蓋。土師器2は、小型の壺で外反気味に開く口縁部をもつ。3は、管状の土鍤である。

(時期) 出土遺物は7世紀初頭に位置付けられる。

B P 5 (P L 18) 第5土塚は、長径3.1m短形2.1mを測る不定形な楕円を呈し、深さは20cmである。

(出土遺物) 須恵器1は、偏平な天井部で、口縁部がほとんど屈曲しない壺蓋である。2は、古墳時代の壺身で、たち上りは低く内傾している。混入品であろう。3は、やや外反する深目の体部を持つ壺身である。他に、鉄津と土師器の甕が出土している。

(時期) 混入品を省けば、これらは10世紀代の所産である。

B P 6 (P L 18) 調査地南端の第1掘立柱建物の柱穴に切られている。プランは円形で径0.85m深さ21cmの断面舟底状を呈す。

(出土遺物) 出土遺物は、須恵器壺身と土師器甕がある。1は、やや浅目で内弯気味に開く体部に外反する口縁部が付く壺身である。

(時期) 8世紀前半に位置付けられる。

B P 8 (P L 18) 第8土塚は、調査地中央部東端で、西半部のみ検出した。プランは径1.8mの円形で、深さ20cmの断面長方形を呈している。

(出土遺物) 埋土中より須恵器・土師器が少量出土した。須恵器1は、低い天井部で口縁部との境は浅く屈曲し、口縁部内面は凹む。2は、偏球体の体部に直立する口縁部が付く短颈壺である。

(時期) 埋土中最も新しい時期の遺物は、9世紀～10世紀に属す。

B P 10 (P L 18) 調査地の北部にある。プランは径1.5mの円形で深さ25cmの断面J字形を呈する。

Tab. 3 土塙 (BP) 出土遺物規模一覧表

BP番号	出 土 遺 物	規 模	備 考
1	須恵器、环身、环蓋、壺 土師器、壺、土瓶 灰 粕、碗 鐵 器(刃)	径 - 110 cm の円形 深さ - 134 cm の断面方形	土壤上面に石組 第1井戸跡
2	須恵器、环身、环蓋、壺 土師器、壺	長径 - 200 cm の不定形な楕円形 短径 - 120 cm 深さ - 20 cm の断面舟二段掘りの方形	性 格 不 明
3	須恵器、环身 土師器、壺、壺	東西 - 200 cm の楕円形 深さ - 26 cm の断面方形	性 格 不 明
4	須恵器、壺、环身、环蓋、壺 土師器、壺、土瓶 灰 粕、环身 瓦	長径 - 480 cm の楕円形 短径 - 320 cm 深さ - 46 cm の断面中央2段掘りの方形	性 格 不 明
5	須恵器、壺、环身、环蓋 土師器、壺 鐵サイ。	短径 - 210 cm の不定形な楕円形 反径 - 310 cm 深さ - 20 cm の断面不定形な楕円形	性 格 不 明
6	須恵器、环身 土師器、壺	径 - 85 cm の円形 深さ - 21 cm の断面舟底形	性 格 不 明
7	須恵器、壺、环蓋 土師器、壺	東西 210 cm の長方形 深さ - 14 cm の断面方形	性 格 不 明
8	須恵器、环身、环蓋、長環蓋、短環蓋 土師器、壺	径 - 180 cm の円形 深さ - 20 cm の断面長方形	性 格 不 明
9	須恵器、壺、环身、环蓋、壺、長環蓋 土師器、壺、碗 灰 粕、环身、壺、碗、壺、段皿、小皿 綠 粕(碗) 鐵 器(刃)	長径 - 150 cm の楕円形 短径 - 130 cm 深さ - 57 cm の断面方形	井戸跡 掘りかえ有り
10	須恵器、环身 土師器、壺、壺	径 - 150 cm の円形 深さ - 25 cm の断面U字形	性 格 不 明
13	須恵器、环身、环蓋 灰 粕、碗、壺	長径 - 400 cm の楕円形 短径 - 120 cm 深さ - 25 cm の断面長方形	性 格 不 明

(出土遺物) 須恵器と土師器を少量出土した。須恵器 1 は、低く断面方形で底部のやや内側に付く高台を有する环身。土師器 2 の皿は、口縁端部内面に凹線を巡らし浅い体部である。

(時期) 出土遺物の年代観から、8世紀後半の所産であろう。

B P 13 (P L 18) 第13土塙は、第5住居跡の南に位置していて、プランは南北に長い格円形である。長径4.0m 短径1.2m の比較的大形のもので、深さは25cmほどで断面は長方形を呈す。

(出土遺物) 埋土から須恵器と灰釉陶器が出土している。須恵器 1 は、口縁端部を下方に短く屈曲させた环蓋である。灰釉陶器 2 は、体部内面に僅かに段を成す小型の皿で、口縁端部は僅かに外反する。

(時期) 灰釉陶器の皿は10世紀代のものであろう。

v i 小土塙

小土塙は、総数 400余りある。ここでは主なものの記入することとする。

P 51 (P L 20) この小土塙は、第1住居跡の東側で検出したもので、長径83cm 短径61cm の格円形である。深さは平均10cmで非常に遺存度の低いものであった。小土塙の南端に須恵器の环身 2 点を天地逆にして、内側にやや傾むけてならべてあった。これを土塙墓と見なせば、日本海側の地方に通有に見られる土器枕であろうか。

(出土遺物) 須恵器环身の完形品が 2 点出土している。1.2 は、矮小化したもので、体部は浅く膨みが少なく、たち上りは非常に低く内傾して僅かに受部から出る程度である。

これらは、陶邑 T K 217 型式の古い段階のものに属する。

(時期) 土器の年代は、7世紀初頭に位置付けられる。

P 53 (P L 20) 第51小土塙の西側に隣接している。プランは、長径65cm 短径60cm の格円形で、深さは 8cm で南側はさらに一段深くなる。小土塙の中央から、須恵器の环身と皿が破碎され人為的に埋められていた。

(出土遺物) 須恵器の环身と皿が破片となって出土したが、接合すると完形に近くなつた。1 は、僅かに外反して開いた体部に、低く断面方形の高台が付くものである。2 は、体部を短く直線的に開いた皿である。

これらは、陶邑 T K 7 型式に近く、長岡京跡 S D 51 や平城宮跡 S D 650 に近似している。

(時期) 出土遺物の年代観から見て、9世紀の前半代かと思われる。

P 94 (P L 21) この小土塙は、第2掘立柱建物の北側にあって、形は不定形な格円数個の集合のようであり、長径 3m 短径 1.1m を測り中央部分の深さ 35cm である。埋土からは、「今西」の墨書きのある灰釉陶器の皿の他、須恵器环身と土師器壇及び鉄器が見られる。また、埋土には炭化物や灰層が若干見られ、「ゴミ穴」的性格を持つものと思われる。

(出土遺物) 灰釉陶器 2～4 は、やや深目の皿で体部は内側して開き、口縁端部は僅かに外反する。高台は非常に低く丸味を持つ。3 の底部外面には「今西」の墨書がある。須恵器 1 は、非常に低い高台を持つ环身である。土師器 5 は、底部と体部の境は屈曲し体部は直線的に開いた境で、口縁端部内面は凹線を施している。6.7 は、断面方形の鉄釘である。

この内、灰釉陶器は、猿投古窯跡群折戸53号窯式に類似した特徴を示している。

(時期) 灰釉陶器の年代観は、10世紀代に位置付けられる。

P 350 (P L 22) 第350小土塙は、調査地北端にあって、その平面形は径50cmの隅丸三角形に近い。深さは15cmあり中央部はさらに一段深く25cmある。断面は逆台形状である。小土塙からは、須恵器の环身が横転した状況で出土した。

(出土遺物) 須恵器 1 は、天井部が偏平で天井部から口縁部に緩やかに伸び端部は下方に短く屈曲する。2 の环身は、体部が直線的に伸びて深く、口縁端部は尖り気味となる。高台は非常に小さく、ややふんばる。

これらは、平城宮跡 S K820やS K219に類似する。

(時期) 8世紀後半に比定できる。

P 351 (P L 22) 第351小土塙は、調査地北部東端に位置している。プランは径65cmの円形で、深さ25cmの断面U字形を呈している。内部から、須恵器と土師器が打ち割られた状況で出土し、接合の結果、須恵器环身 2 点と短頸壺 1 点、土師器塊 1 点分がほぼ完形に復原し得た。

(出土遺物) 須恵器の环身 1～3 は、体部は直線的に開き口縁端部は單に丸くおさめ、底部と体部の境は丸い。高台は大きく、外方に大きくふんばる。短頸壺 4 は、偏球体の体部は底部が平らで、全体に厚手である。口縁部は短く開く。土師器塊 5 は、偏平で体部は屈曲して直線的に開き、口縁端部は外傾する。暗紋は見られない。6 の皿は、口縁端部を外反させさらに上方へつまみ上げるもので、体部内外面には粗く暗紋を施す。

これらは、一括資料として良好なもので、平城宮跡 S D1900・同 S D485 型式に類する。

(時期) 出土遺物は、8世紀の前半代に比定できる。

P 353 (P L 22) 第350小土塙の北側30cmのところにある。プランは、長径70cm短径55cmの楕円形である。深さは25cmあって断面U字形を呈している。小土塙の中央から、須恵器の环蓋 1 個体と环身 5 個体分が人為的に打ち割った状態で出土した。

(出土遺物) 須恵器の环蓋と环身がある。1 は、低く偏平な大井部の蓋で、その中央に付け根がくびれ、中高のつまみが付く。2 の环身は、体部は直線的に開き口縁部は尖り、底部は平らである。3～5 は、2 の体部に低いがやや外方にふんばる高台のつく环身である。6 は大型の环身で、体部は直線的に開き口縁端部は尖り気味に外反する。高台は体部直下に付き、太いものの低く断面逆台形を呈す。

これらも、一括資料として価値のあるもので、陶邑MT21からTK7の中間的な特徴をもち、平城宮跡SK219乃至SK870型式や飛鳥第V期に類似している。

(時期) 上記の年代観より、8世紀後半代と考えられる。

Po1 (PL20) 第01小土塙は、第9土塙と第13土塙の中間に位置している。この小土塙は、径75cmの正円に近いプランを呈し、深さ20cmの断面長方形であって、その底に灰釉陶器が置かれていた。

(出土遺物) 灰釉陶器皿1は、浅く大きく開いた体部で、口縁端部は外反し丸くおさめている。高台は非常に小さく、「蛇ノ目高台」に近い。灰釉はかかっていない。

この灰釉陶器は、狼投古窯跡群折戸53号窯式に類する。

(時期) 10世紀の後半代と思われる。

vii レンチ

遺跡の北への拡がりを追求するため、路線に沿って発掘調査地の北へ計7ヵ所のレンチを設定した。以下、その状況を簡単に述べる。

第1レンチ (1Tr) (PL29・30) 第1レンチは、発掘調査地北端部に接して設定した18×7mのレンチである。層位は上から耕土・床土・灰色粘土・灰色砂礫ないし砂層となりその下層は茶褐色砂礫層となって、遺構は何ら検出されなかった。表土以下各層から少量の土器が出土している。

(出土遺物) 第1レンチからは、須恵器・土師器・灰釉陶器・山茶碗の細片が出土した。須恵器1は、口縁内面に小さく断面三角形のかえりの付く环蓋である。2は、断面方形の非常に低い高台の付く环身。山茶碗3は、小型の碗で高台は断面逆三角形の非常に低く粗なものである。

第2レンチ (2Tr) (PL29・30) 第1レンチの北西10mの位置に設定した12×5mのレンチである。層位は、耕土・床土・灰色粘土・黄灰色砂質度・黄褐色砂礫層・灰色砂礫乃至砂層となっており、各々の層より、須恵器・土師器・灰釉陶器の少片が少し出土した。

(出土遺物) 灰釉陶器1は、内縁気味に聞く深い体部に、口縁端部の外面は断面三角形に突出する塊である。2は、浅く大きい体部に、やや内縁する断面長方形の高台が付く皿である。

第3レンチ (3Tr) (PL29・30) 第2レンチの北西に隣接した15×2mのレンチである。基本的な層位は第2レンチと変わらない。出土遺物も、同様であった。

(出土遺物) 須恵器环蓋1・2は、非常に偏平な天井部の中央に、筒状のつまみが付き、口縁部の屈曲は緩くなる。3は、口縁部を尖り気味に外反させた环身である。灰釉陶器4は、深目の体部で口縁端部は肥厚し外反した塊である。6は、低く丸い高台の塊。5は、皿で高台は断面三角形に削り出している。

第4—No.1 トレンチ (4 Tr No.1) (P L 29) 遺跡の西側を流れる小川を挟んで北西側に設定した20×7mのトレンチで、層位は耕土・床土の下は灰色粘土となっていた。遺物はほとんど出土しなかった。

第4—No.2 トレンチ (4 Tr No.2) (P L 29) このトレンチは、第4—No.1 トレンチの北側で、一段高くなった畑地に設定した10×4mのトレンチである。層位は、上より耕土・床土・灰色砂層・茶褐色砂礫層となっていた。耕土と床土は密土されている。遺物はほとんど検出されなかった。

第5 トレンチ (5 Tr) (P L 29・30) 第5 トレンチは、式内社佐味神社跡の北東約15mのところに、路線を横断する形で設定した15×6mのトレンチである。トレンチの層位は、上より耕土・灰色粘土・暗灰色泥質土（流木・木ノ葉等有機物を多く含む）・黒褐色土・灰色砂層・暗灰色粘土層の互層となっていて、旧河道の様相を呈していた。これらの各層からは、須恵器・灰釉陶器・山茶壇・天目茶碗等の細片が多量に出土した。

(出土遺物) 須恵器1は、外反気味に開く口縁部の环身である。9は、盤の肩部で内外面共に叩き目をナデで消している。灰釉陶器の2は、外反する体部をもつ薄手の碗である。3～5は、低く断面逆三角形を呈する壺の高台。6は、やや高く内輪気味にふんばった、丸味を持つ高台である。7・8も、やや外方にふんばった高台で、やや高く断面逆三角を呈す。山茶壇10は、小型壺で高台は逆三角形をして低く、作りは粗である。内面に重ね焼きの跡が残る。天目茶碗の11は、内側した体部にヘラで削り出した小さい高台が付く。釉は暗茶褐色に発色している。

第6 トレンチ (6 Tr) (P L 29・30) 堺国道365号線に接して設定した17×5mのトレンチである。層位は、耕土・床土となりその下層は灰色砂礫層が続く。各層より、須恵器・土師器・灰釉陶器が少量出土した。

(出土遺物) 1は、須恵器の壺の高台で、非常に小さく、体部に不均合いなどである。

四、遺 物

柏原遺跡からは、遺構や包含層から多量の遺物が出上しているが、大半が土器類で、の中でも須恵器が60%と最も多く、次いで土師器17%、灰釉陶器が19%、残り4%程が綠釉陶器、黒色土器、山茶壇、磁器類である。施釉陶器では、灰釉が多く、綠釉陶器が僅少である点注意される。また、灰釉陶器では、壺が62%、皿36%（段皿を含む）で、両者が98%を占め、壺類がわずか2%であって、奢侈的なものなく、汁器類に限られているところに特色が見られる。

土器類以外では、鉄釘、鉄鎌、鉄斧がある。また、瓦片も出土しており、附近に寺院跡の存在することも推察せしめるものである。

	須恵器	上師器・黒色土器	灰粗陶器・その他
縄紋時代 弥生時代			
I 期	 a	 b	
	 a	 b	
II 期	 a	 b	
III 期	 a	 b	 a
	 b	 c	 b
IV 期	 a	 b	 a
	 b	 c	 b
V 期	 a	 b	 a
	 b	 c	 b
VI 期	 a	 b	 a
	 b	 c	 a
			 b

PLAN 3 柏原遺跡出土遺物編年表

さて、これら遺物の個々の観察結果については観察表にゆずり、ここでは遺物を編年的に分類しておく。

(a) 第Ⅰ期

第Ⅰ期はさらにa・bの2小期に区分することができる。

① 第Ⅰa期

〈須恵器〉 瓢蓋は、天井部は高く膨らみを持ち、全面へラ削りを施す。天井部と口縁部を分ける棱線は、断面三角形を呈して水平に突出する。口縁部は垂直に伸び、端部は単に丸くおさめている。环身は、小型化の始まったもので、たち上りは内傾し低く、端部は単に丸くおさめる。受部は外上方に伸び、丸くおさめる。体部は膨らみがなく、偏平な感じを受け、底部のへラ削りは狭く粗い。

〈土師器〉 瓢は、口縁部が大きく外反し、水平に近くなつて、端部外周は面を取る。体部は長胴となり、内外面共に粗い刷毛目を施している。

これらは、陶邑TK43型式や陶邑編年II型式第4段階^④・湖北地方横穴式石室出土須恵器編年の余呉町上ノ山1号墳のものに類似し、さらに難波宮跡東地区下層竪穴のものにも近似している。このところから柏原遺跡第Ⅰa期は、6世紀末頃と比定しうる。

② 第Ⅰb期

〈須恵器〉 瓢蓋は、天井部の膨らみが少くなり、へラ削りの範囲も天井部の1/3になる。天井部と口縁部の境界は、単に凹線を巡らすだけとなり、口縁部は内脣気味に開き、端部は単に丸くおさめる。环身は、さらに矮小化し、たち上りは内傾して非常に小さく、受部より僅かに出る程度となる。受部は大きく外上方に伸びる。体部は偏平で浅く、底部のへラ削りは省略されへラ切り痕が残る。

これらは、陶邑TK217の古い時期のものや、小堀田宮推定地SD050、難波宮跡東地区下層竪穴、飛鳥第Ⅰ期のものに類似し、湖北地方横穴式石室出土須恵器編年^⑤の長浜市諸頭山2号墳に属する。したがって、第Ⅰb期は7世紀前半代の所産と考えられる。

(b) 第Ⅱ期

第Ⅱ期も形態的特徴から、さらにa・bの2小期に細分しうる。

① 第Ⅱa期

〈須恵器〉 瓢蓋は、やや膨らみを持つ天井部は、へラ削りを施し乳首状のつまみが付く。天井部と口縁部の境は僅かに凹み、口縁端部の内面には大きなえりが付き、口縁部より下に出る。环身は、図示し得るものはなかったが、体部は内脣気味に開き、底部と体部の境界は丸味を持ち底部は膨らみ不安定である。

これは、陶邑TK217型式や飛鳥第Ⅱ期の特徴を示し、陶邑編年III型式第1段階ものに類似す

る。このことから柏原遺跡第II a期は、7世紀中葉に比定できる。

②第II b期

〈須恵器〉 壺蓋は、第II a期のものに比べ天井部が偏平となり、つまみも偏平になる。天井部から口縁部に緩やかに伸び、口縁端部内面のかえりは、断面三角形で小さい。壺身は、体部は直線的に開きやや深目で、口縁端部は外反して丸くおさめる。底部と体部の境界は丸味をもち、底部は膨らみ不安定である。

〈土師器〉 壺は、体部が直線的に伸び深目で、径高指数（器高/口径×100）が40.1となる開きの少ないものである。口縁端部は内方に折り返し、底部はヘラ削りを施し体部内面には密に暗紋を施している。

これらは、陶邑TK48型式や飛鳥第III期・湖西線関係V D区大溝のものに類似した特徴を示しており、7世紀後半代に比定できよう。

(c) 第III期

〈須恵器〉 壺蓋は、膨らみのある天井部の中央に、やや中高で付け根がくびれるつまみが付く。天井部はヘラ切り後ヘラ削りを施す。天井部から口縁部に緩やかに伸び、端部は下方に短く屈曲し断面三角形を呈す。壺身には、高台のあるものとないものがある。高台のないものは、体部は直線乃至内輪気味に開き、口縁端部は外反する。体部と底部の境はやや丸味を残し、底部や僅かに膨らむ。高台を持つものは、体部は直線的に開きやや浅い。底部と体部の境は丸味があって、高台は大きく外方にふんばり、底部内寄りに付く。短頸壺は、偏球体の体部で肩の張りは少なく、口縁部は短く開く。底部はヘラ切り後ナデ調整。

〈土師器〉 壺は、口縁部が「く」字形に短く外反し端部は丸くおさめる。小型の壺で、体部は球体に近く、内外面共に刷毛目調整。他に長胴の大壺もある。壺には、大小がある。小型壺は体部が内側して開き口縁部は僅かに外反する。内面には二段に放射状の暗紋を密に施す。大型壺は、体部が直線的に開き、端部は内側がやや凹む。径高指数22.8である。底部はヘラ削りを施し、内面には暗紋は見られない。やや高く外方にふんばる高台の付くものもある。

これらは、陶邑MT21型式や飛鳥第V期・平城宮跡S D1900・S D 485・陶邑編年IV型式第1段階・藤原宮II aに該当する。したがって、柏原遺跡第III期は、8世紀前半代に比定しうる。

(d) 第IV期

〈須恵器〉 壺蓋、天井部はやや膨らみ、偏平なつまみが付く。天井部はヘラ削りを施すものも見られるが、大半はヘラ切り痕をヨコナデで消す程度である。天井部と口縁部の境界はやや屈曲して段を成し、口縁部は下方に短く屈曲して断面三角形を呈す。壺身、高台を持たないものは、体部が直線的に開き端部は単に丸くおさめるだけである。底部と体部の境は屈曲して稜をなし、底部は平らで安定的。高台を持つものは、大小の二類がある。小型のものは、高台のない壺身に

やや低く外方にふんばる高台を付けたものである。大型品は、体部は直線的に開いて深く、口縁部は尖り気味に外反する。高台はやや低く断面逆台形でふんばる。

〈土師器〉 瓢は、口縁部が中位で屈曲する所謂「受口状」を呈する長胴瓢で、口縁端部は水平に面を取る。体部外面は刷毛目調整。これらは、平城宮跡 S K820・S K219・陶邑編年IV型式第2段階に近似している。柏原遺跡第V期は、このことから8世紀後半代を中心とした時期となる。

(e) 第V期

〈須恵器〉 壺蓋は、第IV期のものに比べ、天井部の膨らみがさらになくなり、偏平なものとなってしまい、天井部と口縁部の境界の屈曲はさらに強くなり、「S」字状に近く口縁端部は下方に突出する。天井部のつまみは、付け根のくびれが小さくなる。壺身は、高台を持つものと、持たないものが見られ、高台を持たないものは、内側乃至外側して開く浅い体部で、口縁部は単に丸くおさめ、底部と体部は屈曲して稜をなす。底部は平らで、ヘラ切り痕を残す。高台のあるものは、それに、断面方形又は逆台形の低い高台を体部直下に垂直に付けたものである。皿は、外傾度の大きく、短い体部を持つもので、体部と底部の境界は屈曲して明瞭な棱をつくる。

〈土師器〉 塚は、径高指数23.1となる浅く大きく開いた塚で、体部と底部の境界は識別不能となる。口縁端部は僅かに内側に折り曲げる。体部外面に指頭圧痕を遺し、内面には全く暗紋を施さない粗雑な作りである。瓢は小型品で、口縁部は僅かに「受口状」となって、端部は内傾した面を取る。体部は縦長の球体で、体部外面は刷毛目調整し、底部は内外面共に、指頭圧痕を残す。

〈灰釉陶器〉 この第V期が、現在のところ灰釉陶器の当地方の初見期である。器種は長頸壺だけに限られる。長頸壺は、やや太く比較的短い頸部に、外反し上下につまみ出して外間に面を取る口縁部が付く。体部は肩部があまり張らず丸味を持っている。

これらは、陶邑TK7型式や平城宮跡SD650・長岡京跡SD51や陶邑編年のIV型式第3段階に類似した特徴を見い出せる。また灰釉陶器の長頸壺は、狼狽古窯跡群鳴海32号窯式のものに類似している。したがって柏原第V期は、9世紀の時代を与えることができる。

(f) 第VI期

〈須恵器〉 壺蓋は、天井部は更に偏平化し、ほとんど水平に近くなる。つまみは円筒状と化し、付け根のくびれはない。天井部と口縁部の境界の屈曲は緩くなり、口縁端部を丸く肥厚させるだけとなる。壺身は、僅かに内側気味となる体部で、口縁端部は単に丸くおさめ、高台は非常に低く断面逆台形で体部直下に付く。須恵器類は、概して焼成や胎土・調整は悪く、色調や焼成が土師器に近いものが大半である。

〈土師器〉 瓢は、口縁部が「く」字形に屈曲して開き、端部は僅かに肥厚する。体部は半球体で、器表は手づくねの痕を残す。器厚は薄く、粗雑な作りで、胎土は精良で雲母を多く含み、焼成が良好なのが特徴である。

〈黒色土器〉 塙のみに限られる。体部は内彎して開き、口縁端部は上方につまみ上げるものと、單に丸くおさめるものがある。高台は低く、断面逆三角形である。体部内面には、暗紋が密に入るものと、全くないものがある。

〈灰釉陶器〉 塙は、内彎して浅く開き、口縁端部は僅かに外反し丸くおさめる。体部と底部の境に、低く丸味を帯びた断面長方形の高台が付き、やや内彎気味にふんばる。皿は、内彎してやや深目であり、端部はやや外反し丸くおさめている。高台は、断面逆三角形乃至長方形で、僅かにふんばる。灰釉陶器の底部は、回転糸切りでヨコナデで消すものもある。

これらの内、須恵器は陶邑編年IV期第4段階のものに類似する。黒色土器は平安京跡内裏内郭廻廊跡出土のものに近似する。灰釉陶器は、特有の陰刻花鳥紋が見られず、その盛行期以降のものと思われ、本格的に湖北地方に流通し始めた時期の猿投古窯跡群黒瓦14号窯式～折戸53号窯式のものであろう。したがって、柏原遺跡第VI期は10世紀代とすることが可能と思われる。

以上のように、柏原遺跡出土の土器は6世紀末～10世紀代のもので、それを大きく8期に区分することができた。

ハ. 遺構の分布

前項で、遺物を第I a期から第VI期の8期に区分し得た。そして、この区分は遺構の項でその時期を求めたものがいずれかに含まれるわけだが、ここで、各期の遺構をまとめ、その分布及び遺構の変遷を概観しておく。

第I a期 P106

第I b期 T 2下, T 9, B P 4, P51

第II a期 PN320, PN336

第II b期 T 5, P181

第III期 T 1, T 2上, T 7, B P 6, P117, P147, P351

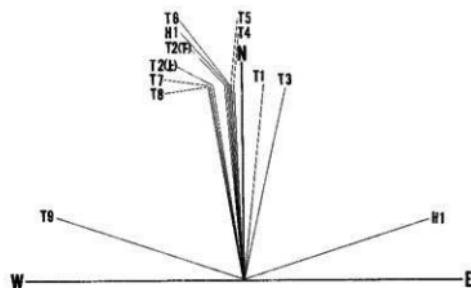
第IV期 T 3, T 4, B P 2, P107, P317, P350, P353

第V期 T 6, T 8, M 2, M 3, P53, P56, P131, P152, P156, P380

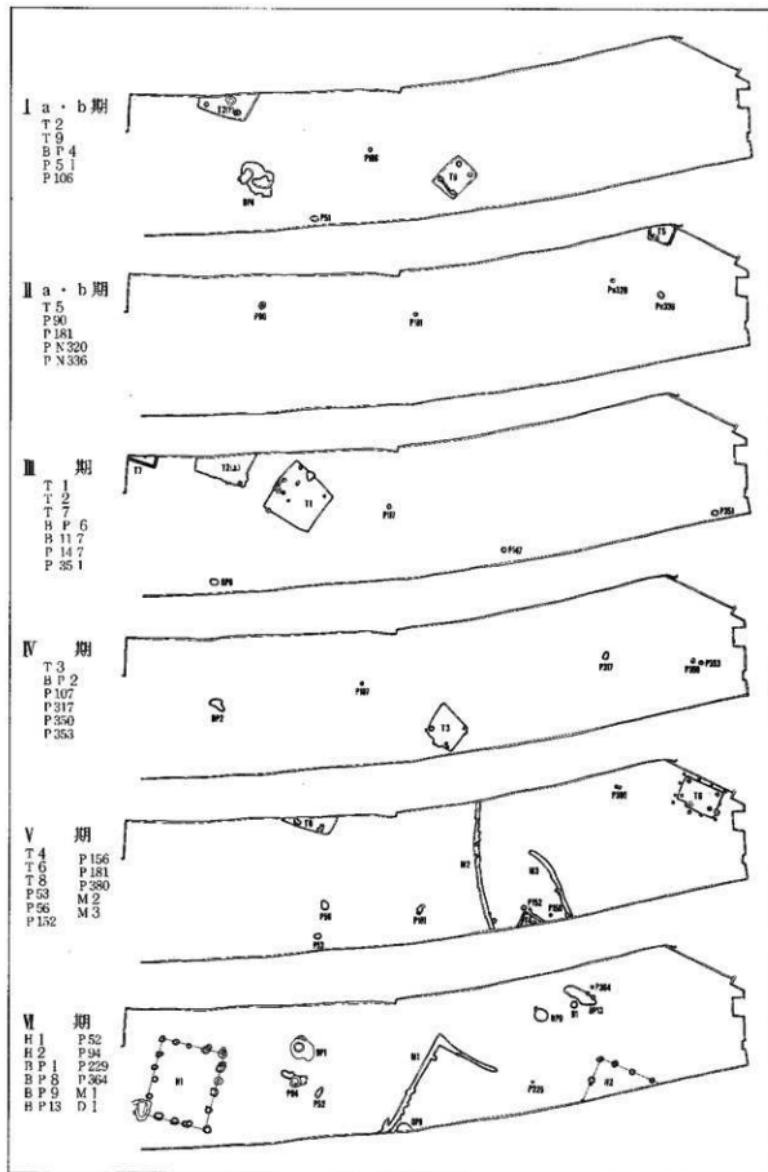
第VI期 H, H 2, B P 1, B P 9, P01, P57, P75, P94, P229, P305, P364

遺構は小ピットも含めて、各時期に分布するが、住居跡については、調査範囲内に限ってであるが、第I b期（7世紀前半）以降に出現する。そして竪穴式住居跡については、第V期の9世紀まで残る。また、いずれもカマドが伴う。構造的には、主柱穴が第I b期の2基、第III期の1基、第IV期の2基、第V期の2基に見られ、第II b期の1基、第III期の2基はない。掘立柱建物跡については、明確に竪穴式住居跡に伴うものがなく、10世紀代の第VI期以降に出現している。

その他、第Ⅰb期、第Ⅲ期、第Ⅳ期に完形品あるいは人為的に破碎したような状況で土器類が出土した土塙があり、土塙墓あるいは祭祀関係のものかと考えられるものが見られる。また、第Ⅵ期には、井戸跡があり、第Ⅴ期以前に明確な井戸跡がなく、顯著な相違といえる。



PLAN 4 土塙跡、掘立柱建物主軸方向図



PLAN 5 柏原遺跡遺構變遷表

第4章 まとめ

以下に箇条書きしてまとめにかえたい。

- 6世紀末から10世紀代にかけての集落跡である。
- 竪穴式住居跡が9世紀まで残り、掘立柱建物への移行が畿内地方の集落跡に比べ遅い。
- 竪穴式住居跡にはいずれも造り付けのカマドが付くとともに、柱穴や周溝を持たないものが多い。その反面、主柱穴4基の他に、住居跡の外周に12本の支柱を持つ特異な構造のものが1基であるのが見られる。
- 土塙の中に、埋葬用あるいは祭祀用から考えられるものがあり、集落内での埋葬・祭祀の形態の一端が知れる。
- 遺物の面では、長胴壺の存在とは逆に、瓶の存在しない点が注意される。
- VI期に特に汁器類について灰釉陶器が須恵器にとって替る傾向にある。
- 2点ではあるが、鉄斧、鉄鎌が出土しており、住居形態の変化とは逆に、鉄製品の普及の早さがしのばれる。

おわりに

限定された範囲での調査ではあるが、竪穴式住居跡から掘立柱建物への移行、鉄製品の普及、瓶の出土しない点、灰釉陶器の普及等、生活様式の上で興味ある問題を持ち、住居跡についても、主柱穴の存在しないものが多く、また12本の支柱穴のある特異な住居跡が見られる等、構造的に多くの問題を含む遺跡であり、この頃の集落跡の調査例の僅少な現状で、貴重な資料を提供してくれているものと考えている。

註

- ①『角川、日本地名大辞典25 滋賀県』（角川書店、昭和54年）
- ②『滋賀県遺跡目録』（滋賀県教育委員会、昭和40年）以下、特に参考文献を提示しない遺跡は、これによった。
- ③小江慶雄『琵琶湖水底の道』（講談社現代新書404、講談社、昭和50年）
- ④昭和54年に、圃場整備事業に関連して発掘調査が実施された。
- ⑤田中勝弘「湖北町大安寺遺跡」（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ-Ⅱ』 滋賀県教育委員会、昭和51年）
- ⑥本報告と同じ国道365号線バイパスに関連して、現在発掘調査中の高月町井口遺跡から、竪穴住居跡や土壙に伴って若干出土している。
- ⑦北陸自動車道に関連して、昭和52年から発掘調査が続けられている。
- ⑧北陸自動車道に関連して、昭和51年に発掘調査が実施された。
- ⑨⑩北陸自動車道に関連して、昭和52～53年に発掘調査が実施された。
- ⑪田中勝弘「高月町保延寺大沟遺跡」（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ-Ⅰ』 滋賀県教育委員会 昭和51年）

- ◎田中勝弘「高月町円通寺遺跡」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ-Ⅱ』 滋賀県教育委員会 昭和51年)
- ◎谷口義介、別所健二ほか「丁野遺跡」(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 滋賀県教育委員会 昭和51年)
- ◎昭和54年に圓場整備事業に関連して、発掘調査が実施され、方形周溝墓2基と集落跡の一端が明らかになった。
- ◎昭和54年に、圓場整備事業に関連して発掘調査が実施された。
- ◎田中勝弘「伊香郡高月町古保利古墳群調査報告」(『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』 滋賀県教育委員会 昭和50年)
- ◎昭和53年に発掘調査が実施され、後漢時代初期のものと見られる「唐草紋縁細線式獸帶鏡」1面をはじめ、鉄槍や土器が粘土構から発見された。
- ◎北陸自動車道に開通して、昭和53年に発掘調査が実施された。
- ◎北陸自動車道に開通して、昭和52年に墳丘測量及び周濠推定部分の発掘を行った結果、従来、前方後円墳といわれていたが、円墳である可能性も出て来た。
- ◎中谷雅治「滋賀県湖北町今西遺跡発掘調査報告書」(湖北町教育委員会、昭和49年)
- ◎丸山竜平「高月町保延寺大海道遺跡調査報告」(『は場整備事業関係遺跡調査報告Ⅱ』 滋賀県教育委員会 昭和50年)
- ◎遺場整備事業に開通して、昭和54年に発掘調査が実施され、供獻土器を伴う多數の上層墓を検出した。
- ◎田中勝弘「びわ町難波遺跡」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ-Ⅱ』 滋賀県教育委員会 昭和51年)
- ◎田中勝弘「上ノ山古墳群」(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 滋賀県教育委員会 昭和51年)
- ◎丸山竜平「高月町馬場末古墳群調査報告」(『は場整備事業関係遺跡調査報告Ⅱ』 滋賀県教育委員会、昭和50年)
- ◎鬼柳形「四郷崎古墳」(『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 滋賀県教育委員会 昭和51年)
- ◎圓場整備事業に開通して、昭和53年に発掘調査が実施された。
- 糸条里遺構の復元は、「角川、日本地名人辞典25 滋賀県」の「資料編、滋賀県条里遺構分布図」によった。
- ◎竹内理三編『莊園分布図、上巻』(吉川弘文館、昭和50年)
- ◎出辻昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」(平安学園考古学クラブ 昭和41年)
- ◎「平城京左京一条三坊の調査」(『平城宮発掘調査報告Ⅳ』 奈良国立文化財研究所 昭和49年)
- ◎「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ」(奈良国立文化財研究所学報第27冊、奈良国立文化財研究所、昭和51年)
- ◎中尾芳治「難波宮古宮の遺跡の調査報告」(『難波宮址の研究』 研究予察報告第五第二部、難波宮址顕彰会、昭和49年)
- ◎「藤原宮」(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第25冊、奈良県教育委員会、昭和44年)
- ◎「平城宮発掘調査報告Ⅱ」(奈良国立文化財研究所学報第15冊、奈良国立文化財研究所、昭和37年)
- ◎「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」(奈良国立文化財研究所学報第31冊、奈良国立文化財研究所、昭和53年)
- ◎田辺昭三ほか「湖西線関係遺跡発掘調査報告書」(滋賀県教育委員会、昭和48年)
- ◎「平城宮発掘調査報告Ⅵ」(奈良国立文化財研究所 昭和46年)
- ◎徳丸丸始郎ほか「長岡京跡左京三条二坊第2次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』(京都府教育委員会、昭和51年)
- ◎橋崎彰一「三彩・綠釉・灰釉」(陶磁大系5、平凡社、昭和48年)
- ◎伊東照雄、元甲真之、金岡恕ほか「秋根遺跡」(下関市教育委員会、昭和52年)
- ◎土器が人為的に破碎され、さらに埋納されたという確認を得るのは困難である。しかし、接合復元の結果、一個体となり、他の遺物の混入がないことや、出土状況、さらに土壙の形状から推定した。
- ◎中村浩ほか「陶邑Ⅰ」(大阪府文化財調査報告書第28輯、大阪文化財センター、昭和51年)
- ◎田中勝弘「湖北地方の後期古墳の編年」(『近江地方史研究』第3号、昭和51年)

Tab. 4 柏原遺跡出土遺物観察表

第1住居跡(T1)

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調査法	調査参考
須地器	壺	4 1	○天井部はやや高い。 ○天井部から口縁部に段やかげがあり、口縁部 は下方に規則的に突出し、断面二角形を呈す。	○天井部はへら切り後にヨコ ナデ。 ○口縁部・天井部内面はヨコ ナデ。	砂粒を多 く含む	黄く硬質	暗灰 色	
	2		○天井部は腰平で低い。 ○人井部から口縁部に段やかげがあり、口縁部 は下方に短く斜面して突出し、断面三角 形を呈す。	○口縁部はヨコナデ。 ○底部はヨコナデ。	砂粒を多 く含む	良好で堅 硬	暗灰 色	泥表に自然地付有
灰陶器	舟	4 3	○底部と底部の境界は斜面して段をなす。 ○高台は小さく、断面五方形で、底部の内側 に垂直に付く。	○底部はヨコナデ。 ○底部はへら切り後ヨコナデ。	小石・砂 粒を多く 含む	良好で堅 硬	暗灰 色	
	4 4		○底部中央の内側で段を有し、全体的に浅い丸味を 持つものである。	○底部はヨコナデ。 ○底部は回転糸切り後にヨコ ナデ。	砂	やや深く 軟質	淡白灰色	埋土より出土
土師器	壺	4 5	○高台は小さく、断面形状は方形に近い丸味を 持つものである。	○底部はヨコナデ。 ○底部は回転糸切り後にヨコ ナデ。	砂	長く硬質	淡灰 色	
	6		○口縁部は直ぐ直立し、縫合部はやや外反する。 ○底部は膨らみがない。 ○全体的に厚手である。	○口縁部はヨコナデ。 ○底部は調整が粗く、ヨコナ デを施すものの不十分であ る。	砂粒・墨 粉を多く 含む	墨 色	内面 外 面 赤褐色	

第2住居跡 (T2) 上層

器種	器番	PLAN No.	土器 名	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調達	量備	参考
須恵器	杯 瓢	7 1	天井部は比較的扁平で、山央に扁平なつまみが付く。 天井部と口縁部の境界は、やや屈曲して致をなす。 口縁部は外下方方に近く屈曲し、断面三角形を呈して、外側が凹む。	天井部はへたり後ヨコナ子。 口縁部と天井部内面はヨコナア漏窓。	砂粒を多く含む	良く吸質	灰	器径13.4cm 器高2.5cm		
	2 1	天井部は扁平で低く、山央に扁平なつまみが付く。 天井部から口縁部に緩やかに伸び、口縁部は下方に近く屈曲し、断面三角形を呈する。	天井部全体にわたってへたりを施したもの(3)もあるが、人当はへたり切り後にヨコナアを施す。 口縁部はヨコナア。	砂粒を多く含む	良く吸質 良好で堅板	灰	[3]は 器径17.1cm 器高4.3cm			
	4									
环 身	7 5 7 6 7 8	(5) (6) (8)	口縁部は、ただ單に丸くおさめるもの(5) や滑らかに外反させるものの(6)、さらには尖り気味となるものも見られる。 体部は絶対的にいやや外反気味に聞くが、全体的に浅い。 底部と体部の境界は丸味をもち、底部はやや底みを残している。	口縁部・体部内面は共にヨコナア。 底部はへたり後ヨコナアを施す。 ないし仕上げナデを施す。	小石・砂粒を多く含む	良好で電 良く吸質	淡灰黄色 灰	[5]は 器径12.2cm 器高3.5cm [6]は 器径13.3cm 器高4.1cm		
	9		口縁部は出方に丸くおさめる。 底部と体部の境界は屈曲し狭くなす。 小さな場合が付くものと想われる。	口縁部・体部内面は共にヨコナア。	小石・砂粒を多く含む	悪く吸質	淡灰黄色			
	10 11		口縁部は単に丸くおさめ、体部は大きく開き、外反気味のものと、内凹するものがある。全体的に浅い。 底部と体部の境界は屈曲するものの傾斜い。	口縁部・体部内面はヨコナア。 底部はへたり後、仕上げナデ漏窓。	小石・砂粒を多く含む	良好で堅板	灰	[10]は 器径16.6cm 器高3.7cm [11]は 器径18.0cm		

種類器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土焼成色	調査量	備考
		高台はやや大きく、外方にふんばり、断面逆合形凹と逆三角形が見られる。	口縁部は直線的に開き、端部は水平に面を取る。 器縁は厚手である。	小石・砂 粘土多く含む。	割高 4.1cm	
擂 鍤	7 12	口縁部は比較的幅く、外周気味に開き、端部は水平に面を取る。	口縁部はヨコナデ。	良好で堅 軟		
盃	7 13	口縁部は水平に面を取っている。	口縁部はヨコナデ。	砂粒を多 く含む		
鑿	7 14	直線的に大きめに開き、口縁部でやや直し、端部は水平に面を作れる。	口縁部はヨコナデ。下部はカキ目を施す。	良好で堅 軟		
灰 軸 器	7 15	口縁部は大きく外反して開き、端部は上下に肥厚し、外周に面を作る。 器縫はやや大きくない。 体部は丸味をもつて前面は優らない。 比較的大きな高台がいくものと思われる。	口縁部、体部内面はヨコナデ。 体部外面はヘラ削り調整。	良 好	良好で堅 軟	灰軸器でも初期のものかと思われる。
土師器	7 16	1.2~1.5cmの小柄のものである。 体部は高く、内面して開き、端部は僅かに外反し、内側に接縫をとる。	口縁部・体部はヨコナデ。 内面には横紋が密に施され二段に施すものと一段のものがある。	良 好	良好で堅 軟	
	7 17	体部はやや低く、内面して開き。 此器と体部の境界は丸体をもつて接続せず、 高台はやや大きく、断面異方形を呈し、外方にふんばる。	口縁部、体部はヨコナデ。 跡は見られない。	良	悪く破裂 発色	
	7 18	体部はやや低く、内面して開き。 高台は水平に面を取る。	口縁部はヨコナデ。 体部外面は削毛目調整し、	砂粒を多 く含む	良好で堅 軟	
燒	19	小型の壺で、口縁部は非常に高く外反し。 端部は水平に面を取る。 体部は、やや膨らみ球体に近い。	口縁部はヨコナデ。 体部外面は削毛目調整し、	良好で堅 軟	良好で堅 軟	頸部内面は指頭でもさえている。

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	环	20		○大形の壺で、口縁部は「く」字形に屈曲し、天井部上方に内凹させ、受口状としたもので、瓶部は外方に僅かに肥厚している。 ○体部は底らみが見られる。	○口縁部はコナデ。 ○体部は削り削撫。	砂粒を多く含む	淡青灰色		

第2住居跡 (T2) 下層

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	环	6	1	○内面に大きなかえりを持つタイプのもので、天井部の山尖部に乳頭状のつまみが付く。 ○天井部はやや扁平で壁みがいい。 ○天井部と口縁部の境界は、やや削出しし無い。 ○口縁部を覗るだけである。 ○口縁部は外張気味に立ち、瓶部は丸くおさめる。	○口縁部はコナデ。	小石・砂粒を多く含む	良く緻密 灰	色	
			2	○天井部はやや扁平で壁みがいい。 ○天井部と口縁部の境界は、やや削出しし無い。 ○口縁部を覗るだけである。 ○口縁部は外張気味に立ち、瓶部は丸くおさめる。	○口縁部はコナデ。	砂粒を少 し含む	良く緻密 灰	色	
			3	○天井部はやや扁平で壁みがいい。 ○天井部と口縁部の境界は、やや削出しし無い。 ○口縁部を覗るだけである。 ○口縁部は外張気味に立ち、瓶部は丸くおさめる。	○口縁部はコナデ。	砂粒を少 し含む	良く緻密 灰	色	
环	身	6	4	○たちあがりは非常に小さく内側して、瓶部は尖り、受部より僅かに出る程度である。 ○受部は外方に伸び、受部上部にヘラによる1条の凹線を施すものもある。 ○体部は内凹し、扁平である。	○口縁部・休部はヨコナデ。	砂粒を少 し含む	良く緻密 灰	色	
			6	○たちあがりは非常に小さく内側して、瓶部は尖り、受部より僅かに出る程度である。 ○受部は外方に伸び、受部上部にヘラによる1条の凹線を施すものもある。 ○体部は内凹し、扁平である。	○口縁部・休部はヨコナデ。	砂粒を少 し含む	良く緻密 灰	色	
			7	○たちあがりは小さく内側して、瓶部は尖り、受部より僅かに出る程度である。 ○受部は外方に伸び、受部上部にヘラによる1条の凹線を施すものもある。 ○体部は内凹し、扁平である。	○口縁部・休部はヨコナデ。 ○底部はヘラ切り後山上げナ	砂粒を多 く含む	良く緻密 灰	色	(S)は □焼9.7cm 器高3.4cm
			8	○口縁部は丸くおさめる。 ○受部は外方に伸び丸くおさめる。 ○休部は内凹して丸くおさめる。	○底部はヘラ切り後山上げナ	砂粒を多 く含む	良く緻密 灰	色	

種類	器種	PLAN 上器 No.	形態の特徴	手法の特徴	土粒	成色	調法	量	備考
	船	6 9	○口縁部と腹部の境界は屈曲して段を行し、外側に一筋の凹縫がある。 ○口縁部は大きめで開口、端部は丸くおさめ、さらに外側に一筋の凹縫を巡す。 ○端部はやや長く削り、体側は小さく全体に近いものであろう。	○口縁部はヨコナデ。 ○口縁部はヨコナデ。	砂粒を多く含む	良く硬質 灰灰色	レ線部内面に自然輪が付着している。		
	釜	6 10	○肩から、外周部特に開いた縫隙部で、腹部は肥厚させ上方に短くつまみ上げる。	○口縁部はヨコナデ。 ○体部外側は鋸毛(?)調整し、内面はナデ。	精 良	良好で堅 白灰色			
上器	甕	6 11	○小形の壺で、口縁部は單に「U」字形に短く開き、端部は丸くおさめる。	○口縁部はヨコナデ。 ○体部外側は鋸毛(?)調整し、内面はナデ。	砂粒を多く含む	悪く軟質 淡青褐色			
		12	○口縁部は「U」字形に稍崩し、中位で上方に内側する所削り出しを呈するもので、端部はやや外方に肥厚して突出し、上面は水平に面を取る。 ○体部丸、あまり膨らまない。	○口縁部はヨコナデ。 ○体部は内外両方に鋸毛(?)調整し、内面はナデ。	砂粒を多く含む	悪く軟質 淡青灰色			
		13	○口縁部は「U」字形に大きく外側して開き ・ 端部を僅かに上方につまみ上げ、断面三角光にするものもある。	○口縁部はヨコナデ。 ○体部は内外両方に鋸毛(?)調整し、内面はナデ。	砂粒を多く含む	悪く軟質 淡青褐色			
		14							
		15	○口縁部の形態は以前に近い。 ○体部の輪郭から他と区別される。	○口縁部はヨコナデ。	砂粒を多く含む	悪く軟質 淡青灰色			

第3住居跡 (T 3)

種類	器種	PLAN No.	土器類	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成法	色調	備考
須恵器	壺	8	1	○天井部はやや扁平で低い。 ○天井部と口縁部の境界は僅かに屈曲して段 をなす。	○天井部はヘラ削り。 ○口縁部はヨコナダ。	砂粒を多 く含む	良好で堅 め	暗灰色	
		2		○口縁部は、下方に短く突出し、断面三角 形を呈す。					
灰	身	8	3	○大形の环身で、口縁部はやや尖り気体に 外反する。 ○体部は直角的に削き深い。 ○体部と底部の境界は削曲し、段をなす。	○「I」縫隙、体部ヨコナダ。 ○「II」縫隙、	砂粒を多 く含む	良打で堅 め	灰色	

第5住居跡 (T 5)

種類	器種	PLAN No.	土器類	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成法	色調	備考
須恵器	壺	10	1	○天井部は扁平で低く、中央にやや高いま みが付く。口縁部は口縁部から口縁部に 天井部から口縁部に腰やかに伸び、口縫隙 部はただ中にもくおさめる。 ○「I」縫隙の内面に、非常に小さな内面のかえ りが見られ、断面は逆三角形を呈してい る。	○「I」縫隙、全体は常にへて削 りが施されている。 ○口縁部、天井部内面はヨコ ナダ。	砂粒・小 石を多く 含む。	良好で堅 め	灰色	
土器	壺	10	2	○「I」縫隙部は肥厚し、内刃に折り畳げ上端は 水平に面を取る。 ○体部は直角的に削いて深く、底部と体部の 境界は丸く接続は取らない。 ○底部は平らである。	○口縁部、体部内面はヨコナ ダしその後に堅め削りを施 している。 ○体部外削は、手づくねの後 ヨコナダを加えているが不 十分である。 ○底部はヘラによって不完全 に削っている。			淡赤褐色	口径 17.5 cm 器高 6.1 cm

第6住居跡 (T 6)

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎成法	調査量	備考
須出器	杯	12	1	○「縁部は丸く、おさめている。 ○体部は底部に大きく開き、深い。 ○底面と体面の縁は圓曲で様貌を見せる。 ○底部はやや丸味をもっている。	○口縁部・体部は内外面共に ヨコナデ。 ○底部はヘラ切り後に仕上げ ナデ。	砂粒を多く含む	口径 1.5-4.4cm 器高 3.3cm	
	盃	12	2	○両台は体部直下に斜め、底合は細く斜面少し い底じりうけ、外方にややふんばる。	○体部はヨコナデ。	砂粒を多く含む	良好で堅	灰色 板
土器	甌	12	3	○小形の甌で、口縁部は「U」字形に開き、 中位で円弧状「安げ状」に近い。 ○「縁部部は内張する面を持つ。 ○球体に近い体部をもつ、やや屈曲して底部 に細く。	○口縁部はヨコナデ。 ○体部外側は斜毛目彫刻し、 内面はナデ。 ○底部は内外面共に指痕によ るむねきが残る。	砂粒を多く含む	口径 1.2-6.4cm 器高 1.1-6.4cm	
	甌	12	4	○大形の甌で、口縁部は単に「U」字形に開 くだけである。 ○口縁部部は外側にやや曲面をなす。 ○体部は膨らみが少ない。	○口縁部はヨコナデ。 ○体部外側は斜毛目彫刻。 ○内面は多く含む	小石・砂 粒・雲母 を多く含む	液面灰色	
	甌	12	5	○「縁部部は大きく突起し、水平に近くなる。 ○「縁部部は外側に面を持つ。 ○体部はサタボール状に丸味を持つてすぼ まる。	○口縁部は外側がヨコナデし 内面は斜毛目彫刻を行う。 ○体部は内外面共に斜毛目彫 刻。	砂粒を多く含む	良く硬質	液面灰色

第7住居跡 (T 7)

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎成法	調査量	備考
須出器	杯	13	1	○「縁部は、伝かに彫刷し外反する。	○口縁部・体部内外面はヨコ ナデ。	砂粒を多く含む	口径 1.1-8.4cm 器高 3.5cm	

種類	器種	PLAN No.	土壤	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
				○体部はやや内凹して開き狭い。 ○体部と底部の境界はやや留めし縁をなす。 ○底部は水平に近い。	○底部はヘラ切り法に仕上げ ナダ。				
		2		○口縁部はやや尖り、体部は直線的に開く。 ○口縁部、体部外側は共に ヨコナダ。	○口縁部、体部外側は共に 砂粒を少 し含む	良く軟質	灰 色		
土器		13	3	○口縁部内側に一条の凹縫が巡る。 ○体部は浅く、内窓型甌に似立に近く立つ。 ○体部と底部の境界は伝統するものの後はと らない。	○口縁部、体部外側はヨコ ナダ。	砂粒を多 く含む	淡青灰色		
	甌	13	4	○小形の甌で、口縁部は直立した後大きく外 反し、腹部はやくおさめる。 ○体部は底らみ、全体に立いものかと思わ れる。	○口縁部はヨコナダ。 ○全体の外側面に刷毛目調 整。	砂粒を多 く含む	外側は 黒 灰 色		
	甌	13	5	○大形の甌である。 ○口縁部は大きく外反し、腹部は膨脹して下 方に突出し外側に筋を作る。 ○体部は底らみが少なく、瓦調である。	○口縁部はヨコナダ。 ○全体の外側面は刷毛目調面。	砂粒を多 く含む	淡青灰色		

第8住居跡 (T 8)

種類	器種	PLAN No.	土壤	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
水器	壺	14	1	○天井部は非常に扁平で、底からがない。 ○天井部と口縁部を分ける模様は全く見られ ない。 ○口縁部はやや内凹し、外下刃に伸び、輪部 はやや尖る。	○口縁部はヨコナダ。	砂粒を少 し含む	灰 色		古墳時代のもので、 他の遺物と明らかに 異り施入品と思われ る。

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	量	備考
漬物器	环 身	14 2	○口縁部は内反し、直立気味に入りくされめる。 ○体部は直的に開き、深い。 ○底部と体部の境界は丸味を帯び、継は取らない。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部はへラ切りを施す。	細粒を多く含む	良好で堅	淡灰		
		3	○体部直下に高台があり、高台は小さく断面 刃形で垂直に立つ。	○体部はヨコナデ。 ○底部はへラ切り後ヨコナデ。	砂粒を多く含む	良好で堅	灰		
土陶器	环	14 4	○口縁部は丸くおさめ、輪郭内側に一絆の凹 溝を有す。 ○体部は内凹して開くが、大きく開いて浅い。 ○底部と体部の境界は丸味をもつ。	○口縁部、体部内面はヨコナ デで、輪校は見られない。 ○体部外表面は手づくねの「か ら」ヨコナデを加えるが十分 ではない。	粗	悪く軟質	淡黄褐色		

第9住居跡 (T9)

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	量	備考
須恵器	环 身	8 1	○たちあがりは非常に小さく、内側した部は やや尖り頭端に落り、受傷から僅かに出る 程度のもの(2)も見られる。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部はへラ切り後に仕上げ ナデ留毛。	砂粒を多く含む	悪く軟質	淡灰色	(2)は 器径 1.1.2 cm 器高 3.5 cm	
鉢製品	鉢	8 3	○刃部は内凹し、先端部は「くちばし」状に 尖る。 ○柄取付部は「U」字形におりまげ柄 に取り付けるように作られている。				全長 1.2.5 cm 幅 2.2 cm 厚さ 0.6 cm		

B P 2

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	杯	18	1	○天井部と口縁部の境界は、やや斜めして傾をなす。 ○口縁部は下方に僅かに突出し、断面三角形を呈する。	○口縁部はヨコナデ。	砂粒を少しあむ	良く硬質 淡灰色		
	杯	18	2	○口縁部は單に丸くおさめ、体部は直線的に開く。	○口縁部、体部はヨコナデ。	小石・砂粒を少し含む	良好で堅 淡灰色		
土師器	甕	18	3	○口縁部は「く」字形に屈曲し、中位で内窓気体と並立して「受(ウ)」になる。 ○口縁周部は内側する筋を取る。 ○体部はやや膨らむ。	○口縁部はヨコナデ。 ○体部外側は瘤毛目盛り、内面はナデ織籠。	小石・砂粒を多く含む	悪く軟質 淡黃灰色		

B P 4

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	身	18	1	○天井部は扁平で壁立ちがない。 ○天井部と口縁部の境界は、僅かに凹むだけである。 ○口縁部は内凹して開き、縁部は内側に前を取り尖る。	○口縁部はヨコナデ。	砂粒を多く含む	良く硬質 淡灰色		
灰陶器	甕	18	2	○口縁部は僅かに外反し、縁部は前に丸くおさめる。 ○体部は内窓し浅い。	○口縁部、体部はヨコナデ。	砂粒を少しあむ	良く硬質 淡褐色		

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	粘土	焼成色	調法	備考
土器	壺	18	3	円錐底で頸部の幅くなる形で、中央に小穴が空たれる。		精良	長く緻密な褐色		土器の出土量は少ない。

BP5

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	粘土	焼成色	調法	備考
須恵器	壺	18	1	。偏平な蓋で、人井型は非常には無い。 。天井部と「腰部」の境界は直に段なすだけ である。 。1腰部は単に丸くおさめるだけである。	。人井型はへら切り後ヨコナ デ。 。口縁部はヨコナデ。	砂粒を多 く含む	淡灰色		用である可能性もあ る。
	环	18	2	。たちあがりは小さく獨立し、腹部は尖る。 。底部は外方に伸びり、おさまる。 。体形は浅く扁平。 。口縁部はやや尖り、体部は腰部的に開き深 い。	。口縁部、体部はヨコナデ。 。1腰部、体部はヨコナデ。 。口縁部、体部はヨコナデ。	細胞を多 く含む	淡灰色		
	身	18	3			小石・砂 粒を少し 含む	淡灰色		

BP6

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	粘土	焼成色	調法	備考
須恵器	环	18	1	。口縁部はやや水平に削り、体部は内窓 して開く。 。底部と体部の境界は直角するもののが ある。	。「腰部、体部はヨコナデ。 。口縁部はヨコナデ。	小石・砂 粒を多く 含む	淡灰色		

B P 9

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
漆器	环 蓋	18 1	◦ 天井部は非常に扁平で低く、天井部と口縁部の境界は緩やかに段になす。 ◦ 「漆器部」は傳からに記序して下方に突出し、端部内面に切削が進む。	◦ 「漆器部」はヨコナデ。 ◦ 砂粒を多く含む	◦ 砂粒を多く含む	淡灰色		
	瓶蓋	18 2	◦ 口縁部は「く」字に留めし、直立に近く開き、端部は丸くおさめる。 ◦ 体部は丸味をもつ、肩部は頸らない。	◦ 口縁部、体部はヨコナデ。 ◦ 砂粒を多く含む	◦ 砂粒を多く含む	淡灰色		

B P10

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
漆器	环 身	18 1	◦ 体部は直線的に開き、底部と体部の始半は屈曲して複雑となる。 ◦ 高台は小さく断面形状でふんぼりは少ない。 ◦ 高台はやや底部の内側に付く。	◦ 体部はヨコナデ。 ◦ 底部はヘラ切り後に仕上げナデ。	◦ 砂粒を多く含む	淡灰色		
土器	瓶	18 2	◦ 「漆器部」は肥厚してやや外反し、腹部内面に1条の凹痕がある。 ◦ 体部は短く、底部と体部の境界は丸味を帯びる。	◦ 「漆器部」、体部はヨコナデ。 ◦ 底部は仕上げナデ。	◦ 砂粒を多く含む	淡赤褐色		

B P13

種類	機械種類	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	手法の特徴	土焼成色	調法	焼量	備考
須磨器	环状	18 1	○天井部から口縫部に緩やかに伸び、端部を下方に強く屈曲させる。 ○口縫部外筋は凹む。	○「口縫部はヨコナデ。」	砂粒を多く含む	良好で堅	淡灰色		
灰輪器	皿型	18 2	○「口縫部はやや外反する。 ○体部は内窪で段をなす。」	○「口縫部、体部はヨコナデ。 ○口縫部、体部はヨコナデ。」	精良	良好で堅	白色		

第2井戸跡 (B P 9)

種類	機械種類	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	手法の特徴	土焼成色	調法	焼量	備考
須磨器	环状	19 1	○天井部は扁平で、天井部から口縫部に緩やかに伸びる。 ○「口縫部は下方に強く屈曲して突出し、断面三角形を出す。」	○天井部はへたり後にヨコナデ。 ○口縫部・天井部内面はヨコナデ。	小石・砂粒を多く含む。	良く硬質	淡灰色		
灰輪	皿型	19 2	○口縫部は丸いが、大きめ外反して端部を上方につまら上げ、断面二角形を呈している。 ○口縫部には全く表面性は見られない。	○「口縫部はヨコナデ。」	砂粒を多く含む	良好で堅	淡灰色		
灰輪器	皿型	19 3	○口縫部は端部に肥厚して外反する。 ○体部は内窪して開き、底の部分は窪い。 ○高行はやや高く、断面三角形を呈している。	○口縫部、体部は内外面共にヨコナデ。	微かに砂粒を含む	良好で堅	11kg 盛込 3.0cm	8.6kg	
灰輪	皿型	19 4	○「口縫部は端部に外反する。 ○体部は内窪して開き狭い。」	○「口縫部、体部はヨコナデ。」	微かに砂粒を含む	良好で堅	淡青灰色		
土輪器	皿型	19 5	○「口縫部は丸くおさめ、体部は直角方に開き	○口縫部、体部はヨコナデ。	精良	想く軟質	淡青灰色	(5)は	

種類	器皿	PLAN No.	土器	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調査	備考
		6	*	浅く扁平な感じである。 ○底部と体部の境界は明瞭でなく、底部から 直接体部に続く。	ヨコナデ。 ○底部は回転糸切り。			口径 15.6 cm 器高 4.5 cm	
鉢製品	鉢	19	7	○鉢を二つに折り曲げ、頭窓をスプローブ 状に作り、先端を尖らせたものである。				全長約 5.5 cm	

第1井戸跡 (BP1)

種類	器皿	PLAN No.	土器	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調査	備考
食器	碗	18	1	○人井部はやや扁平で、天井部の中央に瘤突 がつまづかが付く。 ○天井部から口縁部に緩やかに伸び、口縁部 は下方に向かって弧を描く。	○天井部はヘラ切り後にヨコナデ。 ○「横筋」、天井部内面はヨコナデ。	砂質多 く含む	良く観察 灰 灰 色		
		3							
		18	4	○高台は小さく全体底面下に手巻に取り付け、 高台の断面は万形を呈す。	○体部はヨコナデ。 ○底部はヘラ切り後ヨコナデ。	砂質多 く含む	良く観察 灰 灰 色		
		5	*	○口縁部はやや凹入し底張である。 ○体部は内輪して開き、窓い。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部は回転糸切り後にヨコナデ。	砂質を極 度に含む	良く観察 灰 灰 色	●はほとんど見られ ない。	
		6		○高台は小さくやや外方にふんばり、断面は 丸味を帯びた万形である。					
		7	*	○口縁部はやや肥厚したが仄する。 ○体部は内輪して開き、今体的に狭い。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部は回転糸切り後にヨコナデ。	精 良 良好で堅	口径 15.5 cm 器高 4.9 cm		
		9		○台形は比較的小さく、外刃にふんばり断面 形は丸味を帯びた地方をいい地三内形に 近い。			(8)は 口径 16.0 cm 器高 5.3 cm		

種類	器種	PLAN No.	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
土器器	壺	18	10	○口縁部は「く」字形に開き、端部は肥厚し 上方につま上げる。 ○体部はやや膨らむ。	○上縁部はヨコナデ。 ○体部がヨコナデし、 外側は手づくねの後にヨコ ナデを加えるが丁度ではない。	砂利・燃 骨を多く 含む	灰 色		
鉄製品	丸	18	11	○模様部は釘の頭部で逆「L」形に折り曲げ、 頭部を形作り作っている。					

P 51

種類	器種	PLAN No.	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	环 身	20	1	○たちあがりは内側し、非常に軽く、受脚よ り優かに出来る程度である。 ○受脚は水平面ではないし外 L/J/2は伸びている。 ○体部は浅、腹萼で、底部が尖り気味のもの (1)と半ならない(2)がある。	○口縁部と体部はヨコナデ。 ○底部はヘタ切り後にナデ回 転。 ○(1)は 小石・砂 質を多く 含む	良く緻密 化	灰 色	(1)は 口径 9.0cm 器径 3.2cm (2)は 口径 8.8cm 器径 3.1cm	

P 53

種類	器種	PLAN No.	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	环 身	20	1	○口縁部は外側して開き、端部は丸くおさめ る。 ○体部は楕円的で開き、やや浅い。 ○底部と体部接觸部は削削して鋸歯をなし、而 合は小さく断面逆台形で、底部のやや内側 に付く。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部はヘタ切り後に仕上げ ナデ。	砂利を少 しあわせ	灰 色	口径 12.1cm 器部 3.7cm	

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
灰陶器	皿	20	2 ○口縁部は單に丸くおさめ、体部は短く大きく開き度い。 ○底部と体部の境界は別個でない。底部は半らう。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部はヘタ切り後に仕上げナデ。 ○底部と体部の境界は別個でない。底部は半らう。	砂粒を少し含む	良好で堅板	灰	参考

P 01

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
灰陶器	皿	20	1 ○口縁部はやや厚掌して外反する。 ○底部は内凹気味に大きく削る。 ○角合ひ低く、丸味をもつている。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部は回転削り。	細砂を多く含む	良く吸質	淡暗灰色 口径 1.7 cm 器高 2.2 cm	灰輪は見られない。

P 75

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
灰陶器	皿	23	1 ○体部は内凹気味に陥る。 ○高台は低く、丸味を併せた長方形である。	○体部はヨコナデ。	精良	良く吸質	淡灰青色	

P 90

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	壺	23	1 ○天井部は扁平で、天井部から口縁部に緩やかに伸びる。 ○口縁部は盤かに下方に向き丸くおさめる。	○天井部にはカキ目調節を施す。 ○口縁部はヨコナデ。	砂粒を少し含む	長く吸質	灰	参考

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	断土成色	調法	量油	参考
			○口縁内面は、断面三角形の小さなかえりが付く。					

P 106

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	断土成色	調法	量油	参考
須恵器	壺	23	1	○天井部はやや丸味を持つ高い。 ○天井部と口縁部の境界の段落は、單に凹むだけである。 ○口縁部はやや開き気体に立ち、側面は凹ませて面を作る。	○口縁部内外底はヨコナデ。 ○天井部と口縁部の境界の段落は、單に凹むだけである。 ○口縁部はやや開き気体に立ち、側面は凹ませて面を作る。	砂粒を少 し含む	淡 茶色	

P 107

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	断土成色	調法	量油	参考
須恵器	壺	23	1	○天井部は扁平で低く、天井部中央に柄状に近いつまみが付く。 ○天井部と口縁部の境界は段をなして屈曲する。 ○口縁部は下方に強く屈曲する。	○天井部はヘラ切り後にナデナデ。 ○口縁部、天井部内面はヨコナデ。	砂粒を多 く含む	良好で堅 硬	口径 11.7 cm 高さ 2.1 cm

P 117

種類	器種	PLAN No.	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土焼成色調法	備考	
須恵器	环身	23	1	○口縁部は單に丸くおさめる。 ○体部はやや外反弧形に開き深い。 ○体部と底部の境界は丸味を帯びる。 ○高台は低いが大きく、外方にふんばり安定し、 底部や内側に付く。	○口縁部、体部の外周はロ コナデ。 ○底部はヘラ切り接着上げナ デ。	砂粒を多 く含む	良好で堅 硬	口径15.1cm 器高 3.6cm

P 131

種類	器種	PLAN No.	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土焼成色調法	備考	
須恵器	环身	23	1	○体部は直線的に開き深く。 ○体部と底部の境界は屈曲して腰をなす。 ○高台は小さく、やや外方にふんばる。	○体部内外面はヨコナデ。	砂粒を多 く含む	良好で堅 硬	口径15.1cm 器高 3.6cm

P 94

種類	器種	PLAN No.	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土焼成色調法	備考	
須恵器	环身	21	1	○体部直下に両台が付き、両台は非常に小さ く、やや外方にふんばる。	○底部はヘラ切り後にヨコナ デ。	砂粒を多 く含む	良好で堅 硬	口径15.1cm 器高 3.6cm
灰陶	皿	21	2	○口縁部はやや外反弧形に終る。 ○体部は内輪で開くが深い。 ○高台は比較的小さく、断面丸形でやや外 方にふんばる。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部は円板糸切り後ヨコナ デ。	砂 良 板	良好で堅 硬	②は 「①の試作外削面には、 「今西」の墨書きが見 られる。 ③は 口径13.2cm 器高 2.9cm

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	新土焼成色	調法	参考	
土鍋器	杯	21	5	○口縁部は單に丸くおさめ、端部内面に一一条の凹縫を造る。 ○体部は直線的に開くが、浅い。 ○体部と底部の境界は割曲して接をなす。 ○底部はやや膨らむ。	○口縁部、体部内外面はヨコナデ。 ○底部はヨコナデ。	良く硬質	淡赤褐色	口径19.9cm 器高3.0cm
飲食器	茶鉢	21	6	○断面万形を呈す。				

P 38

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土焼成色	調法	参考	
須恵器	环身	23	1	○口縁部は単に丸くおさめ、体部は直線的に開く。	○口縁部、体部はヨコナデ。	砂粉を多く含む	淡白灰色	

P 56

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土焼成色	調法	参考	
須恵器	皿	23	1	○口縁部はやや肥厚し、内傾する所を作る。 ○体部は外等厚に大きめで、浅い。 ○体部と底部の境界は割曲して接をなす。 ○底部はやや不安定で膨む。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部はヘラ切り後仕上げナデ。	小石を含む	暗灰色	口径13.5cm 器高2.4cm

P 57

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
発酵器	壺	23	1	○体部は渦巻的に開き、体部と底部の境界は扁曲して幾何学的。 ○高台は小さく断面逆台形を呈し、底部と底部の境界近くに付く。	○体部はヨコナデ。 ○底部はヘラリ後仕上げナデ。	小石・砂 粉を多く含む	淡灰褐色		
	皿	23	2	○口縁部は單に丸くおさめ、体部は渦巻的に開き、浅い。 ○底部と体部の境界は屈曲して段をなし、底部は平ら。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部はヘラリ後ヨコナデ。	砂粉を多 く含む	灰 色	口径13.2cm 盤身1.4cm	
土器	碗	23	3	○口縁部は「く」字形に開き、端部付近で屈曲して外反弧形に伸び、端部外側面は凹む。 「受口狀山腹」の一例である。 ○体部は、あまり盛らない。	○口縁部はヨコナデ。 ○体部は内面がヘラ削りを施し、外側は刷毛は調整を施す。	砂粉・小 石を多く含む	良く硬質 灰褐色		

P 140

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
発酵器	壺	23	1	○「腰掛け壺かど外反し」大きくおさめる。 ○体部は逆輪形の開き、深い。	○「腰掛けヨコナデ」。 ○「腰掛けヨコナデ」。	砂粉を多 く含む	良く硬質 灰褐色		

P 144

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
発酵器	鉢	23	1	○断面形状の極めて、頭部はそのままである。				長さ10cm	

P 142

種類	器種	PLAN No.	寸法	形態の特徴	手法の特徴	施土成色	調法	量	備考
須恵器	壺	23	1	。口縁部は大きく外反し、腹部は外上方につまみ上げ、仄くおさめる。	「口縁部はヨコナデ。」	妙複数多 (含む)	淡灰色		

P | 47

器種	PLAN No.	工具	形態の特徴	手法の特徴	船上	焼成色	調法	並編	考
煮沸器	23	1	。体部は漸進的に開き、深い。 。体部と颈部の境界は斜面するものの丸味を持つ。 。両台は小さいが、外方にふらんばら。	。口縁部、体側はヨコナナデ。 。底部はヘラ切り後ヨコナナデ。	砂粒を多く含む。	暗灰色			

P 152

種類	器	PLAN No.	寸器 No.	形態の特徴	手法の特徴	歯成歯	色調	磨削	参考
須毛器	坏身	23	1	①休部と底部の境界は鋸歯状で陥る。 ②舌台は小さく低い。	①休部はヨコナデ。 ②底部はヘラ切り後にヨコナデ。	砂粒を多く含む	暗灰色	良好で堅敏	

P156

種類	年齢	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	十指焼成法	塗装法	参考
羽垂點 坏身	23	1	「」状端部はやや尖り、体削は直線的に削く。 体削と底削は屈曲して削るなす。	L線削、体削はヨコナデ。 底削はヘタ切り後にヨコナデ。	砂を多く含む 良好で堅軟	暗灰色	

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土成色	調査法	量標	参考
種類	瓦器			。高台は小さく断面丸形である。	ア。				

P 181

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土成色	調査法	量標	参考
瓦器	瓦	23	1	。体部と底盤の発光は山形山字形です。 。高台は大きく外方にふくらみ、断面丸形 を呈し、底盤内側に付く。	。体部はヨコナナ。 。底盤はヘラ切り後にヨコナ ナ。	細孔多 く含む	灰白色		

P 210

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土成色	調査法	量標	参考
土器	甕	24	1	。口縁部は「く」字形に開き、腹部は上方に つまみ上げ、断面二角形を呈す。 。体部は施らみが少ない。	。口縁部、底盤はヨコナナ。 。腹部より下に数条の凹筋が 施される。	小石・砂 利を多く 含む	淡黄灰色		

P 229

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土成色	調査法	量標	参考
灰陶	壺	24	1	。口縁部は外反し、窓部は丸くさめる。 。体部は内凹して窓く。 。底盤は低く、断面丸形を呈つ丸形である。	。口縁部は丸くさめる。 。体部はヨコナナ。 。底盤は回転糰切り。	細孔少 し含む	白灰色	口径13.5cm 底径3.6cm	小形の壺である。

P 239

種類	器種	PLAN No.	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 燃 成 色	調 査 方 法	量 備 考
須記器	鉢	24 1	○体部は大きくて「人」字形に開き、端部は丸く大きく押厚する。	○口縁部はコネア。	解 良 悪く軟質 淡灰色		

P 266

種類	器種	PLAN No.	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 燃 成 色	調 査 方 法	量 備 考
須記器	杯	24 1	○口縁部は丸くさめる。 ○体部は直線的に開く。 ○体部と底部の境界は鋸歯状をなす。	○「川縫形」、体部はコナデ。 新芯を多く含む。	解 良 悪く軟質 淡灰色		

P 281

種類	器種	PLAN No.	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 燃 成 色	調 査 方 法	量 備 考
瓦	平瓦	24 1		○半瓦の一端で、端縁部をへ て削整している。 ○外側は細い布目を残し、内 側はナデ消している。	解 良 悪く軟質 淡青灰色		瓦の出土位置は甚 て少ない。

P N 300

種類	器種	PLAN No.	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 燃 成 色	調 査 方 法	量 備 考
土製品	輪	24 1	○窓状で、窓先には吹き出しが見られる。	○全体は手づくねで、内面は	解 良 外側は		混和材として新たに

種類	器種	PLAN No.	土器	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	量備考
灰釉陶器	羽口			高熱で焼けただれています。		灰赤色 内面は 赤褐色			モミガラが混入され ている。

P305

種類	器種	PLAN No.	土器	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	量備考
灰釉陶器	皿	24	1	○口縁部は外反して水平に近くなり、端部は丸くおさめます。 ○体泡は非常に浅く、内側底線に開く。 ○高台は小さく、断面逆S字形を呈す。	○「縁部、体部はヨコナデ。 ○底部は直角状切り落ヨコナデ。 ○底部は少々、内側底線に開く。	砂質を多く含む	良好で堅 硬	口径12.4cm 高さ 2.2cm	

P317

種類	器種	PLAN No.	土器	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	量備考
須恵器	环	24	1	○天井部は低く扁平で、中央部に非常に偏平なつまみが付く。 ○天井部から口縁部へ緩やかに傾する。	○天井部はヘラ削りを全面に施す。 ○は疊乳、天井部内面はヨコナデ。	小石・砂 質を多く含む	良好で堅 硬	灰 色	

PN320

種類	器種	PLAN No.	土器	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	量備考
須恵器	环	24	1	○天井部は低いがやや丸ぼうをもつ。	○天井部はヘラ削りを施す。	砂質を少	良好で堅	灰 色	

種類	器種	PLAN No.	土器 名	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	量備	考
				・天井部中央に光頭状のつまみが付くものと 見られる。 ・天井部から口縁部へゆるやかに伸び、端部 は單に丸くおさめる。 ・口縁部内部のかぶりは、断面二角形を呈し て大きく、口縁部よりも下方に出る。	・口縁部、天井部内面はヨコ ナデ。	し含む 紙				

PN 336

種類	器種	PLAN No.	土器 名	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	量備	考
治療器	杯舟	24	1	・口縁部はやや外反し、端部はやや尖る。 ・体部は直線的に開き、体部と底部の境界は 斜面せず、丸味をもちやや凹む。	・口縁部、体部はヨコナデ。	砂粒を少 し含む 紙	良好で堅 い	灰 色		

PN 348

種類	器種	PLAN No.	土器 名	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	量備	考
須恵器	長颈瓶	24	1	・瓶泡は細く、口縁部は外反して開き、端部 は上下に肥厚し而ばして中央は 凹む。	・口縁部はヨコナデ。	粗砂を多 く含む 紙	良好で堅 い	灰 色		

P348

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土焼成色	調法	量備	参考
土器	环	24 1	○口縁部はやや外反し胎部は火くもさめる。 ○体窓は大きく開いて抜い。 ○体部と底部の境界は屈曲せず、丸輪を帯びてやや同化。 ○底部はやや底ふ不安定である。	○山根部、体部はヨコナデし凹が深い。 ○底部はヘラ切り後にヘラオナエ。	精良	良好で堅硬	11種 1.20kg 器高 3.0cm	

P356

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土焼成色	調法	量備	参考
須恵器	环身	24 1	○口縁部は腹に丸くおさめ、体窓はやや外窓気味に開き、深く大きい。	○口縁部はヨコナデ。 ○底部はヨコナデ。	砂質を多く含む	良好で堅硬	灰	

P364

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土焼成色	調法	量備	参考
須恵器	环	24 1	○天井部は非常に扁平で低い。 ○天井部と口縁部の境界は屈曲して段を作ります。 ○口縁部は外下方に短く筋曲り、丸くおさめる。	○口縁部はヨコナデ。	砂粒・小石を多く含む	悪く軟質	暗灰色	

P 374

種類	器種	PLAN No.	上部 土器 部	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
土陶器	皿	24	1	○口縁部はやや外十方につまみ上げる。 ○体部は非常によく浅く塑い。 ○底部と体部の境界は削出し、底部は平ら。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部は回転糸切り。	小石・砂 粒を多く 含む	悪く軟質 淡青白色	口径 12.2cm 基高 2.2cm	

P 380

種類	器種	PLAN No.	上部 土器 部	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	煎茶碗	24	1	○開口部は盛り、体部は底く扁平な感じを受け る。 ○体部はヨコナデ。 ○底部はヘラ切り後ヨコナデ。 ○底部と底部の境界は屈曲して隙をなし、高 台は非常に小さい。	○底部はヨコナデ。 ○底部はヘラ切り後ヨコナデ。	小石・砂 粒を多く 含む	良好で堅 硬	淡灰 色	器表に自然釉付着

P 381

種類	器種	PLAN No.	上部 土器 部	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	环	24	1	○口縁部は単に丸くおさめ、体部は大きくな る。	○口縁部、体部はヨコナデ。	砂粒を多 く含む	良好で堅 硬	灰 色	

P 353

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	粘土成色	調査	備考
箱山型	灰 壺	22	1	○天井部は比較的平らで、その中央部にやや高いつまみが付く。	○天井部はへラ削り。 ○天井部分前面はヨコナ�다。	砂粒を少 し含む	灰 色	
箱山型	灰 壺	22	2	○口縁部は尖り気味に削る。 ○体部は直線的に開き、体部と底部の境界は削曲して後をなす。 ○底部は平。	○口縁部、体部はヨコナ�다。 ○底部はへラ切り後にヨコナ デ。	砂粒を多 く含む	淡灰 色 口径 1.20 cm 器高 3.5 cm	一括資料として良好 である。
箱山型	灰 壺	3	1	○口縁部は直に丸くおさめる。 ○体部は直線的に開き、体部と底部の境界は 屈曲して後をなす。	○口縁部、体部はヨコナ�다。 ○底部はへラ切り後にヨコナ デ。	砂粒を多 く含む	淡灰 色 口径 1.20 cm 器高 3.9 cm	
箱山型	灰 壺	5	5	○高台は底部のやや内側に付き、小さくやや 外方にふくらばり、断面逆台形を呈す。	○口縁部、体部はヨコナ�다。 ○底部はへラ切り後にヨコナ デ。	砂粒を多 く含む	淡灰 色 口径 1.20 cm 器高 5.3 cm	
箱山型	灰 壺	6		○口縁部は外反して伸び、端部は水平に近く なり尖る。 ○体部は直線的に開き、体部と底部の境界は 屈曲して後をなす。 ○高台は小さく、断面逆台形を呈して外方に ややふくらぶる。 ○大型の壺である。	○口縁部、体部はヨコナ デ。 ○底部はへラ切り後にヨコナ デ。	砂粒を多 く含む	淡灰 色 口径 1.80 cm 器高 5.3 cm	

PD 5

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	粘土成色	調査	備考
鉢製品	鉢	24	1	○岱形状を呈し、その下辺を刃削としたもの で小鉢である。横断面は長ノギである。			万葉編 4.3 cm 全長 8.0 cm	

P351

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態	の	特徴	手法	の	特徴	胎	土	焼成	色	調査法	量	備考
煮沸器	杯	22	1	○口縁部等は単に丸くおさめ、体部は直線的 に開く。 ○体部と底部の端部には油面するものの丸味を 持つ。 ○高台は、やや大きく外方にふんばる。	○「U」縁部、体部内外面はヨコ ナデ。 ○底部はヘラ切り後ナデ調性。	砂粒を多 く含む	良好で堅 硬	灰 色	(1)は 口径 14.3 cm 器高 4.3 cm (2)は 口径 14.8 cm 器高 4.0 cm	—括資料として貯蔵 なものである。						
煮沸器	盆	22	4	○「U」縁部はやや開き底部に立ち、端部は丸く おさめる。 ○体部は肩部は深ららず、小株を持つ。 ○底部は片手を持ち、不安定。	○「U」縁部、体部はヨコナデ。 ○底部はヘラ切り後にナデ調 性を施す。	砂粒を少 し含む	良好で堅 硬	灰 色	口径 8.7 cm 器高 8.3 cm	—括資料として貯蔵 したものである。						
土器	杯	22	5	○口縁部は丸く尖缺となり、僅かに外反する。 ○体部は直線的に削ぎ、底部と体部の境界部は 削曲するものの丸味をもつ。 ○底部は平らで安定している。	○「U」縁部、体部内外面はヨコ ナデ。 ○底部はヘラ削り。	砂粒を多く 含む	悪く軟質	淡青褐色	口径 13.9 cm 器高 3.2 cm	—括資料として貯蔵 したものである。						
III	22	6	○「U」縁部はやや外反し、端部は上方につまり 「ナギ」丸くおさめる。 ○体部は内面側部に開き、浅い。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○体部内外面にはやや粗く砂 粒が施される。	精	良	悪く軟質	淡青褐色								

P350

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態	の	特徴	手法	の	特徴	胎	土	焼成	色	調査法	量	備考
煮沸器	壺	22	1	○天口部は底く扁平で、天井部から「U」縁部へ 緩かに伸びる。	○「U」縁部はヨコナデ。	砂粒を多 く含む	良好で堅 硬	灰 色								

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調査	参考
环	身	22	2	○口縁部は單に丸くおさめ、体部は直線的に開いて深い。 ○底部と体部の境界は割離し底をなす。 ○高台は非常に小さく、やや外方にふくらむ。	○口縁部、体部はヨコナナデ。 ○底部はヘタ切り後にヨコナデ。 ○底部は手づくね。	砂粒を多く含む	良く變質 灰	口径 11.6cm 高さ 4.5cm	

M 1

種類	器種	PLAN No.	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調査	参考
須恵器	环	25	1	○口縁部等は單に丸くおさめる。 ○体部は直線的に開き、体部と底部の境界は尾出しして底をなす。 ○高台は小さく、断面方形ないし逆台形をする。	○口縁部、体部はヨコナナデ。 ○底部はヘタ切り後にヨコナナデ。	砂粒を多く含む	良く變質 灰	焼成 灰	
灰陶	皿	25	5	○口縁部等は丸くおさめ、体部は内凹して浅い。 ○高台はやや高く、断面長方形で丸味を持つ。 ○底部は内凹して浅い。	○口縁部、体部はヨコナナデ。 ○底部は回転糸切り。	橋	灰	辰巳で深 板	
灰陶	碗	25	6	○口縁部等はやや高く、断面長方形で丸味を持つ。 ○底部は内凹して浅い。 ○高台はやや高く断面長方形をなす。	○口縁部、体部はヨコナナデ。 ○底部は内凹して浅い。	砂粒を少 しきむ	良好で堅 板	辰巳で深 板	
白磁	碗	25	8	○口縁部等は外側に肥厚し、所謂「下締丸」となっている。 ○底部は直角的に開く。	○口縁部、体部上半はヨコナナデ。 ○底部はヘタ切り。	橋	辰巳で堅 板	施土は 白灰色 施土は 白色	
土師器	光明皿	25	9	○口縁部は単た丸くおさめ、体部はやや凹み浅い。	○口縁部はヨコナナデ。 ○底部、底部は手づくね。	橋	良く變質 灰	辰巳で深 板	

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
甕	甕	25	10	○口縁部は「く」字形に開き、側面はやや外反する。 ○全体は球体に近い。	○口縁部はヨコナデ。 ○全体は子づくねの上からヨコナデを施すが、「一」ではない。	均質で堅	淡褐色	

包 合 層

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	甕	28	1	○天井部は丸味を持ち、中央に凹凸状のつまみが付く。 ○天井部から口縁部に緩やかに伸び、端部は単に丸くおさめる。 ○口縁部附近の内面にふえりが付くが、かえりは口縁部よりも下方に突出している。	○片割はヨコナデ。 ○天井部はヘアリを施す。 ○天井部、天井部外側はヨコナデ。	砂粒を多く含む	淡灰色 及灰色	
		3						
		4	○口縁部の形態は1～3と同じであるが、天井部は高々。 ○天井部は比較的均一扁平で、比較的緩やか。 ○天井部から口縁部へ緩やかに伸び、端部は僅かに下方に折り曲げる。 ○口縁部附近の内面に小さなかえりが付く。	○口縁部はヨコナデ。 ○天井部はヘアリを施す。 ○天井部、天井部外側はヨコナデ。	砂粒を多く含む	白灰 淡灰色		
		5						
		6						
		7	○天井部は既く扁平。 ○天井部から口縁部に緩やかに伸び、口縁部は下方に短く屈曲し、断面三角形を呈す。	○口縁部はヨコナデ。	砂粒を多く含む	淡灰色 及灰色		
		9						
		10	○天井部はやや高く、中央部に弱く下たまみ。 ○天井部はヘアリを施す。	○天井部はヨコナデ。	砂粒を少	良好で堅 淡灰色		

種類	器種	PLAN	横幅	形態の特徴	手足の特徴	頭	十脚	触毛	顎	口	咽	食道	胃	直腸	膀胱	尿道	生殖器	考
		13	1	が付く。 ◦人井部と口縫部の縫界はやや円曲して腹をなす。 ◦口縫部は下方に短く屈曲し、断面三角形をなす。		の頭も見られるが、人半は△切り後にヨコナテを施す。 ◦「輪」部、天井部内面はヨコナデ。	し含む ／	軟	／	淡灰色	／							
		14	1	が付く。 ◦天井部は扁平で、中央部に凹窓状の縫界は腹をなす。 ◦口縫部は下方に短く屈曲し、断面三角形をなす。		◦天井部、口縫部内外面はヨコナデ。 ◦天井部、天井部内面はヨコナデ。	小石・砂 ／ 沙粒 ／ 良く吸着	良好で堅 ／ 軟 ／ 悪く吸着	淡灰色 ／ 灰 ／ 色									
		17	1	が付く。 ◦人井部と口縫部の縫界は斜めにして腹をなす。 ◦口縫部部外下方に短く屈曲する。		◦天井部、口縫部内外面はヨコナデ。 ◦天井部、天井部内面はヨコナデ。	砂粒を少 ／ 含む ／ 软質	良好で堅 ／ 軟 ／ 悪く軟質	灰 ／ 暗灰色 ／ 色									
		18	1	が付く。 ◦天井部は通常に扁平である。 ◦人井部と口縫部の縫界は腹は緩やかになる。		◦天井部、口縫部内外面はヨコナデ。 ◦天井部、天井部内面はヨコナデ。	砂粒を少 ／ 含む ／ 软質	良好で堅 ／ 軟 ／ 悪く軟質	灰 ／ 暗灰色 ／ 色									
		20	1	が付く。 ◦口縫部部は丸味を持ち、ただ單純に脇厚するだけのもの跡も見られる。		◦人井部、口縫部内外面はヨコナデ。 ◦天井部は通常に扁平。 ◦口縫部は、體から外下方に突出させるだけである。	砂粒を少 ／ 含む ／ 软質	良好で堅 ／ 軟 ／ 悪く軟質	灰 ／ 暗灰色 ／ 色									
		21	1	が付く。 ◦天井部は通常に扁平。 ◦口縫部の縫界は見られない。		◦人井部、口縫部内外面はヨコナデ。 ◦天井部は通常に扁平。 ◦口縫部は、體から外下方に突出させるだけである。	砂粒を少 ／ 含む ／ 软質	良好で堅 ／ 軟 ／ 悪く軟質	灰 ／ 暗灰色 ／ 色									
		22	1	が付く。 ◦体部は内凹状に開き、は体と体部の境界は緩やかに屈曲し、無い痕をもつ。 ◦底部はやや膨らむ。		◦口縫部、体部内外面はヨコナデ。 ◦底部はヘタ切り後にヨコナデ。	砂粒を多 ／ 含む ／ 软質	良好で堅 ／ 軟 ／ 悪く軟質	淡灰色 ／ 暗灰色 ／ 色	口径1.2.8cm 高さ3.3cm								
		23	1	が付く。 ◦体部は外観して丸い縫をもつ。 ◦底部は平らである。		◦口縫部、体部内外面はヨコナデ。 ◦底部はヘタ切り後ヨコナデ。	砂粒を多 ／ 含む ／ 软質	良好で堅 ／ 軟 ／ 悪く軟質	淡灰色 ／ 暗灰色 ／ 色									
		24	1	が付く。 ◦体部は直線的ないしやや外弯弧形に伸びる。		◦口縫部、体部内外面はヨコナデ。 ◦体部は直線的ないしやや外弯弧形に伸びる。	砂粒を少 ／ 含む ／ 软質	良好で堅 ／ 軟 ／ 悪く軟質	淡灰色 ／ 暗灰色 ／ 色									

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	画法	施術	参考
		30	○底部と体部の境界は規則して横をなす。 ○高台は小さく、断面万形といい、逆台形を呈して底部のやや内側に付く。	○底盤はヘタ切り後にヨコナデ。 ○底部はヨコナデ。	砂粉を多く含む	暗灰色	△	良好で堅敏	
		31	○全体と底部の境界は屈曲して横をなす。 ○高台は小さく外方にふんばって、底部のやや内側に付く。	○体部内外面はヨコナデ。 ○底盤はヘタ切り後ヨコナデ。	砂粉を多く含む	淡灰色	△	良好で堅敏	器表に白銀色の自然地が付着する。
环	瓶	28	○天井部は高く膨らむ。 ○天井部と口縁部の境界の段階は純く、やや外方に突出する。 ○口縁部は直立し、脚部はただ削り大きくおさめる。	○天井部は全面にわたりヘタ角りを施す。 ○天井部の面と口縁部はヨコナデ。	砂粉を多く含む	暗灰色	△	良好で堅敏	器表に白銀色の自然地が付着する。
		32	○天井部はやや膨らみが少ない。 ○天井部と口縁部の境界は、ただ単に凹陥がある。	○天井部の $\frac{1}{2}$ はヘタ削りを施す。 ○天井部内底、口縁部はヨコナデ。	砂粉を少しあしむ	暗く銀質	△	良好で堅敏	
		33	○天井部はやや膨らみが少ない。 ○天井部と口縁部の境界は、ただ単に凹陥がある。	○天井部の $\frac{1}{2}$ はヘタ削りを施す。 ○天井部内底、口縁部はヨコナデ。	砂粉を少しあしむ	暗灰色	△	良好で堅敏	
		34	○口縁部は内凹し、端部は單に大きくおさめある。 ○「T」縫部は内凹である。	○口縁部、底盤はヨコナデ。	砂粉を多く含む	暗灰色	△	良好で堅敏	
环	身	29	○たちあがりは低く大きく、縦少化して全体的に偏平である。 ○口縁部はやや尖る。 ○受部は外上方に伸び、受部上面にヘタによる1条の凹隙を施し、体部は内凹して偏平である。	○たちあがりは非常に小さく内傾し、受部は受部上面に小さな凹隙もある。 ○口縁部は丸くおさめ、受部は外上方に伸びる。 ○体部は内凹し、非常に偏平である。	砂粉を多く含む	暗灰色	△	良好で堅敏	环蓋に対応するものと思われる。
		35	○たちあがりは非常に小さく内傾し、受部は受部上面に小さな凹隙もある。 ○口縁部は丸くおさめ、受部は外上方に伸びる。 ○体部は内凹し、非常に偏平である。	○たちあがりは非常に小さく内傾し、受部は受部上面に小さな凹隙もある。 ○口縁部は丸くおさめ、受部は外上方に伸びる。 ○体部は内凹し、非常に偏平である。	砂粉を多く含む	暗灰色	△	良好で堅敏	环蓋(33, 34)に対応するものと思われる。

種類	器種	PLAN	上部	形態の特徴	手法の特徴	土	焼成色	調法	地質考
	壺	29	38	○天井部は高く、膨らみをもつ。 ○天井部と口縁部の境界は「く」字形に大きく屈曲し、口沿部は内凹して開く。 ○口縁部は単に丸くおさめる。	○天井部、口縁部外面はヨコナデ。 ○天井部、口縁部は「く」字形に大きくなびく。	非常に精緻	暗灰色	良好で堅	小けであるため、器形は明確でないが、全体的に滑軟な感じを受け、他の須恵器と趣を異にする。
		39		○口縁部は天井部から下方に直角に折れ、棱を取る。 ○天井部中央にはつまみが付く。 ○「口縁部は内方にやや膨脹した面を取る。	○天井部、「口縁部外面はヨコナデ。 ○天井部、口縁部は「く」字形に大きくなびく。	砂利を多く含む	灰	色	短頭部の窓であろう。
短頭器		29	40	○口縁部は短く尖り、腹部は尖る。 ○肩部は張って、体部は直線的に開く。 ○背合は小さく、底部と体部の境界付近に付く。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○底部はヘタ切り後ヨコナデ。	砂利を少しあむ	灰	色	
		41							
		29	42	○頸部は短く肩部は丸味を持ちて角張らず、 体部は長削である。	○体部はヨコナデ。	砂利を多く含む	灰	色	所謂「小刻版」と呼ばれるものか。
		43	*	○(43)は、腹を有して2段に大きく外反する口縁部である。 ○(44)は、船錨形に近い小さな体部で、底部に粘土塊で円筒状の注口が付けられている。	○「口縁部はヨコナデ。 ○体部はヨコナデし、注口はつくね。	精良	灰	色	
		44							
押鉢		28	45	○直線的に削いた口縁部で、腹部はやや肥厚して水平に面を取る。	○「口縁部はヨコナデ。 ○直線的に削いた口縁部で端部で端部を上につけ出すする。	砂利を多く含む	良好で堅	淡灰色	
		29	46	○(46)は、直線的に削いた口縁部で端部で端部を上につけ出すする。 ○(47)は、大きく外彎して開き、端部を上方につまみ上げ、新面三形にしたもの。 ○(48)は大きく直線的に削き、口縁部中位	○口縁部はヨコナデ。	砂利を多く含む	良好で堅	淡灰色	
		48							

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
平瓶	船	29	と縁部外側に断面三角形の凸槽を遺す。 ○縁部が直線的に開き、縁部外間に断面二角形の凸槽が付く。		砂粒を少し含む。	良好で堅	灰色	量は少ない。
長颈瓶	舟	50	○体側は丸味をもつ。 高台は小さく、大きくなりより内側にやや突出する。	○体側はヨコナデ。 底部はヘラ切り後ヨコナデ。	砂粒を多く含む。	良好で堅	淡灰色	
壺	52	53	○蓋も見られるが、網片が多く全く名前を知ることはないなかった。	○体側外側は平行叩き目を残す。 ○体側内面は同心円吹き目を密に施し、部分的にナデで削る。	砂粒を多く含む。	良好で堅	白色	
灰釉陶器	瓶	54	○口縁端部は僅かに削平し、外観する。 ○体側非常に浅く、内窓吹きに閉く。 ○高台は小さく、断面方形のものや、台形を呈するものもあり、ややふらばる。	○口縁部、体側外表面はヨコナデ。 底側は向軸系切り後にヨコナデ。	粘り砂粒を含む。	良好で堅	白色	全体的に非常に規格化が見られる。
段皿	60	60	○体側は凹凸で段を有し、大きくなぐく。	○体側はヨコナデ。 底側はヘラ切り後ヨコナデ。	粘り砂粒	良好で堅	白色	
	*	61	○口縁部は僅かに外反し、縁部はやや肥厚する。	○口縁部、体側外表面は共にヨコナデ。	粘り砂粒	良好で堅	白色	

種類	規格	PLAN No.	土器	形態の特徴	手法の特徴	胎土	成色	技法	備考
		30 64	64	○体部は内凹して開き、深い。 ○高台はやや低く、断面長方形で外方に大き くふんばる。	○底部は回転糸切り後にヨコ ナデ。 ○口縁部や体部の形態は(61～64)と同じで ある。 ○高台は低く、断面形は近い万形 を呈すものが多い。	細砂を多 く含む			
		30 65	65	○口縁部や体部の形態は(61～64)と同じで ある。	○口縁部・体部内外面は共に ヨコナデ。 ○底部は回転糸切り後にヨコ ナデ。	良好で堅 い 細 砂を多 く含む	白色		
		30 66	66	○口縁部は丸く、断面長方形で外方に大き くふんばる。	○口縁部・体部内外面は共に ヨコナデ。 ○底部は回転糸切り後にヨコ ナデ。	良好で堅 い 細 砂を多 く含む	白色		
山茶碗	塊	30 70	70	○口縁部は盛かに外凹し、断面は丸くおさめ る。 ○体部は内凹して開き、やや浅い。 ○高台はやや高く、断面長方形で外方に大き くふんばる。	○口縁部・体部内外面は共に ヨコナデ。 ○底部は面糸糸切り。	細砂を多 く含む	淡灰 色	11号15.7cm 深筋 4.8cm	全体的に作りは粗陋。
十輪器	塊	30 71	71	○口縁部は外し施部は丸くおさめる。 ○体部は内凹して開き、底部と体部の焼けは 崩壊して矮をなす。 ○底部は平らである。	○口縁部・体部内外面は共に ヨコナデ。 ○口縁部・体部内外面は共に ヨコナデ。	粗 砂を多 く含む	淡灰 色	口径11.0cm 深筋 4.5cm	
		72		○口縁部は外反し、焼部は丸くおさめる。 ○体部は内凹して開き、底部と体部の焼けは 丸味をもつ。 ○高台は逆台形で小さく、裏面に凹く。 ○円形と椭円形は次第に大きくなる。 ○筒部は丸く、6面に崩れりをしている。	○口縁部・体部内外面は共に ヨコナデ。				
弓	块	30 73	73	○円形と椭円形は次第に大きくなる。 ○筒部は丸く、6面に崩れりをしている。	○筒部はへらで削りを行う。 ○筒部は丸く、6面に崩れりをしている。	細砂を少 し含む	淡黄 色		
III	30 74	74		○口縁部はやや外反し、端部外面に長い凹線 が窓る。 ○体部は直角的に開き度合い。 ○体部と底部の焼部は屈曲して矮をなし、底 部は手づくね。	○口縁部・体部内外面は共に ヨコナデ。 ○底部は手づくね。	細砂を少 し含む	良く硬質 淡青 色		

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土焼成色	調法	量備考
			部は平ら。				
壺	石器	30 75	。口縁部は「く」字に短く屈曲し、端部は上方に盛り込み上げ、丸くおさめる。	。口縁部は子づくね。 。体部はヨコナデ。	細砂・雲母を多く含む	良く硬質 風漬色	
		76	。口縁部は盛り込み、「受口式」になり、端部は内側にして前をとどむ。 。体部は、ほとんど膨らまない。	。体部外面は解毛目調然し、内面はナデ。	砂粒を多く含む	淡灰色	
黒色	壺	30 77	。口縁端部内面に、1条の凹筋が巡る。	。体部外側と底部外側に、常に明紋を施す。	砂粒・雲母を多く含む	良く硬質 体部と底 部内面は 黒漬色 底部は 淡褐色	
上器		78	。体部は内側して開き、深い。 。高台はやや高く、前面方形で側方にふんばる。				
		79	。口縁端部はただちに丸くおさめる。 。体部は内側して開き、やや深い。 。高台は非常に小さく、断面は逆三角形を呈す。	。口縁部と体部内面、底面内面に皆に滑紋を施す。 。体部外面は子づくね。	砂粒・雲母を多く含む	良く硬質 「口径 1.6 cm 器高 5.0 cm	
		80	。口縁部はやや外反し、端部は僅かに上方につまりみ上げ、内側に「一の沢」状凹筋を巡す。 。体部は内側して開き、やや深い。 。高台はやや高く、断面逆三角形を呈し、ややふんばる。	。口縁部、体部はヨコナデ。	砂粒・雲母を多く含む	良く硬質 体部と底 部内面は 黒漬色 底部は 淡褐色	
石器	刮片	30 81	。三角形に近い形を呈し、歯ヶ所に打痕が現られる。			特黒色 を呈して いる。	石質については明瞭 にはいらないがサス カイトに近いものと 思われる。

種類	器種	PLAN No.	土壤	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	質	備考
陶製品	鉢	30	82	断面長方形の鉢で、頭部は逆「L」形にくり出る。先端部は尖らせてある。				全長 9.9cm を測る。		
石製品	砥石	30	83	棒状で上端、下端を尖らせるが、7面に鏡面を持っている。				石質は砂岩と思われる。		

第1トレント

種類	器種	PLAN No.	土壤	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	質	備考
消音器	环	32	1	口唇部はやや肥厚し、やや下方に向う。 「口唇内面」断面三角形を示す小さなねえりが見られる。	口唇部はヨコナデ。	砂粒を少 し含む	良く吸音 灰褐色			
	舟	32	2	体部と底盤の接觸は斜めし、底台は体直置 下に付いて、小さく断面逆台形を呈する。	体部はヨコナデ。	砂粒を多 く含む	悪く吸音 灰褐色			
山茶碗	碗	32	3	施合は非常に過化し、僅かに底盤から突出 する程度である。	底部は回転木切り。	砂粒を多 く含む	良好で堅 白灰色			

第2トレント

種類	器種	PLAN No.	土壤	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	質	備考
灰釉器	碗	32	1	口唇部は外方に凹出し、断面二角形に突 出する。 体部は内窓して開く。	口唇部凹字ハチで窓形にして いる。 口唇部、体部はヨコナデ。	良好で堅 密	白色			器形は特異で、他の 可能性もある。

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	焼成色	調法	備考
	32	2	○体部は内側して開き深い。 ○高台は小さく、や内凹特殊に立つ。	○体部はヨコナデ。	精 良	良灯で堅 板	

第3トレント

種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	焼成色	調法	備考
須恵器	杯 盆	32 1	○入井部は非常に扁平で底く、中央部は鉢状の輪郭はまぶみが付く。 ○天井部と口縁部の堤状突起が正面にして段をなし、口縁部は下方に切く突出する。	○天井部はへたり巻きヨコナデ。 ○口縁部はヨコナデ。	精 良	良灯で堅 板	
		32 2					
	身	32 3	○口縁部はやや外反し、輪郭は丸くおさめる。 ○体部は直線的に開く。	○口縁部、体部はヨコナデ。 ○砂粒、体部はヨコナデ。	砂粒少 し含む	良灯で堅 板	
灰陶器	碗	32 4	○口縁部はやや外反し、輪郭は肥厚する。 ○体部は直線的に開き、深い。 ○高台は非常に低く、丸味を持つ。	○口縁部、体部はヨコナデ。	精 良	良灯で堅 板	
		32 5					
	皿	32 6	○体部は片当たりし、浅く開く。 ○高台は非常に小さく、所面造三角形を呈し、底面とは団ませただけである。	○体部はヨコナデ。 ○底面は割り出している。	精 良	良灯で堅 板	

第5トレント

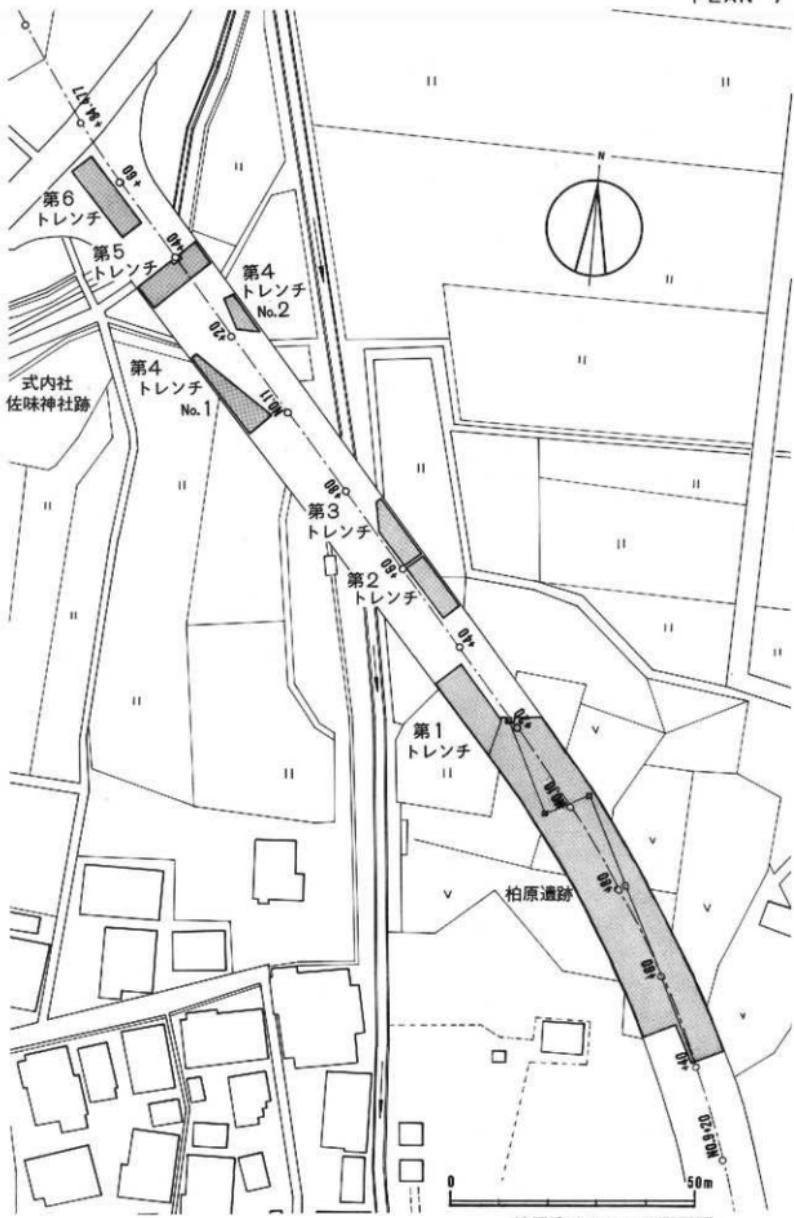
種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	环 身	32 1	○口縁部は丸くおさめ、体部は外反気味に開く。	○口縁部、体部はヨコナデ。	精良	良好で堅板	白灰色	
灰陶器	碗	32 2	○口縁部は肥厚し丸くおさめる。 ○体部は直線的に開く。	○体部はヨコナデ。	細砂を多く含む	良好で堅板	白灰色	
		4	○体部は内窪して開く。 ○内窩はやや高く、断面逆三角形ないし内面弧度、やや外方にふんばる。	○体部はヨコナデ。 ○底部は回転木切り巻にヨコナダ。	精良	良好で堅板	白灰色	
山茶碗	碗	32 3	○体部は内窪して開く。 ○高台は非常に小さく、断面逆三角形に近い。	○体部はヨコナデ。 ○底部は回転木切り。	小石・砂利を少し含む	良好で堅板	白灰色	織は重ね焼き痕を残す。
		5	○高台は内窪気味で深い。	○体部は切目をナデ消す。	砂粒を少しあわせ	悪く軟質	淡灰色	
須恵器	盞	32 9	○体部は膨らむ。	○体部はヨコナデ。	細砂質	良好で堅板	白灰色	
天目碗	碗	32 11	○体部は内窪気味で深い。 ○高台は小さく、断面長方形を呈す。	○高台は削り出し。	粘土は白灰色 輪は青緑色	良好で堅板	白灰色	

第6トレント

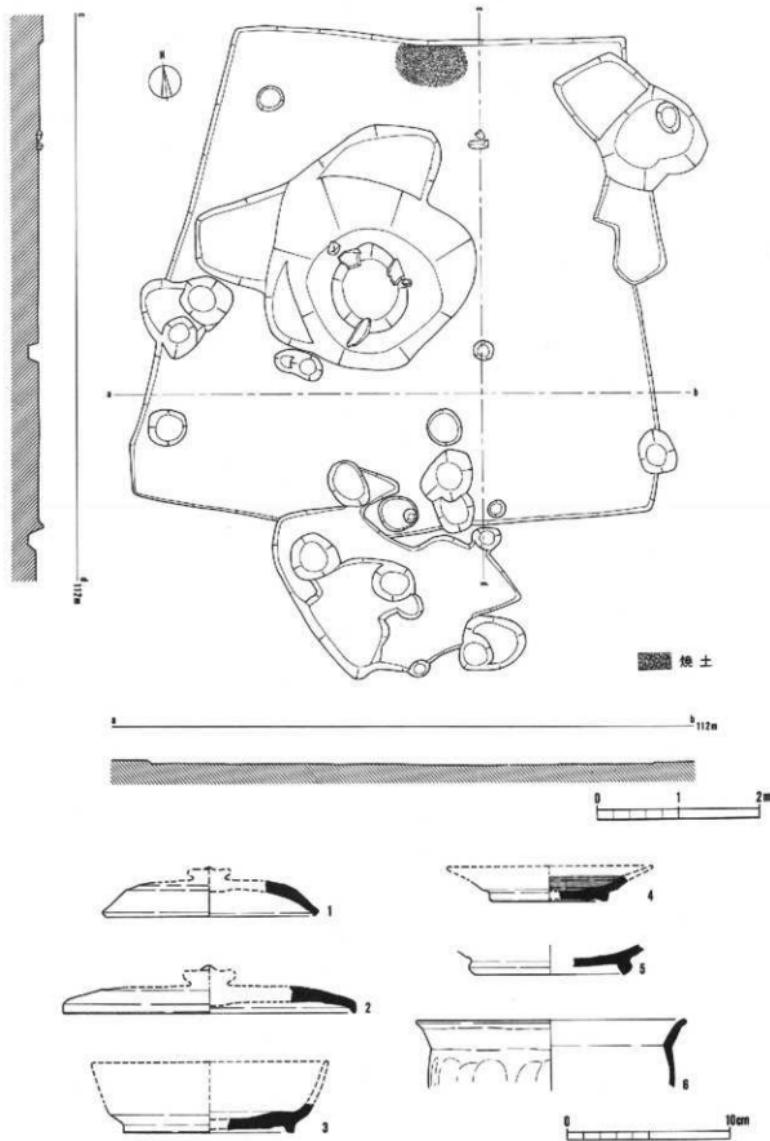
種類	器種	PLAN No.	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色	調法	備考
須恵器	盞	32 1	○体部は直線的に開く。 ○高台は非常に小さく、体部底に付き外方にふんばる。		小石・砂利を多く含む	悪く軟質	灰色	



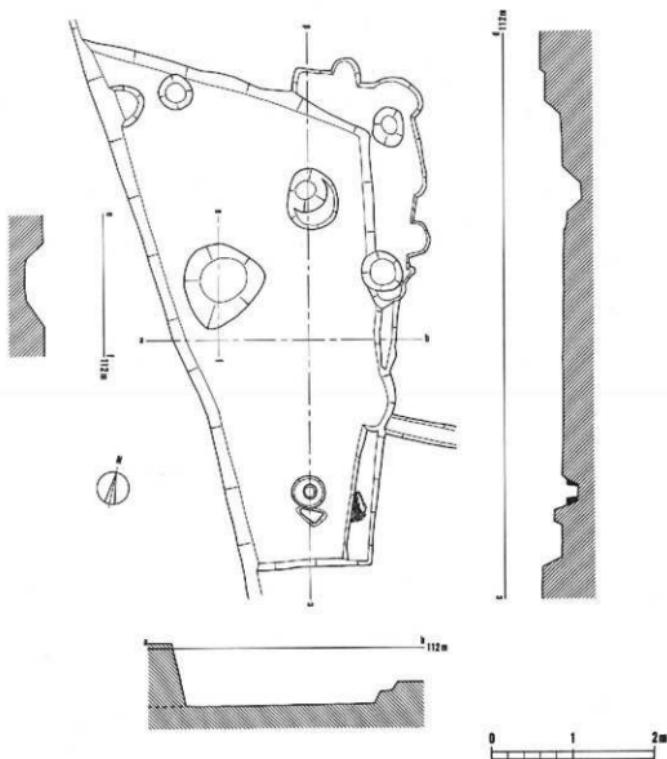
柏原遺跡周辺地形図



柏原遺跡 トレンチ配置図



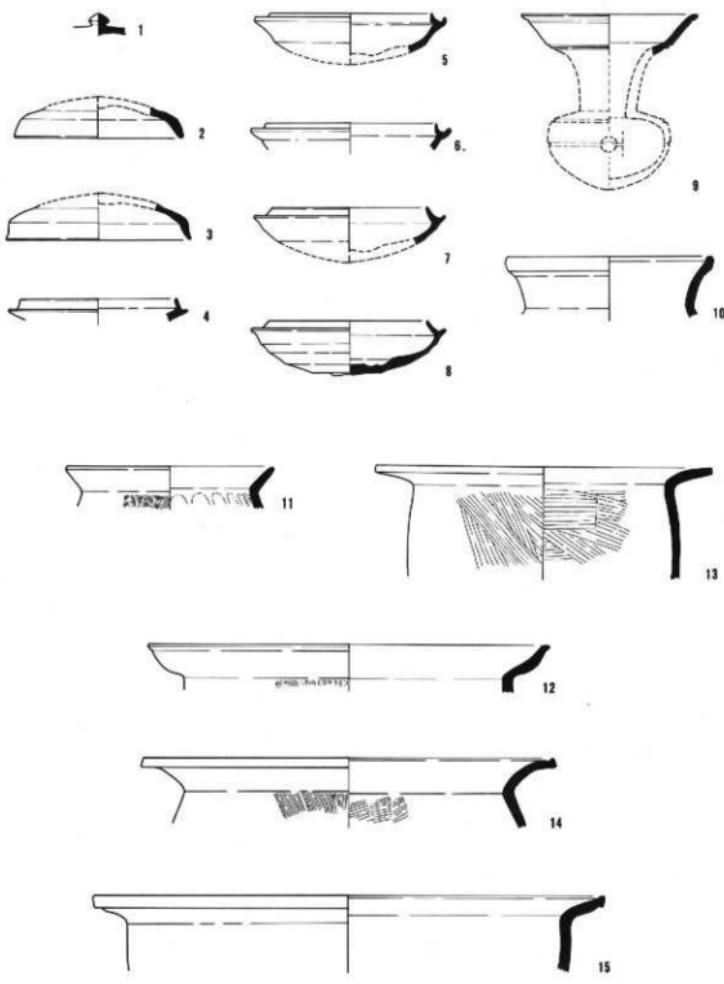
第1住居跡(T1)実測図、出土遺物実測図



■ ■ 烧 土

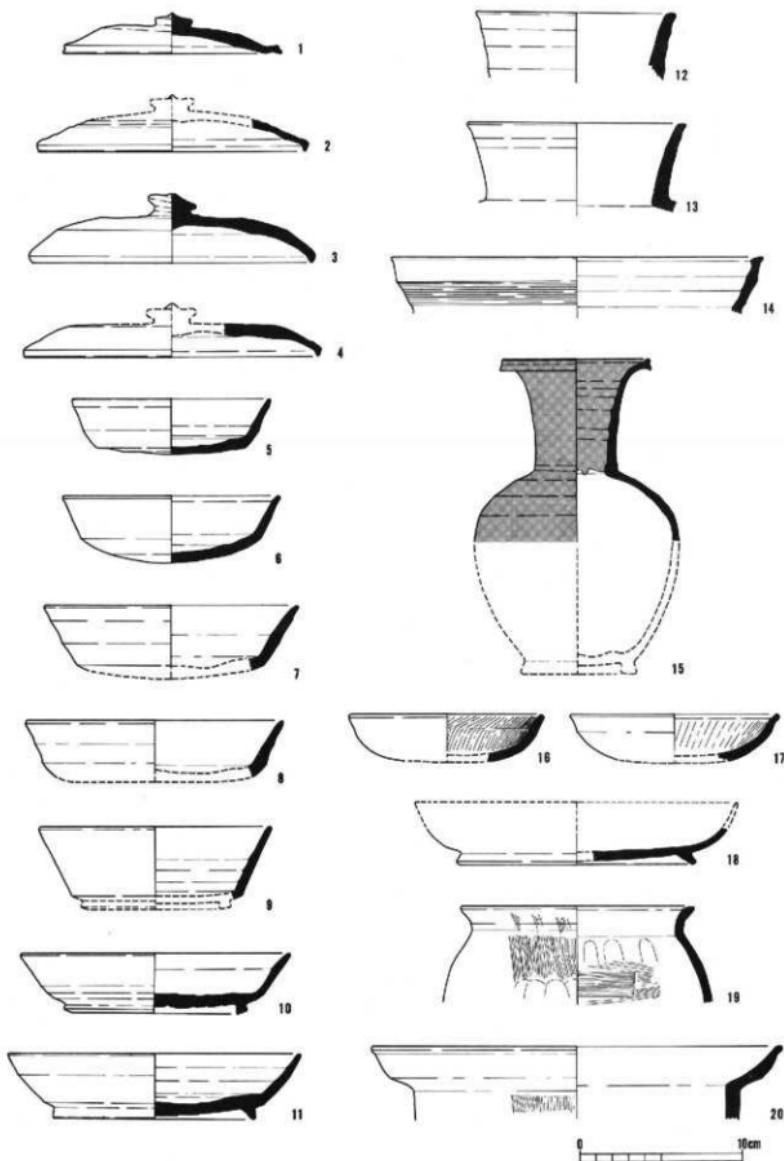
第2住居跡上層・下層 (T 2上・下) 実測図

PLAN 10

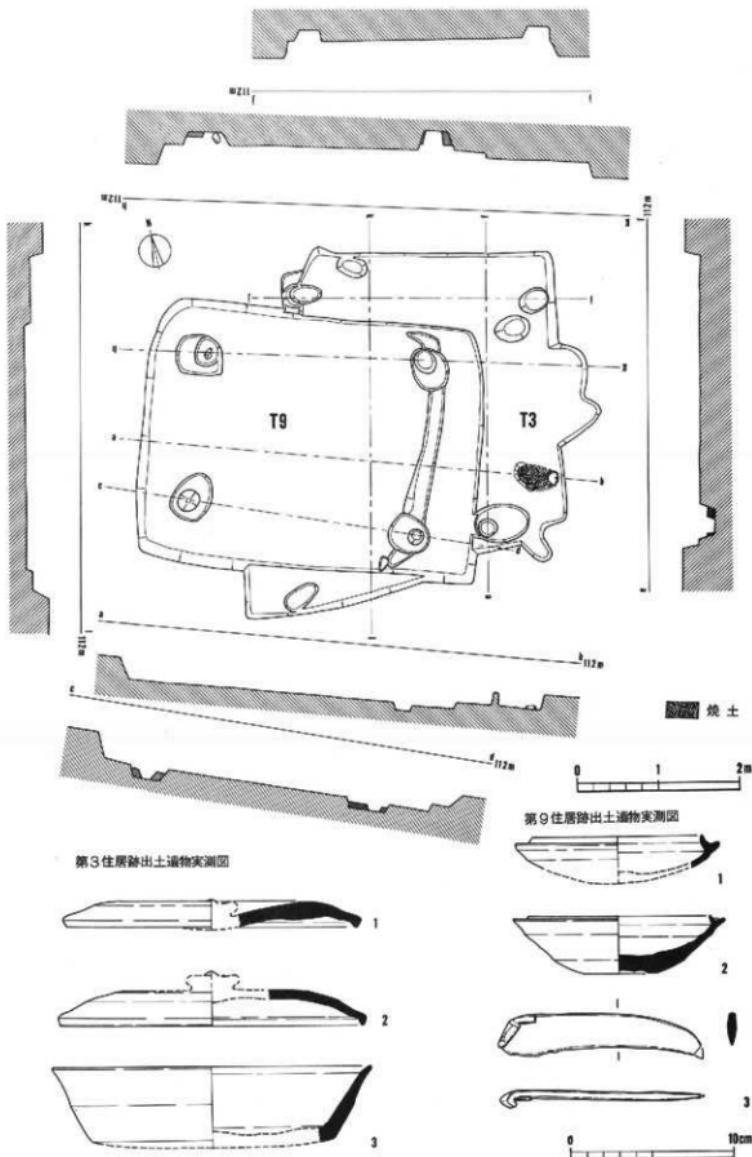


0 10cm

第2住居跡下層出土遺物実測図

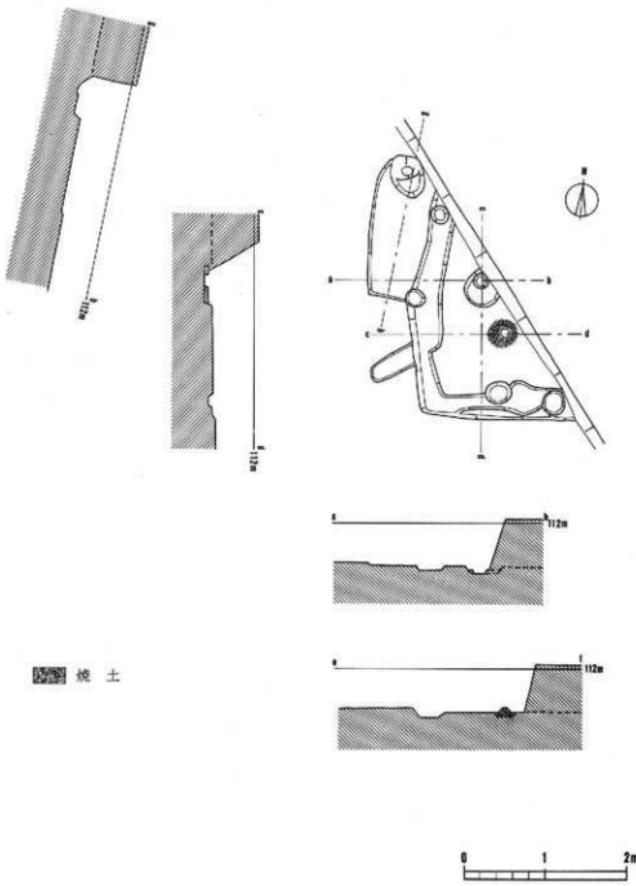


第2住居跡上層出土遺物実測図

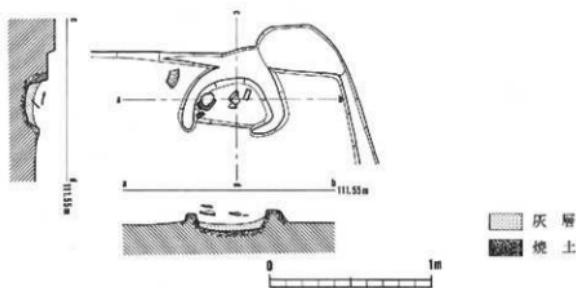
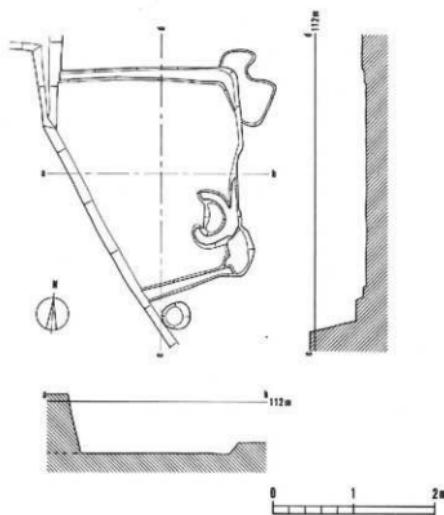


第3、第9住居跡出土遺物実測図

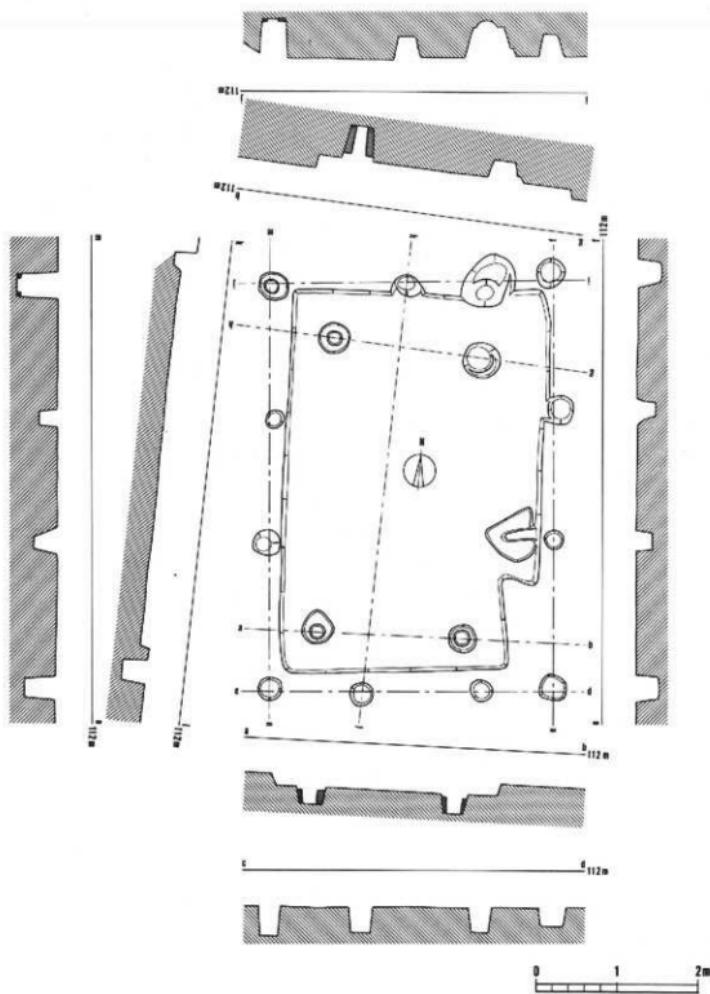
第3、第9住居跡（T3、T9）実測図、出土遺物実測図



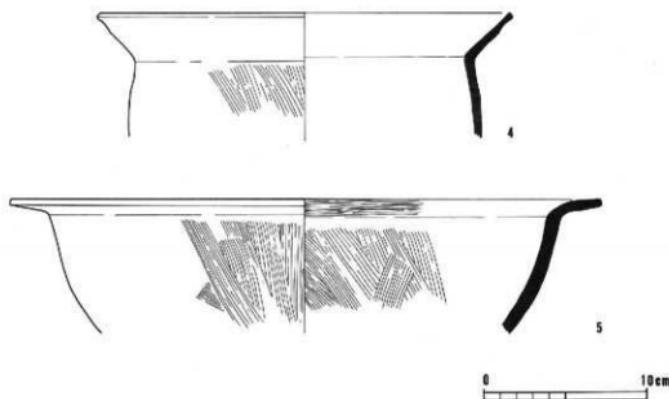
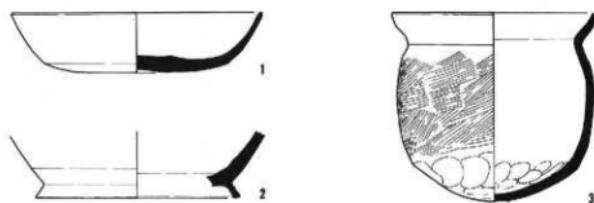
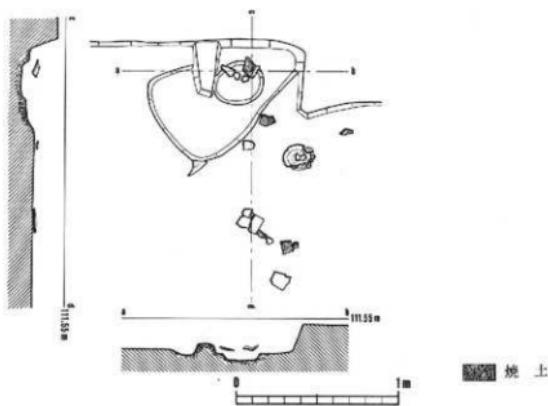
第4住居跡 (T 4) 実測図



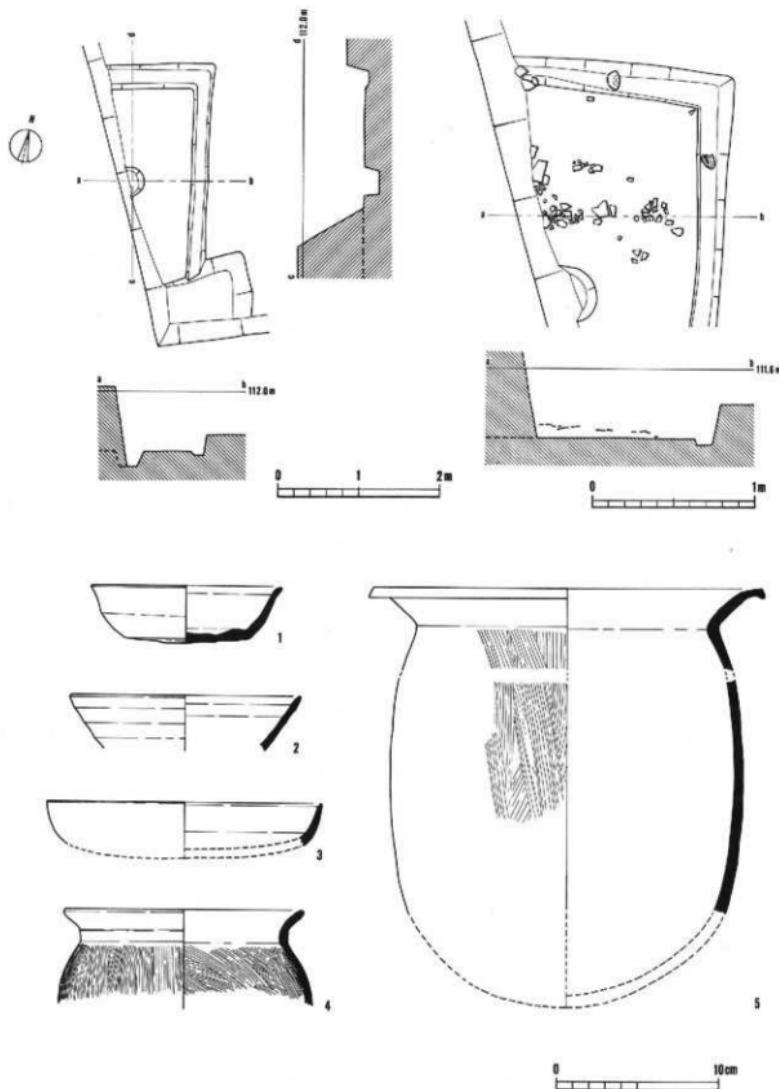
第5住居跡（T5）実測図、出土遺物実測図、カマド実測図



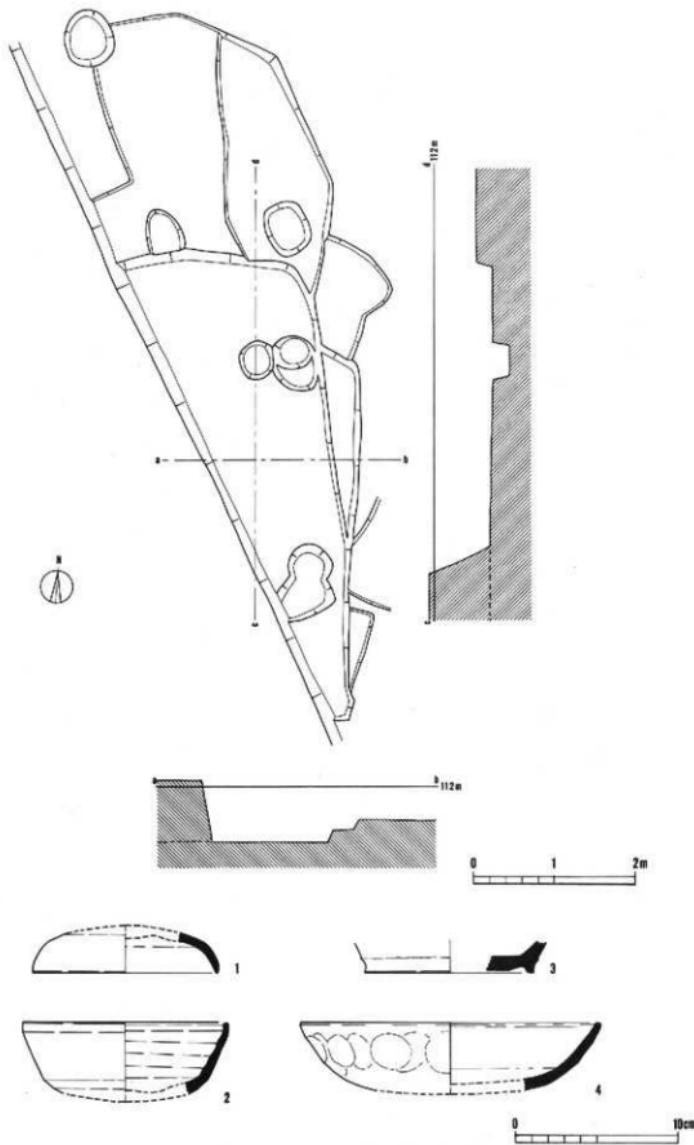
第6住居跡（T 6）実測図



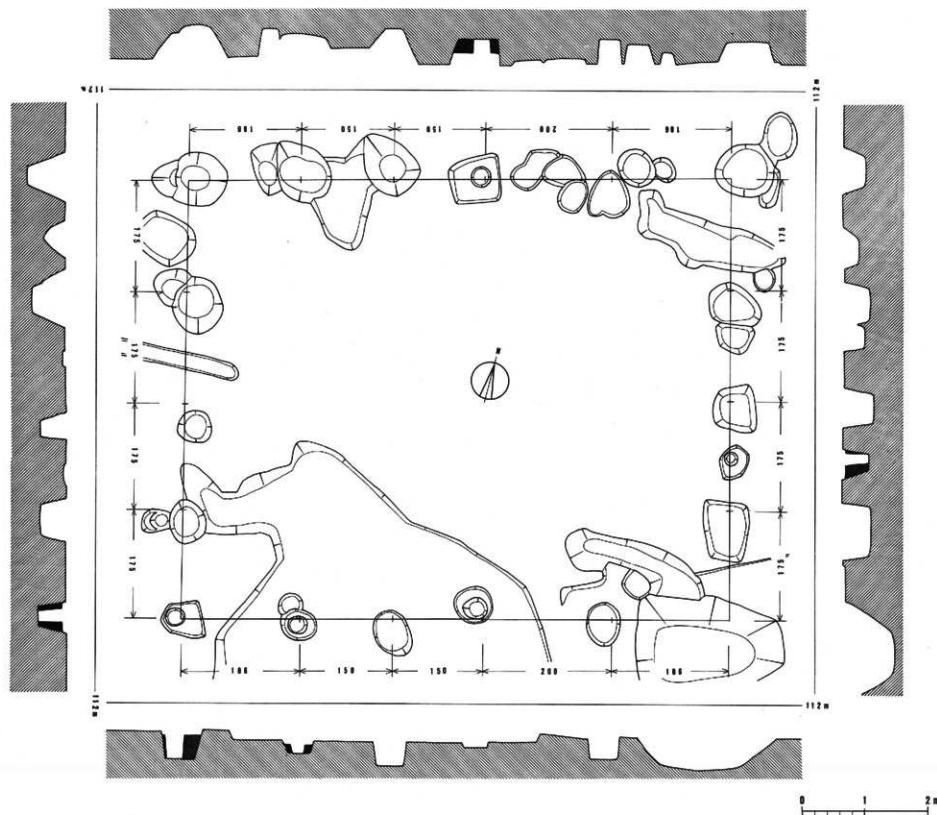
第6住居跡カマド実測図、出土遺物実測図



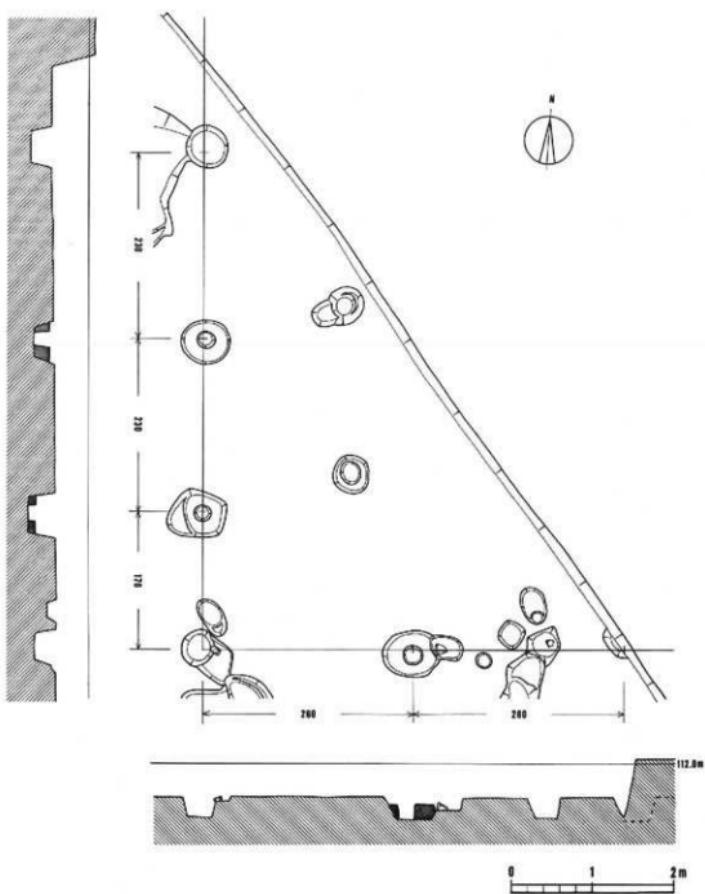
第7住居跡（T7）実測図、遺物出土状況図、出土遺物実測図



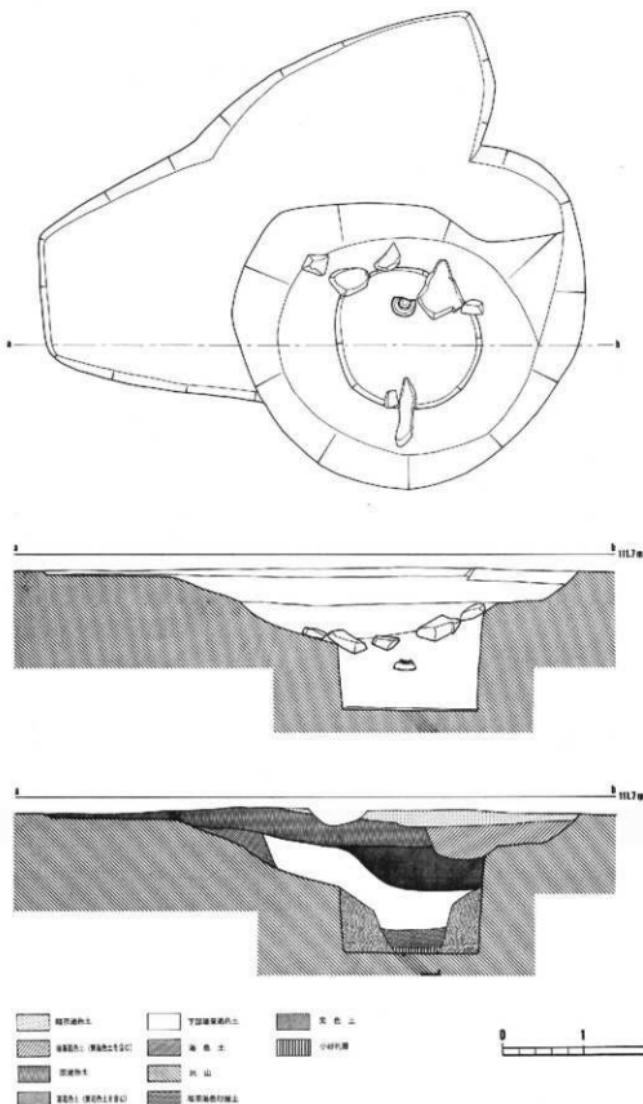
第8住居跡（T8）実測図、出土遺物実測図



第1掘立柱建物（H 1）実測図



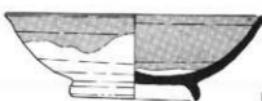
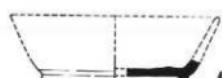
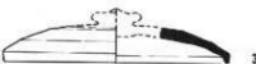
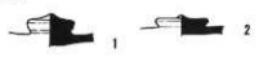
第2掘立柱建物（H 2）実測図



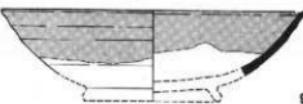
第1井戸跡 (B P 1) 実測図、断面実測図

PLAN 22

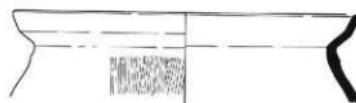
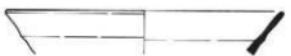
BP1



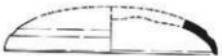
11



BP2



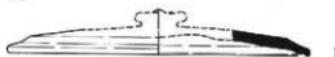
BP4



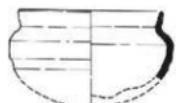
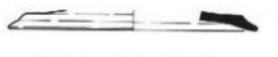
BP6



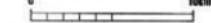
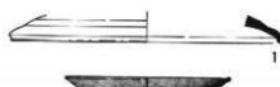
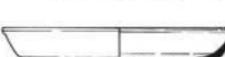
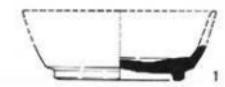
BP8



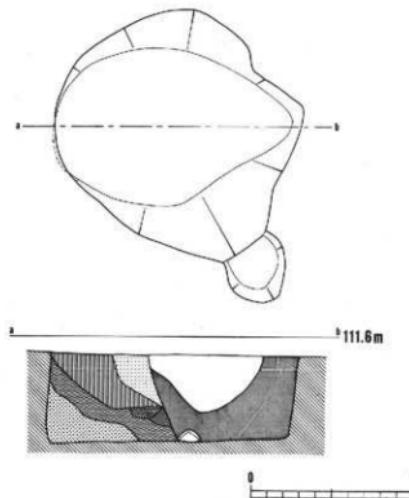
BP5



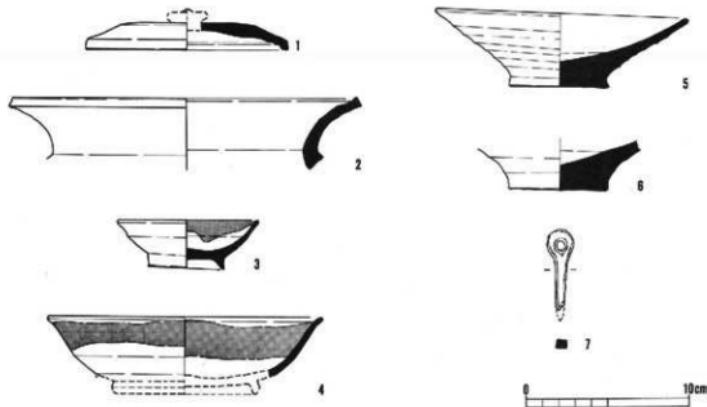
BP10



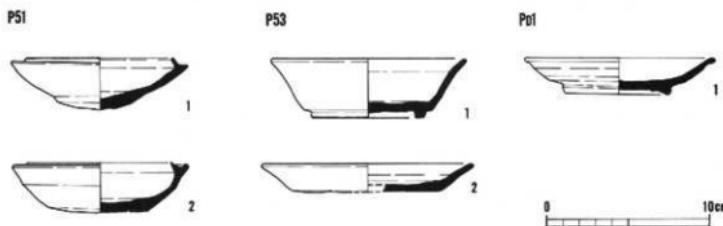
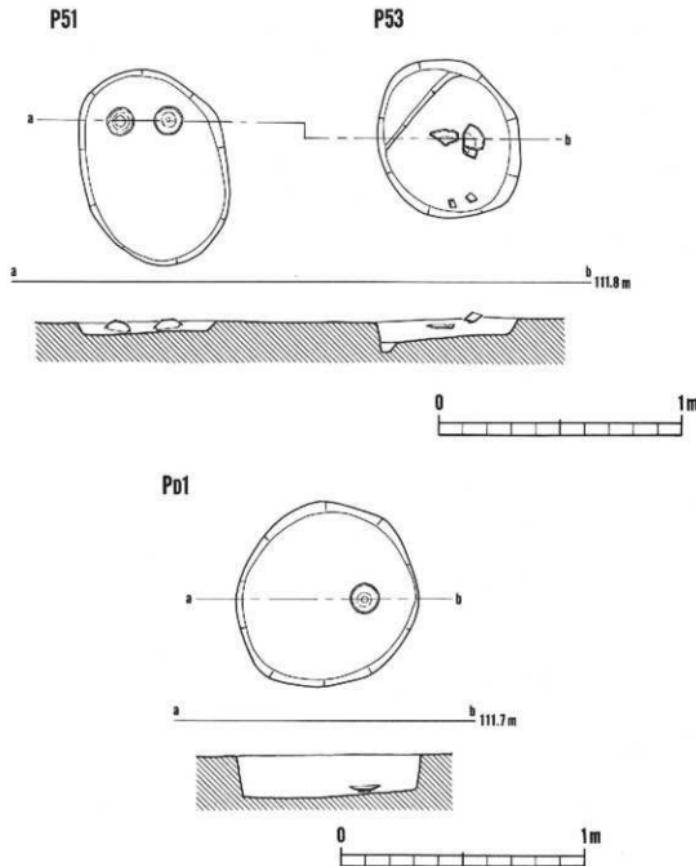
第1井戸跡、BP 2、BP 4、BP 5、BP 6、BP 8、BP10、BP13
出土遺物実測図



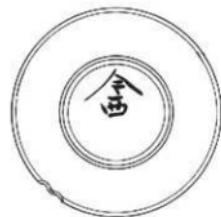
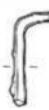
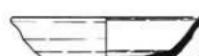
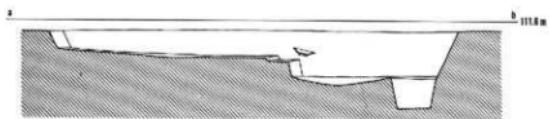
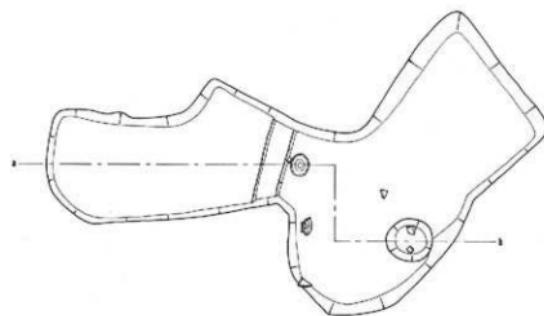
■ 暗黄褐色土層	■ 黄色土層
■ 黄褐色土層	■ 黑褐色土層
■ 暗黄褐色土層	■ 黑褐色土、燒土（炭を含む）
■ 淡黑褐色土層	■ 黑褐色土層



第2井戸跡 (B P 9) 実測図、断面実測図、出土遺物実測図

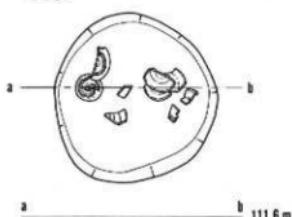


P51、P53、PD 1 実測図、出土遺物実測図

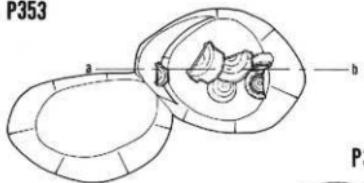


P54実測図、出土遺物実測図

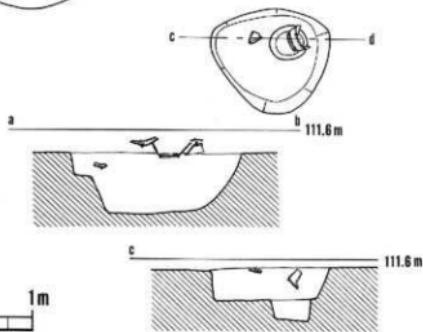
P351



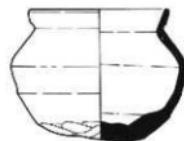
P353



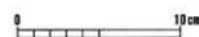
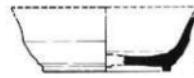
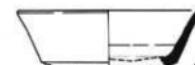
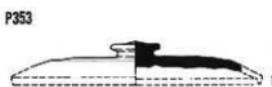
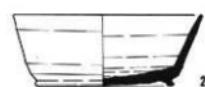
P350



P351

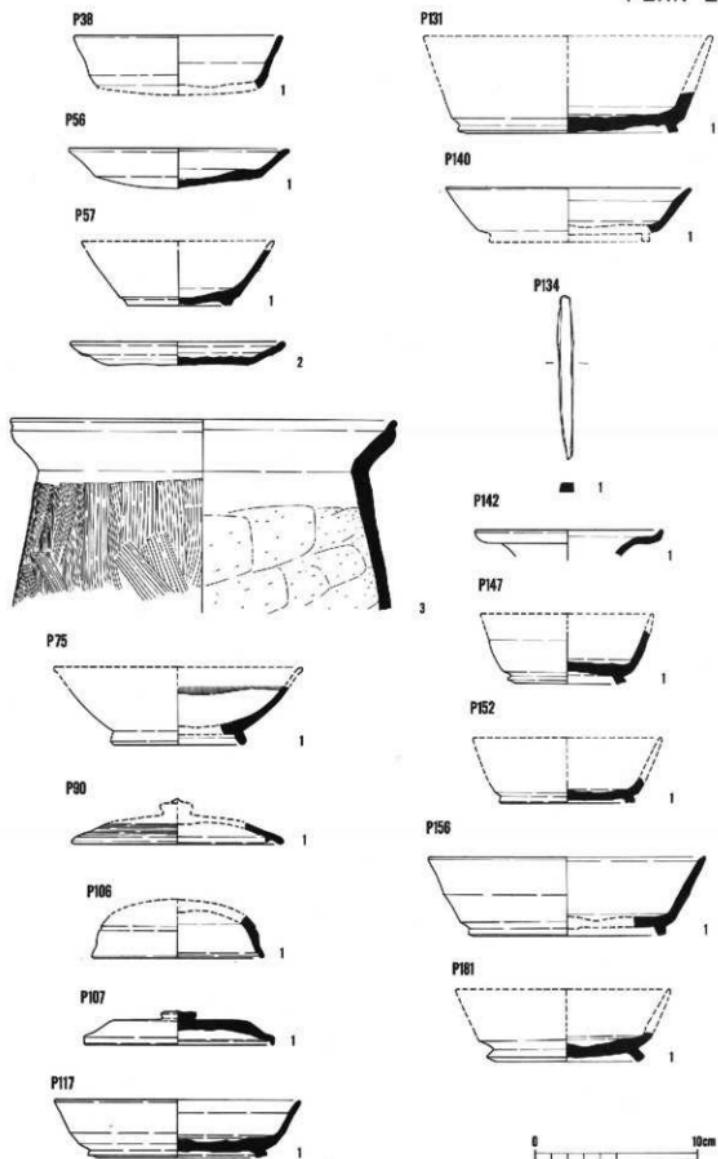


P350

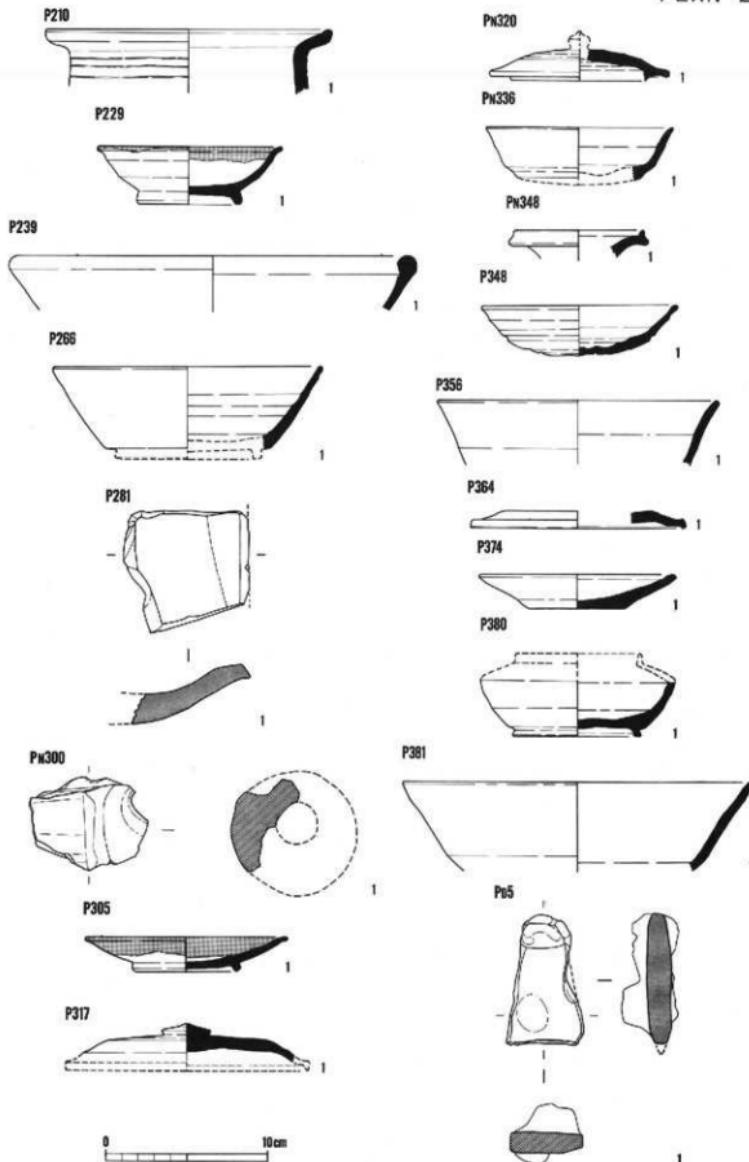


P 350、P 351、P 353実測図、出土遺物実測図

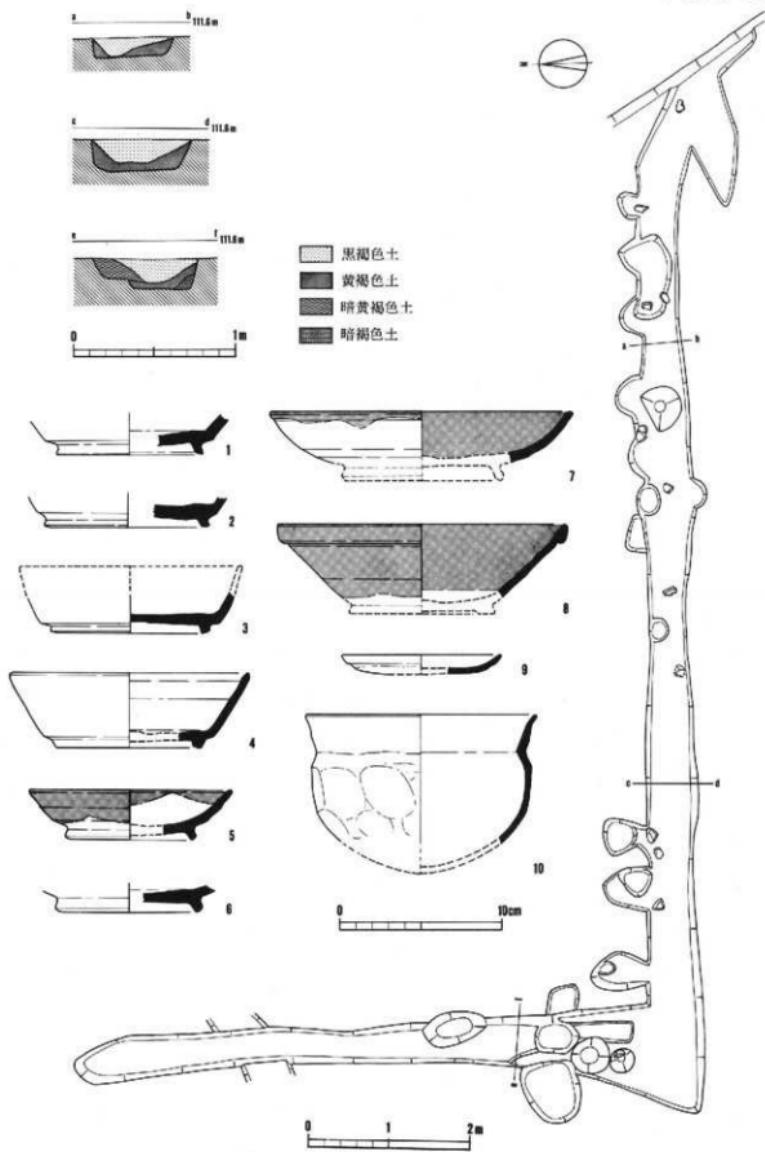
PLAN 27



P38、P56、P57、P75、P90、P106、P107、P117、P131、P134、P140、
P142、P147、P152、P156、P181出土遺物実測図

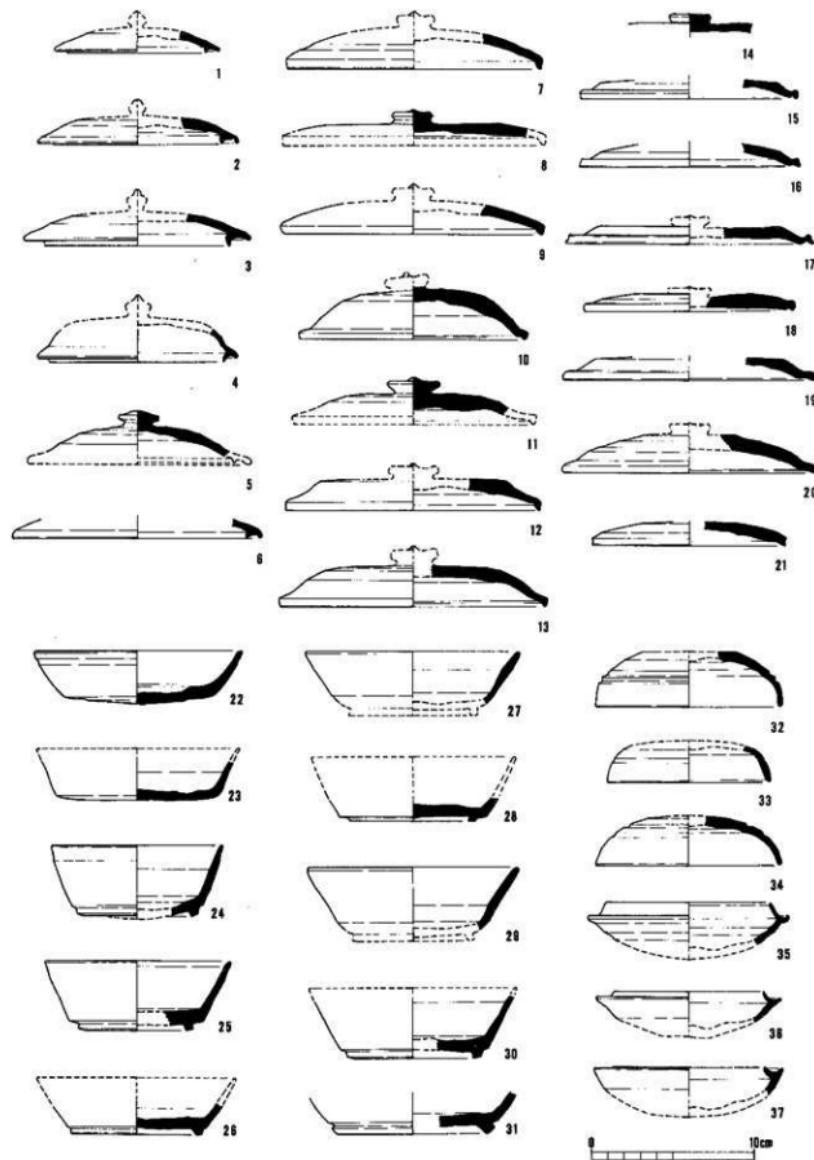


P210, P229, P239, P266, P281, PN300, P305, P317, PN320, PN336, PN348, P348, P356, P364, P374, P380, P381, P D 5 出土遺物実測図

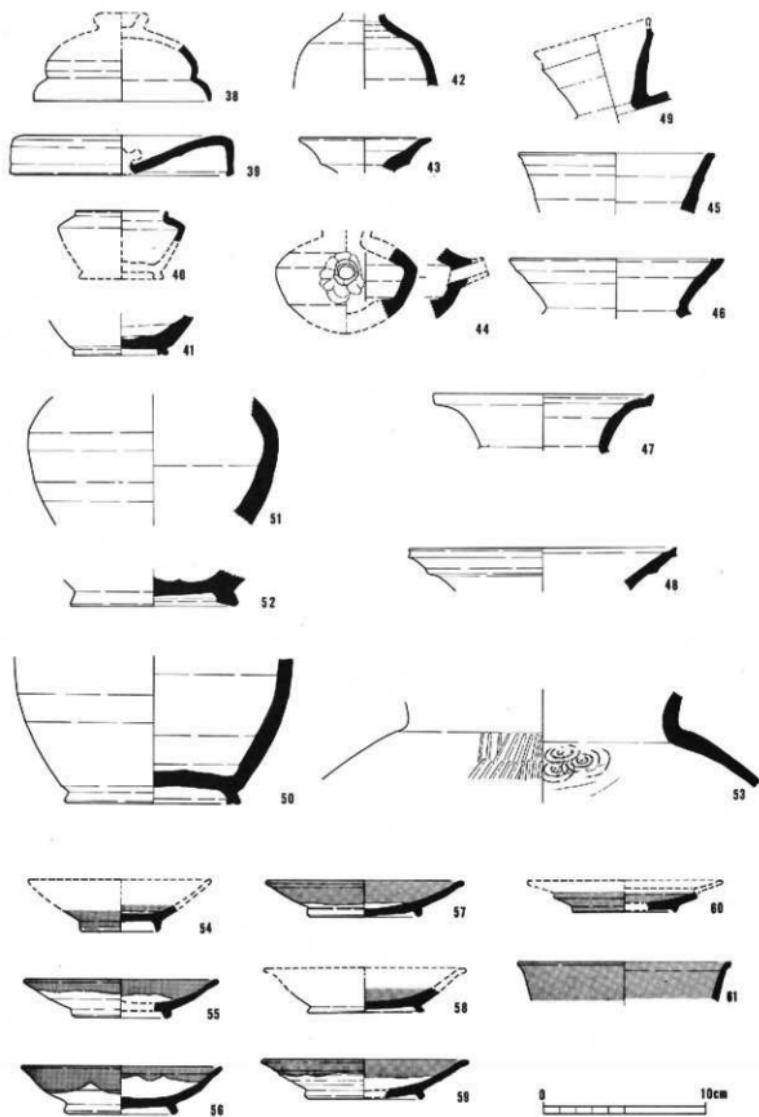


溝1（M1）実測図、断面実測図、出土遺物実測図

PLAN 30

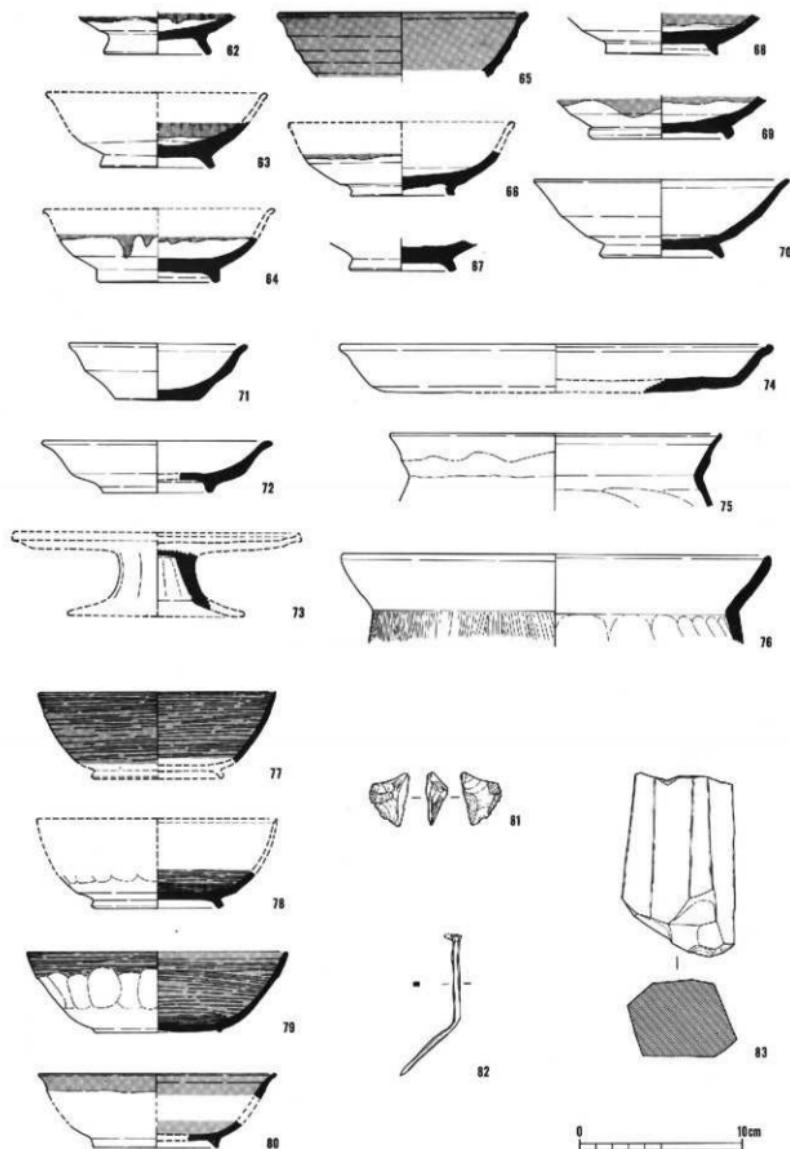


包含層出土遺物実測図(1)



包含層出土遺物実測図(2)

PLAN 32

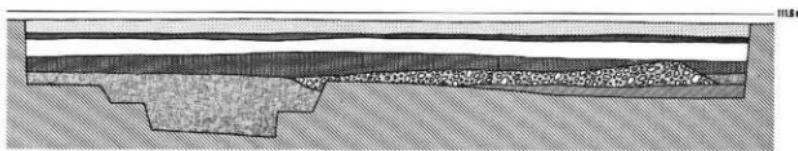


包含層出土遺物実測図(3)

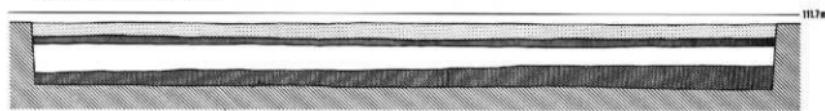
第1 トレンチ断面実測図



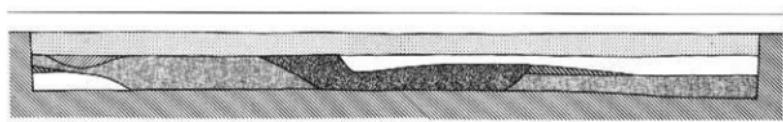
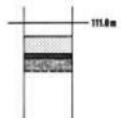
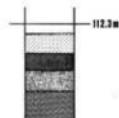
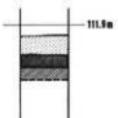
第2 トレンチ断面実測図



第3 トレンチ断面実測図

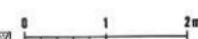


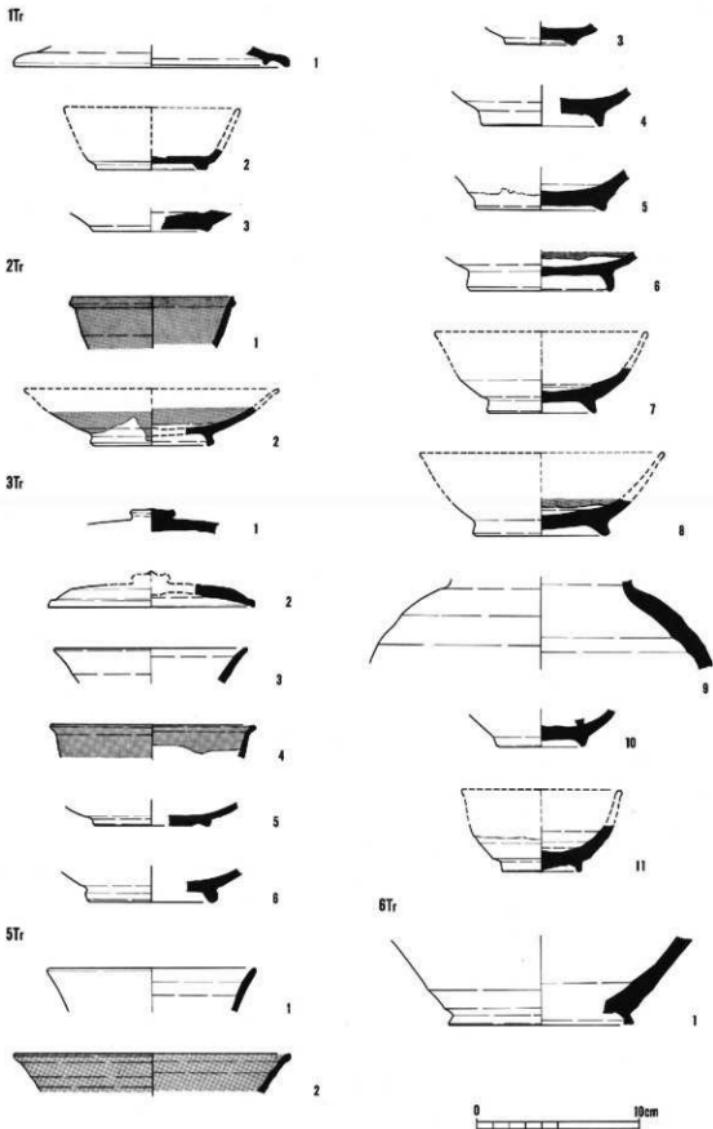
第5 トレンチ断面実測図

第4 Tr—No.1 トレンチ
柱状断面実測図第4 Tr—No.2 トレンチ
柱状断面実測図第6 トレンチ柱状
断面実測図

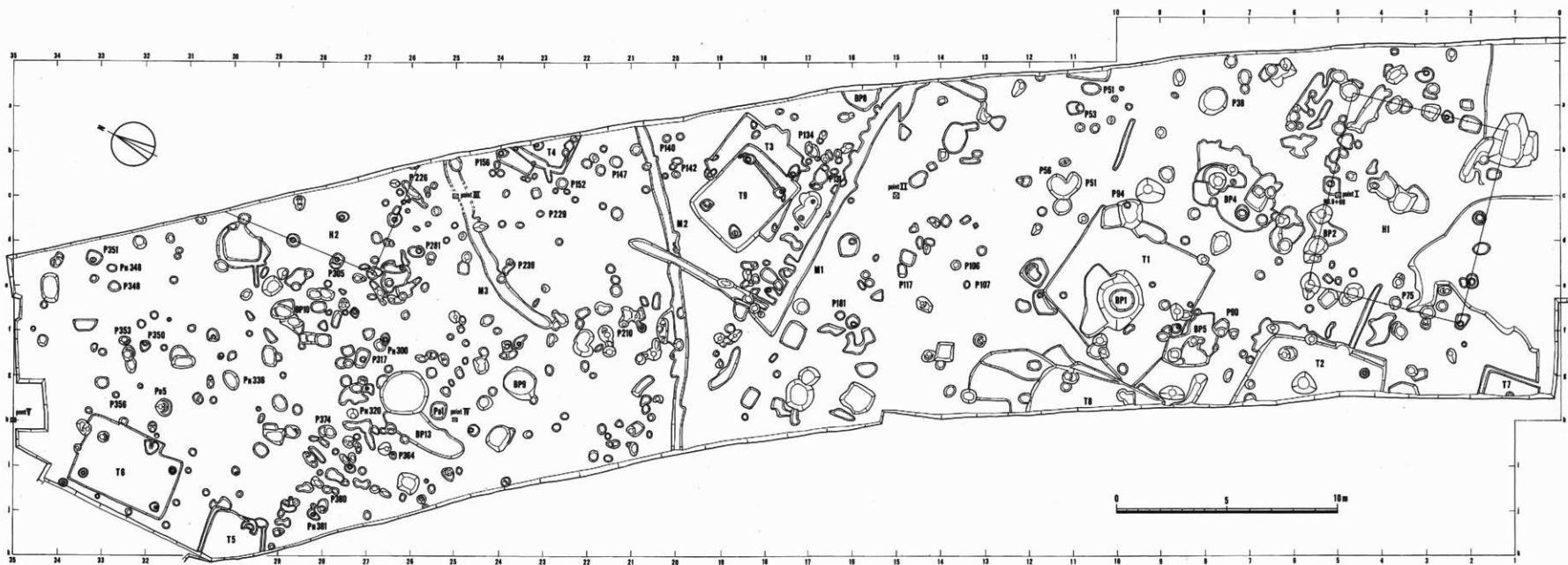
耕作土	黄灰色砂質土
床土(黄灰色土)	黄褐色砂礫層
灰色粘土	黒褐色土
灰色砂礫層	暗灰色泥質土(木の葉、 流水が多く含む)
茶褐色砂礫層	暗灰色粘土
灰色砂層	

第1 トレンチ (1 Tr)、第2 トレンチ (2 Tr)、第3 トレンチ (3 Tr)、
第5 トレンチ (5 Tr)、断面実測図、第4—No.1 トレンチ (4 Tr—No.1)、
第4—No.2 トレンチ (4 Tr—No.2)、第6 トレンチ (6 Tr) 柱状断面実測図





第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチ、第5トレンチ、第6トレンチ
出土遺物実測図

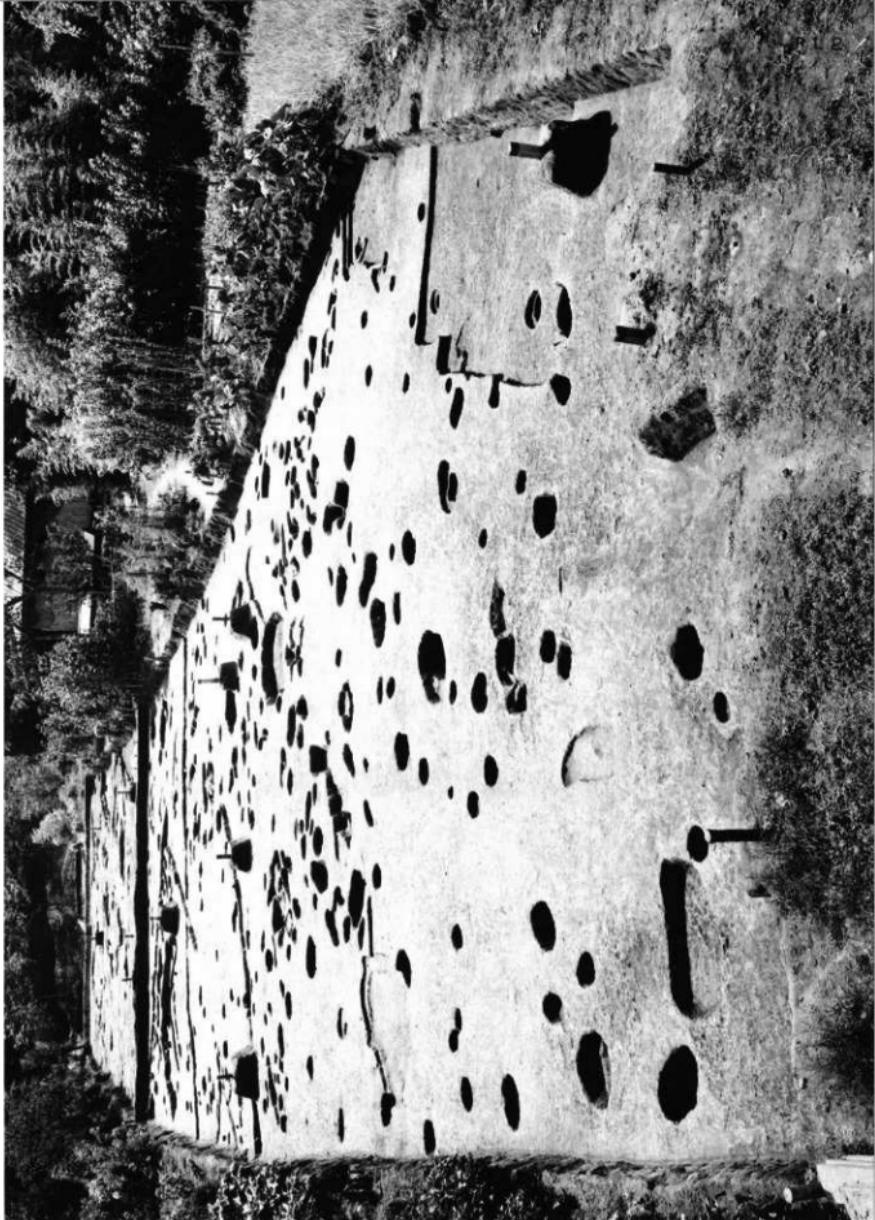


柏原遺跡全体実測図

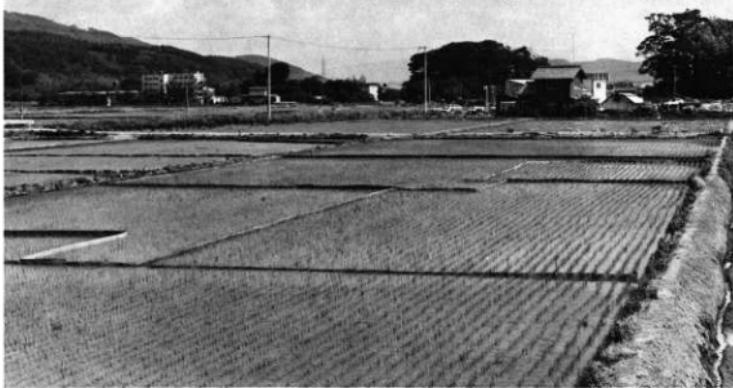


遺跡付近航空写真（昭和47年撮影）

- A 柏原遺跡
- B 柏原北遺跡
- C 井口遺跡



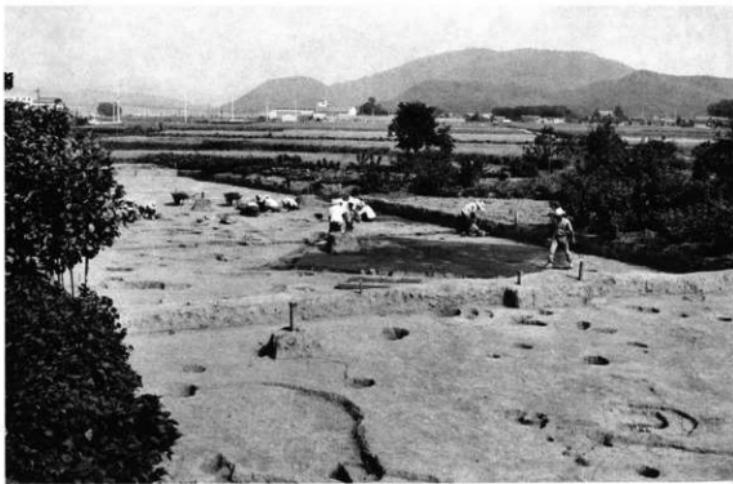
遺構全景(北から)



1 遺跡遠景
(北西から)



2 遺跡遠景
(北西から)



3 発掘調査風景



1 遺構検出状況(南から)



2 遺構全景(北から)



1 遺構中央、北半部(南から)



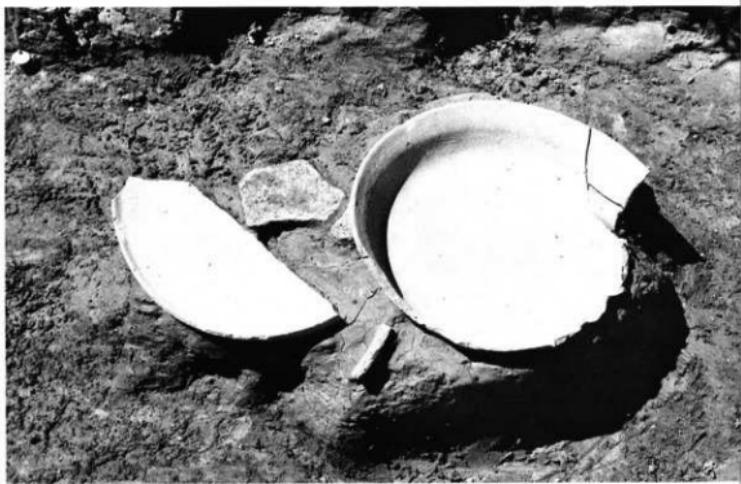
2 遺構南半部(南から)



1 第1住居跡(T1)
(北から)



2 第2住居跡(T2)
(北から)



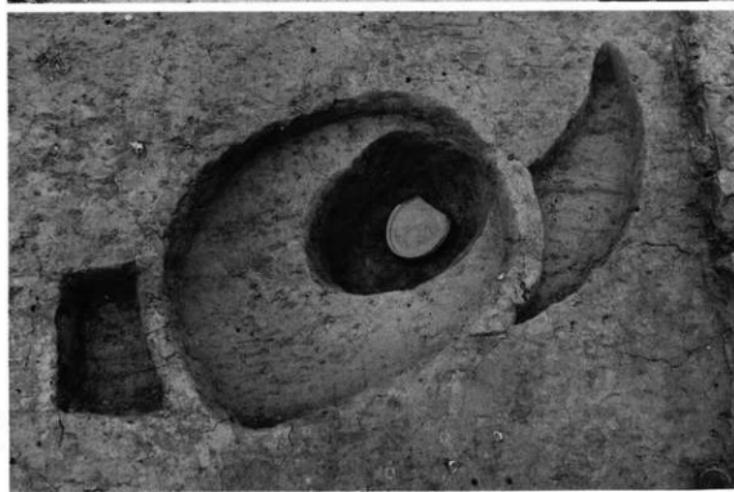
3 第2住居跡上層
遺物出土状況



1 第2住居跡下層
遺物出土状況



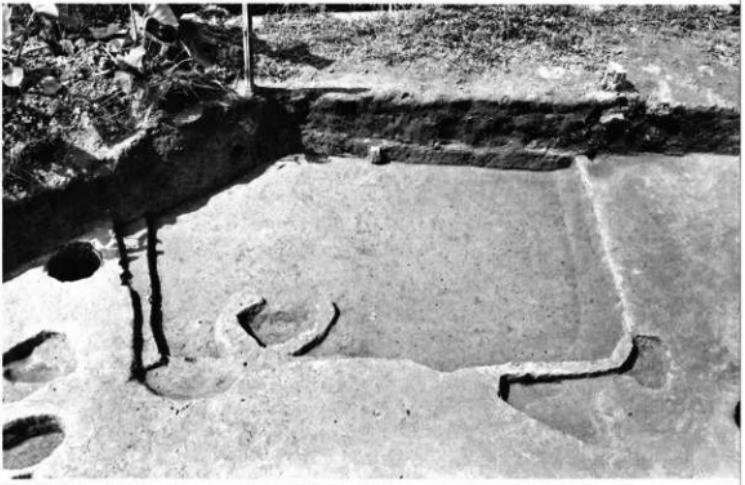
2 第3、第9住居跡
(T3, T9)(北から)



3 第9住居跡柱穴
内遺物出土状況



1 第4住居跡(T 4)
(東から)



2 第5住居跡(T 5)
(東から)



3 第5住居跡カマド
付近



1 第6住居跡(T6)
(東から)



2 第6住居跡
(北から)



3 第6住居跡カマド
付近



1 第7住居跡(T 7)
(南から)



2 第7住居跡遺物
出土状況



3 第8住居跡(T 8)
(南から)



1 第1掘立柱建物
(H1)(北から)



2 第1掘立柱建物
(西から)



3 第2掘立柱建物
(H2)(北から)



1 第1井戸跡(BP 1)
(南から)



2 第1井戸跡近景

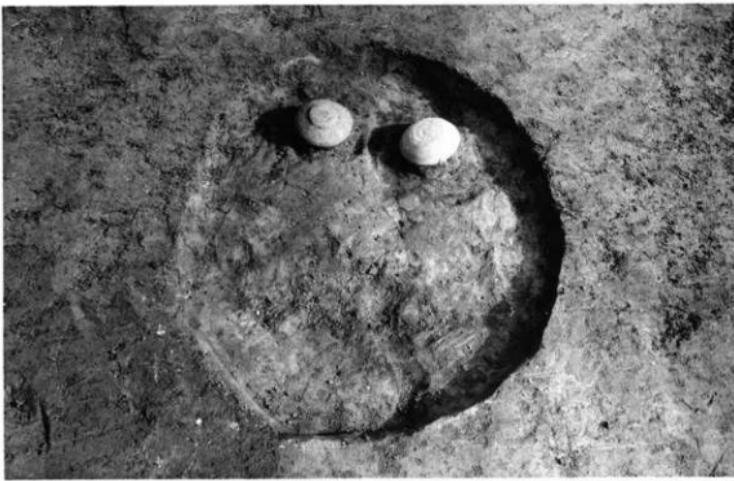


3 第1井戸跡遺物
出土状況

1 第2井戸跡(BP 9)
(西から)



2 P51



3 P51遺物出土状況





1 P53



2 P94



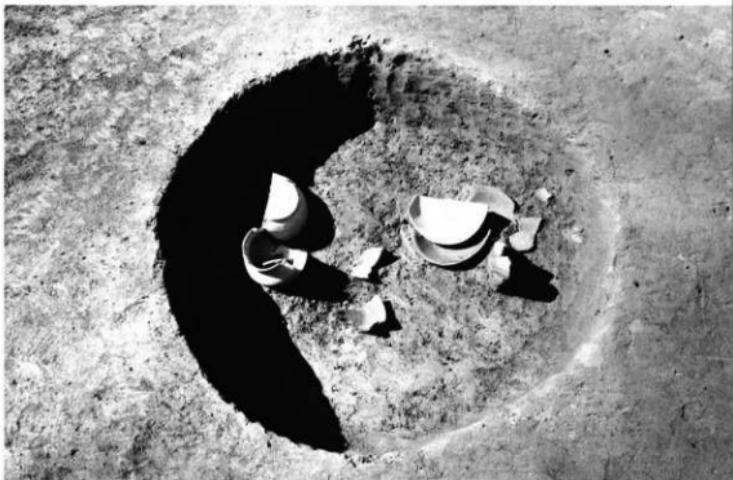
3 P94遺物出土狀況
(溫青土器)



1 PD1



2 P350



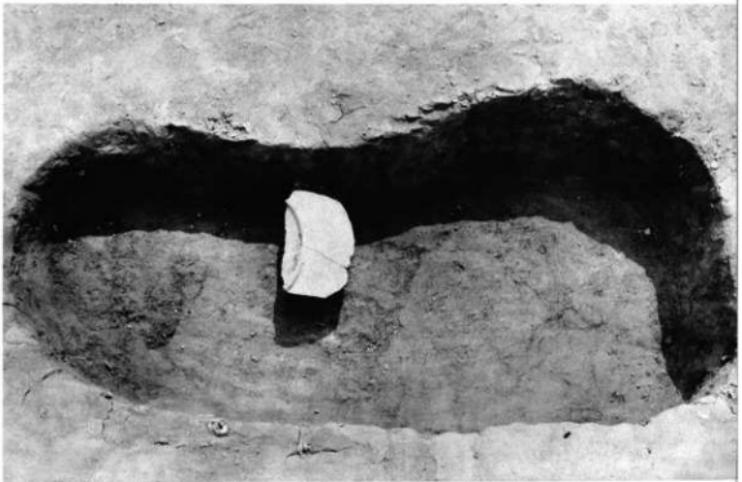
3 P351



1 P353



2 P131



3 P156



1 第1、第2トレンチ
(南東から)



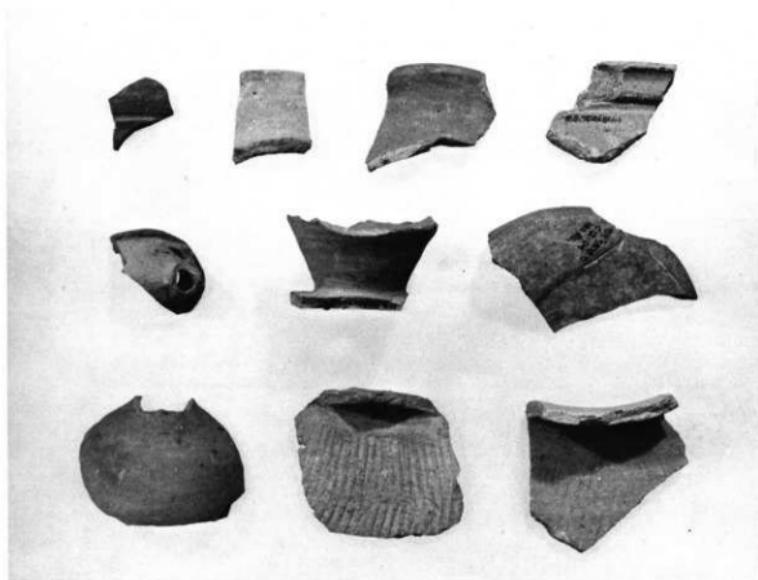
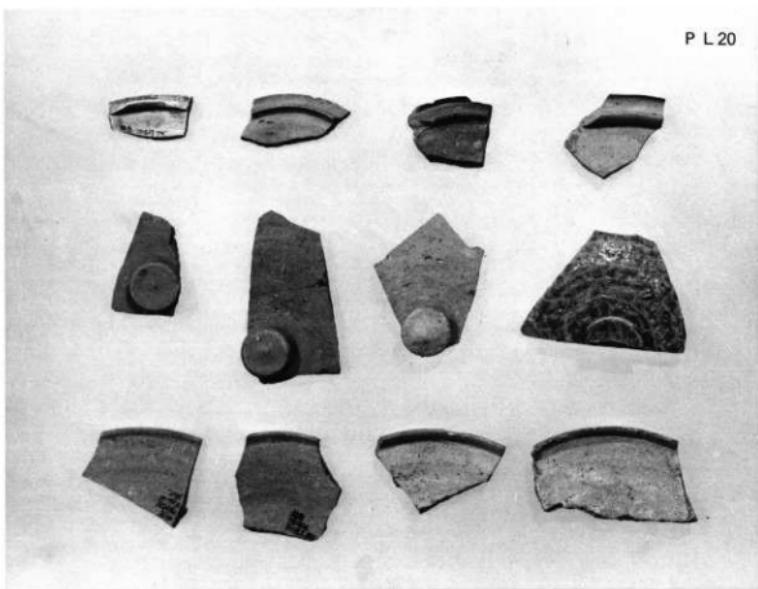
2 第4—Iトレンチ
(北西から)



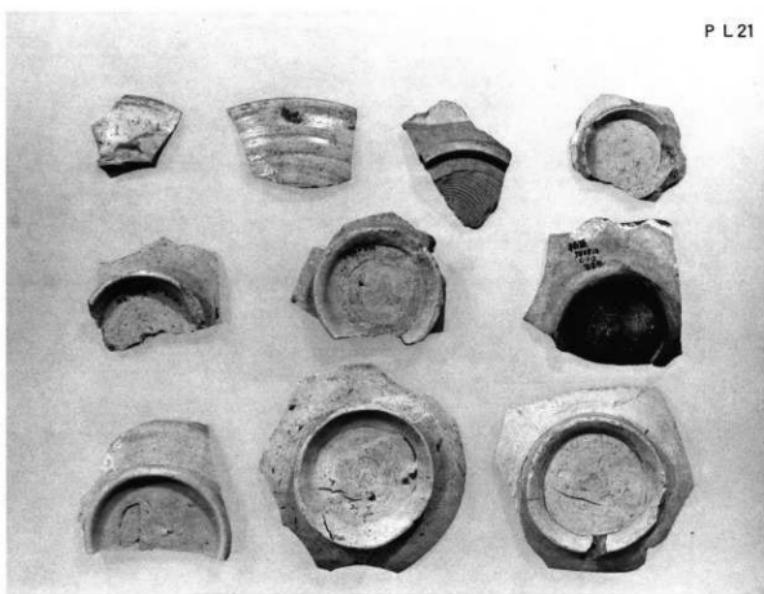
3 第6トレンチ
(北西から)



包含层出土遗物(1)



包含層出土遺物(2)



包含層出土遺物(3)

P L 22



T 2



T 2



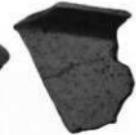
T 2



T 2



T 2



T 2



T 5



T 6



T 5



T 7

竖穴住居跡出土遺物



T 9



T 9



B P 9



B P 1



B P 9



B P 1



M 1



T

P L 24



B P



M I



トレンチ

大型土塙・溝跡・トレンチ出土遺物

P L 25



P 51



P 156



P 51



P 197



P 56



P 297



P 94



P 350



P 94



P 351



P 351



P 94



P 351



P 117



P 351

ピット出土遺物(1)



P 353



P 374



P 353



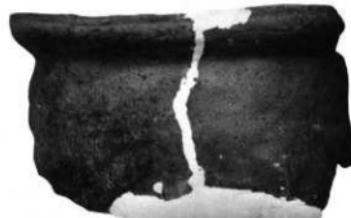
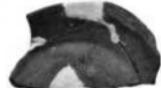
P 380



P 353



P01



P

P

埋蔵文化財発掘調査報告書 I

昭和 55 年 3 月

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

助成 滋賀県文化財保護協会

印刷 富士出版印刷株式会社